

俺がメスガキに負ける
訳がない。

ゆっくりシン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

教師五年目となる つきしろ 月城 たくみ 匠（童貞）は特別クラスの担任になった。

だが、そのクラスにいる三人の生徒は生粋のメスガキであった。

これは、童貞教師がメスガキを相手に精神を削りながら生活をする物語。

この作品はpixivにも投稿しています。

(<https://www.pixiv.net/novel/series/1157445>)

目次

キャラ設定みたいなやつ	1
1話 『メスガキが生徒とか聞いてない』	5
2話 『対抗策は、』	17
3話 『あゝ、もうめちやくちやだよ』	27
4話 『“ポケットモンスター”ってどうして海外では“Pok・mon”かは知ってるかい？ポケットモンスターって海外ではち○この事を指すからなんだよ』	40
5話 『不穏な気配』	53
6話 『重なる問題。痛くなりだす胃（ストレス）』	65
7話 『DBって男の憧れが詰まってるよね。まあ、特に本編に関係ないけど』	79
8話 『少女はただ本気を出していなかっただけなのだっ』	91
9話 『知り合いと情報』	104
10話 『過去』	116
11話 『バレた』	128
12話 『滝①』	140
13話 『滝②』	151
14話 『特別な日』	164

- 15話 『前半は伏字が多めだけどこんな回があっても良いと思う』 — 175
- 16話 『クソウサギ×す b.y. 作者』 — 187
- 17話 『それぞれの休日』 — 197
- 18話 『じわじわと外堀を埋めていきたい』 — 212
- 19話 『一気に時間軸を飛ばすのもありかと思っただが、それだとじわじわと外堀を埋めていくところが描けないからどうしようかと悩んでいる件』 — 223
- 20話 『見えない所で話が進んでることあるよね』 — 234
- 21話 『とある休日』 — 244
- 22話 『ゲームばかりしていると小説書いている時間って無くなるよね (b.y. 作者)』 — 256
- 23話 『作者は猫大好きで猫アレルギー。でも定期的に顔を埋めてはくしゃみのし過ぎで死にかけている』 — 267
- 24話 『嫌いだ。』 — 281
- 25話 『あつ・・・』 — 293
- 26話 『お誘い』 — 301
- 27話 『パーティー開始と不穏な影』 — 314
- 28話 『魔の手』 — 328

29話 『事件に巻き込まれようとも、深く関わらなければ案外刹那に終わる』

344

30話 『溝』 356

31話 『悩み』 368

32話 『英雄のヒロイン』 377

33話 『一步』 388

キャラ設定みたいなやつ

『月城匠』
つきしろたくみ

教師として大きな理想を持ち強いメンタルの持ち主。

メスガキに煽られたからと言って「このっ！ 大人を舐めやがってツツ（ビキビキ）」なんて事は無く説教カスルーの二択。

スポーツ選手等が使っている呼吸法の亜種で心拍と精神を安定をさせており興奮も抑えている為に基本的に勃起しない。

友人関係は基本悪友ばかり。

『桃知茜』
ももちあかね

メスガキ。

本来なら子供なのにも関わらずメスのホルモンを出して大人を誘惑しているのだが、月城の鋼メンタルの前では無意味に終わっている。

両親は多忙で家なかなか帰って来ない為、寂しさを紛らわすために色々やっていた結果、性に目覚めた。

生ハメしていないせいで最近では欲求不満。

最近作者が軽く纏めていた初期設定メモ帳を開いたらツイーンテール設定だった事が書かれていたが、現在の短髪設定でいいやと無かった事にされた。

『早川優歌』
はやかわゆうか

メスガキ。

大企業の令嬢であり会長である祖父が甘々なので上手に使っている。

一度ターゲットを決めたらその相手に満足するまで他の男に見向きもしない。

令嬢であるが故に身代金目当てで狙われることがあり、過去誘拐された際に襲われ性に目覚め、そのまま男たちを搾り枯らした。その後、『とある少年』に救出される。

『暗視波奉』
あんしはほう

メスガキ。

恥ずかしがり屋で前髪を伸ばし、目を隠している。実は乙女心は三人の中でも一番大きく好きになれば一途。

同じ服を幾つも所持しており年中そこまで服装が変わっていない。

普段はオドオドしているが一度スイッチが入れば後は発情した獣になる。

『三宅葵』
みやけあおい

月城の同僚。

教師としての評判は頗る良くて、担当クラスの男子生徒には確定で告白されるが軽く

流している。

性欲が強く教師の何人かは喰ってる。

『とある少年』

作者の別作品の主人公。

神出鬼没な所がある為、もしかしたら本編に登場するかもしれないし、少し匂わせがあるだけで登場しないかもしれない。多忙な為に優歌の事は半分くらい忘れてる。

『大森マコト』
おおもり

月城の悪友。

情報屋をしており、所謂反社会的組織とも関りがある元男。

金になるなら親でも売る人間性を持つが、それはそれとして友情は裏切らない。

作者の別作品の主人公の親戚という設定があるが恐らく作中で生かされることはない。

『熊谷ユウト』
くまがい

月城の悪友。

身長二メートル超の筋肉ダルマの床屋。

豪快な性格だがメール等のやりとりの際は短いメッセージだけで淡泊な印象を受ける。

『金髪パツキンの男』

パチカス。

情報屋の真似事をしているが本業はプロのパチ打ち。

最近そろそろ借金がヤバイ。

1話 『メスガキが生徒とか聞いてない』

教師になってから早三年。

俺は今、新しい小学校にへと赴任することになりワクワクしている所である。

本当なら子供たちが春休みの間に色々と準備をしてしまうのだが、なぜか新学期初日に来るようにと言われた。

なぜなのだろうと思う反面、どうやら机とか身の回りの事は向こうで勝手にやってくれるらしいのでラッキーだと思う。

そして、今回、俺は特別クラスの担任教師として選ばれたらしい。

だが、それに関しての説明も一切されていない。

そこに不安を覚えると同時にどんな子供と出会えることになるのかが楽しみでもある。

校長先生曰く、「出席簿に色々書いてあるからそれ読んであとは自分なりにやりなさい」との事。

ただ、この話をしているときに校長先生の目が遠くなっていたのが気になるが今は気にしないでおく。

俺が担当することになった教室は『特別支援学級』だった。

『特別支援学級』とは身体的障害または発達障害などで勉強をするのが難しい子供たちのサポートをする所であると考えていただければいい。

だが、俺には気になる事が一つあった。

(『特別支援学級M』ってなんだ?)

普通の『特別支援学級』と違うという事だけは理解できたが、名前にある『M』の意味だけがどうしても理解できないのだ。

それでも、行ってみれば分かるだろうと前向きに考え、担当の教室へと向かった。

教室があるのは東校舎三階の一番奥にある大きめの教室。

なぜ三階なのだろうかという疑問はあるが今は気にしない。

今一番気になるのは、なぜ東校舎に『特別支援学級M』があるのか、という事である。

この学校は一学年二クラスしかなく、西校舎と中校舎に全学年が入っているだけではなく、保健室・調理室・理科室・音楽室・音楽準備室・職員室・図書室・特別支援学級、この全てがあるだけでなく余っている教室もいくつあるのだ。

それなのに、『特別支援学級M』だけ隔離されているかのように東校舎にあるのだ。

(隔離されてるって事は、それだけ素行が悪いって事か? いや、でもそれだけで隔離するなんておかしい。いったいどういう事なんだ?)

そんな疑問を抱えつつも、俺は歩を進める。

渡り廊下を抜け、階段を上がって廊下を歩く。

その間、聞こえてくるのは静かな風の音だけだった。

教室のドアの前に立ち、静かに深呼吸をする。

教室内からは子供の話声が聞こえてくるが、小声なのかよく聞き取れない。

俺は深く深呼吸をした後、ガラリと扉を開けて中に入る。

中にいたのは三人の女子生徒で、俺が教室内に入ると同時に俺の方に視線を向けてきた。

緊張しながらも黒板前の教壇に立ち、言う。

「初めまして。君たちの担任になった『つきしろたくみ月城匠』だ。まあ、多少至らない点があると思

うけどなるべくそうならないように頑張っていくからよろしく」

俺がそう言うと、三つ横に並んでいる席の真ん中にいる桃色の髪をした少女がケラケラと笑い出した。

「せんせえ、こども相手に堅いよお。もつと柔らかく行かないと駄目だよ。でも、

『アッチの方』は固くないと駄目だよ」

そう言いながら笑顔を向けてくる少女。

俺は出席簿を開き、名簿を確認する。

新任の俺でも分かりやすいように顔写真が張られていた為、すぐに顔と名前が一致した。

堅苦しい俺の挨拶に笑った桃色髪の少女は「桃知茜」という名前らしい。

「ってか、『アッチの方』って何だ？」

俺の中に一つの疑問が生まれたが、それを保留にしてもう一度出席簿を見る。

桃知から見て左隣にいる青く長い髪の少女が「早川優歌」で、右側にいる茶色の髪を伸ばして目を隠している少女が「暗視波奉」というらしい。

全員の名前を確認した後、俺は少し息を吸い、『精神を落ち着けて』から言う。

「ここでみんなの自己紹介をして欲しいところなんだが、これから入学式と始業式があるので自己紹介はその後に……」

俺がここまで言った所で、

「そんなのいーんだよー」

と桃知が口を挟んできた。

俺がその言葉に疑問を覚えると同時に早川がクスクスと笑いながら手を上げて言う。

「先生。もしかして出席簿の最初のページ読んでいらつしやらないんですか？ それでしたらまずはそれをお読みになった方がよろしいかと」

最初のページ？

俺は早川に言われた通り出席簿の最初のページを開いてそこに書かれている事を読む。

一、自身の身の危険を感じた際や教育の一環としての多少の暴力は容認する
二、学校行事に彼女らを参加させてはならない

三、この教室内であつた事は重大事故や殺人以外はなかつた事とする

四、東校舎は好きに使用してよし

等々様々な注意書きが書かれていた。

なるほど。桃知がした「そんなのいい」発言はこう言うことなのか。

しかし、ここにこのように書かれるという事は何か問題を起こしたが故の気がして仕方なかつた。

その為、俺は質問をする。

「どうして行かなくて良い事になつたんだ？ もしかして何か問題でも？」

「あく。なるほど。先生なにも聞かされなくて来た人ね。しよおくがないなく」

桃知がニヤニヤと笑いながらそう言う。

なにか舐められている気がするが、これぐらいの子供なら大人に対して尊大な態度を取る子も多い為スルーをしておく。

そんな俺の心境を余所に桃知はさらりととんでもない事を言った。

「アタシたちが保護者連れ込んでパコパコしちゃったからなの」

俺は無言で頭を抱える。

普通に小学校の教員が小学生の児童から聞いてはいけない単語が出て来ていた。

慌てて出席簿を開き二ページ目へとめくってみるとそこには、

最後に、彼女らに欲情した場合が好きにするがいい。ただしそれで酷い目に逢つても

学校側は何ら保証をしないものとする

とだけ書かれていた。

俺は頭を抱えて蹲るしかなかった。

なぜなら、俺が此処の担任に選ばれた理由がよく分かったからである。

そして、俺の予想通りなのだとしたらその役目を俺が背負わされるのは必然であった

ようにも感じる。

こうなつて思う事は『こんな特技』なんて付けなければよかった、という事だ。

まず教師という立場で生徒をこのように言うのは不本意だがあえて言わせてもらう。

こうなる前にコイツらをどうにか出来なかつたのか。

ただ、その一言に尽きる。

これから一年間コイツらと生活をしなければいけないのか、と考えると気が重くなる。

だとしても、選ばれてしまった以上、気張っていくしかない諦める。

俺は深いため息を吐いた後、彼女らに向き直った。

「そ、それじゃあ、自己紹介してもらおうか。えーっと、考える時間とかあった方が良いでしょうな」

「そんな回りくどいの良いから」

ズバツと桃知に切られた。

何か、こう、子供に言われると心に来るものがあるね。

「そ、それじゃあ、まずは桃知さんから」

俺がそう言うと、桃知が手を上げて「まずアタシからね！」と元気よく言った。

そして、机を横にずらし、座っているその全身が見えるようにしてきた。

なぜなのだろうか、という俺の疑問は次の瞬間には解決していた。

「桃知茜、一歳でくす。好きな事はおつきいおちんぼで子宮を突かれる事です。ヤリたくなつたらいつでもパコパコしていいよ〜」

そう言いながら片足を椅子の上にあげ、スカートをめくると穿いている下着、黒い紐パンツをこちらに見せてきた。しかも、片手を何かを掴んでいるかのように丸くし、口の近くで動かしている。

その顔は確実にこちらを舐めているようで、めちやくちやニヤニヤしていた。

俺は少し『意識的な呼吸』をしてから言う。

「はい。おふぎけは止めてください。……では次、早川さんお願いします」

俺の言葉に桃知の方を見て笑いをこらえていた早川がハツとしてからこちらに視線を向けて言う。

「早川優歌でございます。好きな事は大人の人が私の小さい身体からだに欲情して動物みたいに腰を振ったり、子供に馬鹿にされておちんちんを勃起させて自分でシコシコしている姿を見る事です」

こつちもか。

一見マシに見えたのだが、どうやら本質は桃知と同じらしい。

俺の方を見ている早川の目はとろんとしていて、頬は赤くハアハアと息遣いも荒かった。

多分、変な妄想をしているのだろう。

「はい。それじゃ次、暗視さんお願いします」

そう言つて暗視の方に視線を向けると、彼女は下を向いてもじもじしていた。

髪で隠れていて表情は確認できないのだが、耳まで真っ赤にしているその姿を見る限り、その表情は何となくではあるが予想は出来た。

「あ、あん、暗視、は、波奉、です。……す、す、す、す、す、す、好きな事、は、えつと、そのお……」

「いや、他の二人に合わせようとしなくて良いから。恥ずかしいならしくなくても良いよ」
「はうう……」

暗視はそう言つて縮こまつてしまった。

この反応から見るに、恥ずかしがり屋か人見知りのどちらか、または両方なのだろう。
一応自己紹介が終わつたという事で俺は教室に備え付けられている時計を見て時間を確認する。

俺がこの教室に到着したのが大体九時前で、今は九時半。

今日は始業式であるが故に、全てが終わるのが大体午後一時ぐらいになるだろう。
つまり、いきなりやる事が無くなつてしまったのだ。

どうしたものか、と頭を悩ませていると、桃知が席を立ちこちらに近付いて来た。
「せえんせい♡ ちょっと屈んで?」

「ん? あ、ああ」

桃知に言われた通り少し腰を曲げて屈むと、

「はい、ちゅゅ♡」

「んっ! ~~~~~ツツツ」

いきなり頭に手を回され逃げられないようにされると同時にキスをされた。

生徒にである。

慌てて引き離そうとしたが、強い力で掴まれていてこれ以上強く押ししてしまうとケガをさせてしまうかもしれない為、引き離せない。

俺が軽くパニックを起こしている間にも桃知はキスをし続けている。

「チュパ・・・プチャ・・・」

桃知の舌が俺の口の中に入り、俺の唾液と桃知の唾液が混ざる感触、口から溢れた唾液がポタポタと床に垂れる感覚が俺の脳に伝わると同時に身の危険を感じ、今まで以上に強く桃知を押し。

すると、桃知は案外あっさり俺から離れる。

俺は素早く『呼吸』をし、悟られないようにする。

そして桃知の顔を確認すると、その顔は今まで以上にニマリと笑っていて、その視線は俺の下半身へと向いていた。

だが、その顔はすぐに驚きの色で染まった。

「ねえ、何で立ってないの？ んく、優歌ちゃんなら分かる？」

「さあ？ 私にはわかりませんわ。茜さんのキスで勃起されなかった殿方などいませんでしたから」

そこには、教え子二人に股間をジッと見られている男の姿があった。

いや、俺の事なだけだよ。

俺はとிரりあえずこの状況をどうするか思案するとともに『呼吸』を繰り返す。すると、今までずっと黙っていた暗視がおずおずと二人の会話に入る。

「えっと、あの、ま、まだ初日だしき、た、たの、楽しみはまた今度にしたら？」

思わぬ助け舟にびっくりしていると、桃知と早川はその言葉に納得したかのように、席に戻った。

俺はゆっくりと立ち上がって再度教壇に立つ。

生徒三人は何事も無かったかのように席に付いていた。

とりあえず『呼吸』は続けつつ俺はカバンからプリントを取り出し三人に配る。

それを見た桃知がポカンとしながら言う。

「何これ？」

「小テスト」

これは本当なら明日以降に出そうとしていた物で、三人の学年……小学五年生の学力に合わせた内容にしており、このテストの結果によって授業内容を決めて行くと考えて作った物である。

だが、時間が余ってる今出さなくていつ出せと？

俺は三人を見ながら優しく微笑む。

さあ、クソガキ共。俺のテストはちよいつとばかり捻ってあるぞ。

俺のそんな思惑に引っかけたのは桃知一人だけであつた。

2話 『対抗策は、』

俺は小テストの採点をする。

三人がどれだけ勉強ができるか確かめるための物だったのだが、採点が終わってすぐ俺はため息を吐いてしまった。

早川と暗視は引っ掛け問題に突っかかっている所はあれど好成績だった。

だが、桃知は酷かった。

引っ掛け問題に引っかかるのは仕方がないとして、普通の問題……しかも、単純な計算問題ですら間違えていた。繰り上りを忘れてるぞ……

このテストの点によって勉強内容を考えようと思っていたが、どうやら小学一年生がやるような基礎の反復から始めた方が良さそうである。

そう思いながら基礎学習教材の中から反復性のあるモノを選ぶ。

俺が今いるのは、中校舎二階にある職員室だ。生徒が帰宅し、職員もちらほらと帰りだす頃、俺はただひたすらに明日の授業をどうするか考える。

桃知の基礎がどこまで出来るのか分からない以上、本当に小学一年生ぐらいの単純問題からレベルを上げて行くしかなさそうである。そして問題がもう一つ存在する。

暗視の言った言葉、

『えっと、あの、ま、まだ初日だしさ、た、たの、楽しみはまた今度にしたら?』
これである。

あの二人はそれで納得していたが、『また今度』という言葉のお陰という気すらする。
いや、その言葉のお陰だろう。

あのまま『呼吸』だけで平然を取り繕う事はかなり難しかったと思う。

俺はそう思うとつい笑ってしまった。別に、桃知の行動が嬉しかったからとかではない。昔を思い出したからである。

あんな強引に迫られたのはいつぶりだろうか。今じゃほとんど思い出せない記憶。忘れたくないのに、忘れちゃいけないのに。

時間は残酷だと思う。あれだけ大切だった“彼女”の事がどんどん思い出せなくなっていくのだから。

チラリと机に置かれている写真立てに視線を移す。

『あの夏』に撮った最後の写真。みんな笑顔で、無邪気で、幸せに満ちていたあの頃。
「……………あれ?」

気付くと、目頭から涙があふれ出て頬を濡らしていた。

泣かないって決めていたのに、ずっと泣かないようにしていたのに、きつと、これは

アレだ。

アイツらと関わった事が想像以上に精神的にキツかったのだろう。それを思うと、今後の生活が嫌になってきた。

だけど、ここで………こんなところで挫折する訳にはいかないのだ。



翌朝。俺は眠気眼を擦りながら廊下を歩く。

現在時刻は八時二〇分。

朝のホームルームは早くて八時半ほどから始めるモノである。その為、早めに教室に行かないといけないのだ。

昨日のように階段を上がり、廊下を進む。

教室からは内容は聞き取れないものの三人の話し声が聞こえてきている。

俺は深呼吸をしてから教室の中に入る。ガラツと扉を開くと、先ほどまでの楽しそうな会話が嘘だったかのように教室内は静かになった。

「おはよう」

俺がそう言うと、桃知が手をピーンと上げて元気に言う。

「先生おはようございませす!! 昨日できなかつたから今日は一時間目からやろ……ウブエ」

桃知が何かを言い終わる前に俺は念のために持つて来ていた白兔のぬいぐるみを投げつけてそれを止める。

暴力ありとか言われても怪我したら大変だと考えていたので、とりあえず投てき武器としてぬいぐるみを買ってきたのだ。

「今日の一時間目は算数の基礎問題の反復だ。……昨日のテストを返すぞ。特に桃知はその点数を見て危機感を覚えなさい」

俺はそう言つてテスト用紙を返却する。まずは一番近くの暗視にテスト用紙を渡す。

テスト用紙をおずおずと受け取つた暗視は、点数を見るとホツと胸をなでおろしていた。

次に桃知にテスト用紙を渡す。何故かドヤ顔しているが点数をよく見ろ。

俺は少しため息を吐いてから早川にテスト用紙を渡した。

テスト用紙を受け取つた早川は俺の方をジツと見て言った。

「ねえ、先生。聞きたかつたことあるんですけどいいですか?」

「? なんだ?」

「二つあるんですけど」

「いや、分からないことがあるなら幾つでも聞いて良いんだぞ」

俺がそう言うのと、早川はニンマリと妖艶な笑みを浮かべた。

それを不思議に思っていると、早川は「まずは」と前置きをしてからテスト用紙を指さした。

「この少数の割り算ですが、『 $5.6 \div 0.7$ 』ではなく、この問題だけをあえて0をなくして『 $5.6 \div 7$ 』にした方が引つかかって少し難易度が上がると思いますよ。特に、茜さんは簡単に引つかかって点数を落としていたと思いますよ」

「そ、そうか」

生徒に自分で作ったテストの指摘された事に少し照れ笑いをすると、早川は「それ」と言葉が続けた。

「何で先生は昨日茜さんにキスされたのに勃起しなかったのですか？」

「企業秘密だ」

「EDですか？」

「EDではないとだけは答えておこう」

「本当ですか？ 本当に E r e c t i l e D y s f u n c t i o n じゃないのですか？」

「略称せずに言っても変わらないよ。E r e c t i l e D y s f u n c t i o n じゃ

ないよ」

俺がそう完全否定すると、早川は当てが外れたかのようなつまらなそうな表情になった。どうやら、この『タネ』はまだバレていないようだ。

そう思うと、バレないようににもこの後も生活していった方が良さそうだ。

俺は教壇に立つと、朝のホームルームを始めた。

ホームルームと言ってもまだ伝えるようなことも無いので軽い雑談になったが。

なお、桃知が何か厭らしい事を言うたびにバッグの中に入れていた小さい人形を投げつけた。



四時間目が終わり給食の時間になった。

今日の給食は白米に豆腐のスープ、春雨サラダという健康に良さそうな緑多めの内容であった。

俺はスープを啜りながらチラリと三人を確認し、器から口を放し、口の中の物をしっかりと呑み込んでから言う。

「桃知。しっかりと野菜も食べなさい」

「何で生徒の皿の中チェックしてるのよ！ いいじゃない、野菜ぐらい食べなくたって！」

「健康を維持するためには大切だ」

俺はそう言つてため息を吐く。

「両隣見てみる。二人は好き嫌いせずに食べてるぞ」

「ううう。……あ、アタシ野菜アレルギーなんだよ。なのに野菜食べさせるのはいけないと思う」

「お前らがどんなアレルギーを持つているのかは学校に申請されていて、それは記憶しているからそんな言い訳は無駄だぞ」

桃知の苦し紛れの言い訳を簡単に切り捨てる。

俺の言葉に反論できないらしくブツブツ文句言いながらも野菜を口に運んでいた。

給食が終われば昼休みに入る。生徒にとっては何でもできる自由時間だが、教師にとっては食事を済ませてすぐに次の授業の準備をしなくてはいけない。

その為、職員室で書類を纏めている。

準備が終わり時間を確認すると、次の授業開始までまだ時間があつたので職員室に備え付けられている湯沸かしポットのお湯を使って家から持って来ていたインスタントコーヒーを淹れる。

「コーヒーを飲み精神を落ち着けていると、後ろから声を掛けられた。

「どうしました？ 三宅先生」

俺は誰かを確認してからそう言う。

話しかけてきたのは五年三組の担任の「三宅^{みやけ}葵^{あおい}」さん。特に親しい訳では無いのだが、席が隣という事もあって多少の会話をしたことがある程度の関係だ。

「いえ、昨日の今日で疲れている様子だったので」

「まあ、疲れていると言えばそうですね。ホント、色々な意味で」

「……ヤったんですか？」

「ヤってはいませんし、やる気もありません。つと言うか職員室で話すような内容ではないでしょう……」

「いえ。この学校では普通です」

「それを普通にしてはいけない」

俺は項垂れながらもそうツツコミを入れる。

そんな俺を見て三宅先生は楽しそうにクスリと笑った。

「何か、今まであそこに配属された先生とは全然タイプが違いますね」

「？ そうなんですか？」

「ええ。今までは性欲が強い人や体力の多い人が選ばれてましたから。……大体

「一ヶ月程度で学校を去って行きましたけど」

「搾り取られたパターンですか」

「ええ。ですが、気に入った人じゃないと手や足で搾り取って終わりみたいですよ」

「あまりそんな事は知りたくなかったですね」

俺はそう言っただけ息を吐く。

「どうやら、この学校にいる教師にとつて、『特別支援学級M』に配属された教師が駄目になるのは日常茶判事の事のようにだ。」

「まあ、もしもそうになったら保健室に行くといいですよ。春崎先生が精力剤を処方してくれそうですから」

「薬剤師の資格持ってるの?」

「持っているそうですよ」

「なら、安心と考えておくよ」

俺はそう言ってコーヒーを飲み干し立ち上がる。

時計を確認すると、時間がギリギリになっていたので、どうやらカップを洗っている暇はなさそうである。

だが、カップは家から持って来ていた物なので、洗うのは持ち帰ってからにしよう。

「それじゃ。午後の授業があるので」

そう言つて職員室から出ようとすると、三宅先生が俺の耳元で小さな声で言った。

「もしも我慢できなくなったら私がやってあげますので、いつでも言つて下さいね」

その言葉に驚いて固まっている内に三宅先生は職員室を出て行つてしまった。

……どうやら、この学校に赴任している教師にもマトモな人がいるのかどうかを怪しんで行かないといけないようである。

そう考えるとただでさえ痛くなつていた頭がより痛くなつてきた。

その後、教室まで行くと桃知がこちらに見せびらかすようにバイブを使って自性行為をしていたので、亀のぬいぐるみを投げつけておいた。

3話 『あく、もうめちやくちやだよ』

あれからかなり時間が経過した。

と言つてもまだこの教師生活が始まってまだ1ヶ月なのだが。

五月に入つても桃知は変わることなく色々な事をしてくる。

バイブやローターはどこで手に入れたのだろうか。

おおよそ小学生が持つていてはいけないのは確定だろう。・・いや、確定してないとおかしい。

今度からは没取しようかとも思ったが、置き場に困るので止めておいた。

ここ1ヶ月ずつと基礎の反復をすることで土台は作れた。

今月からは基礎の応用に慣らして行けばいいだろう。

俺はそんな事を思いながらいつも通り南校舎三階の教室の扉を開ける。

「おはよう」

「先生のチンポの匂い嗅がs・・アルブハア」

桃知が言葉を言い終わる前に人形を投げつける。

変に思われるかもしれないが、もはやこれが恒例行事となつていた。

少し前までは言い方が遠回しであったり、誘惑しているのであろう甘い声で言っていたが、ネタが尽きて来たのかいつものテンションでダイレクトにセクハラをしてくるようになった。

ネタがないのならもう止めればいいのに。

俺は教壇に立ち、言う。

「はい。今日から五月に入ったという事で勉強内容も少しレベルアップします」

「なんでっ!?!」

なんか驚かれた。

これがネタとかならまだいいのだが、本^{マジ}気で言っているから救いようがない。

「この一か月の間に基礎は出来た。ならステップアップは当然だろう。逆に、ずっと基礎学習だけじゃダメだろう」

「だったら私たちとやれb・・・あふん」

「次、変な発言をした場合、夢の国のネズミがお前を襲うことになるからな」

「先生! 変な事って何ですか!?! SEXは子孫繁栄の為に行為であり、人類どころか全ての生物にとって大切な事です! だから変な事ではありません!!」

そう強く演説する桃知に俺は少し感心していた。

こう言うってはアレだが、コイツでもこういった事が言えるものなのか。

人は見た目に寄らないとは聞くが、馬鹿でも理論的に語ることはできるようだ。

・・・こう思えば、少し前までは生徒の事を悪く言うのに抵抗があつたのに今ではなくなっているという事に驚きがある。

「確かに、その理論では変な事ではないだろう。だが、そもそも学校は勉強をしたりクラスメイトと遊んで人との関わりを学ぶ所だ。子孫繁栄の為に切磋琢磨する場所じゃない」

「SXEは保健体育の実技ですy・・・夢の国イ」

俺は素早く夢の国のネズミの人形を投げつけた。

あの国から使者が来そうだが、気にしないでおこう。

「一時間目の授業は社会だからな。教科書の準備しとけよ」

「じゃあ人類が発展するために必要な子孫繁栄の社会を実戦で教えt・・・夢の国イ

(本日二度目)」

俺は桃知に夢の国のネズミのメスの方を投げつけた。



様々な困難（主な犯人は桃知）を乗り越え、ついに昼飯の時間になった。

この時間は多少なりとゆつくりできる時間なので、これが長く続いて欲しいと切に願っている。

ただ、毎日のように桃知が声をかけてくるのが悩みでもあるが、まあ、そこは寛大に許している。……というか諦めた。

「せんせえ〜。サラダのキャベツときゅうりとトマトと寒天を残していいですか〜?」

「ソレ、サラダの中の全食材だからな。……当たり前だが却下だ。ちゃんと食べる」

「先生! 子どもが苦手なモノを無理矢理克服させようとするのは逆にそれをより苦手にさせるだけです! なので食べさせようとするのh……」

「却下だ」

「最後まで聞いてすらくれないの!?!」

ホント、毎日毎日飽きもせず、何とんでも野菜を食べたくないのか無理矢理な理論を展開して屁理屈をこねにこねて通そうとする辺り、馬鹿ではないんだよな。

ただ、勉強の方にそれが反映されていないのが教師としては悲しいことだ。

野菜残しを却下された桃知はブツブツ文句を言いながらも野菜を口に運んでいる。

これで変態発言としかしてくれなきや可愛い生徒なだけだなあ。

俺はそんなことを思いながらわかめスープをすすする。

なお、早川と暗視は何をしているかという、早川は俺と桃知の会話を楽しそうに見

ながら白米を口に運び、暗視は特に気にする様子無くただ黙々と食事を続けている。

それを見ながら俺も食事を続ける。

普通の学級なら友達と話しながら楽しそうに食事をするモノだろうが、ここではそれが自由に食事を楽しんでいる。

これは前々かららしく、食事の時間に限り（あまり）干渉しないようにしているそうだ。

彼女らの考えとしては、食事中は喋らずに食後にその分話すようにしているみたいである。

確かに、効率を考えればそっちの方が良いと思うが、子どもなのにそこまで考えてやっていると思うとかなり驚いた。

まあ、それが彼女らなりのやり方なら特に文句はない。

等々くだらない事を考えている内に、俺は給食を完食していた。

俺は食器の片づけをする。

それに合わせるように桃知も食器の片づけを始める。

……なぜか横にピツタリとくっ付いてきているが気にしない。

めちやくちや妖艶な笑みを浮かべて俺の股間の方に視線が向いているが気にしない。なんて手をうずうずさせているけど気にしない。

こういった場合はスルー推奨である。

変に意識するだけ無駄だ。

「……桃知。お前放課後までに今まで貯めに貯めた宿題の三分の一、いや、四分の一でもいいから提出するように」

「免除してくれないの!?!」

「するわけないだろう。他の二人はしっかりと提出してるんだからお前だけを特別扱いする理由はどこにもない」

俺はそう断言して教室を出る。

今まで毎日のように提出を急かしていただろうに……。



三人の少女が教室で向かい合っていた。

といつてもそのうちの一人は自分の机に突っ伏してきのこの山を食べていた。

普通、学校にお菓子などの持ち込みは禁止されているのだが少女はそんなことお構いなしである。

「あの教師何なのよお」

きのこの山を食べていた少女——桃知茜はそう呟く。

彼女はいわゆる『メスガキ』と呼ばれる人種で、今まで幾人もの教師を（性的に）食つては退職まで追い込んでいた。

だが、新しく赴任された教師は、少女らに手を出さないどころか勃起すらせずもう一ヶ月も経過してしまつたのだ。

今まで、こんな経験はなく、手が出せていない為に欲求不満になつてしまつてもいる。「まあまあ。一〇〇人いれば一人くらい例外はいますよ。でも、男の人は本能に忠実ですからねえ」

そんな茜に声をかけたのは友人である早川優歌だつた。

敬語なのはいつもの事で、どれだけ親しい人にも同じように話している。

「もう少し誘惑すれば理性の糸なんて簡単に切れますよ」

「そうかなあ。あの教師、何かあると思うんだよね。．．．はっちゃんはどう思う？」

「はへっ、はふうう。わ、私的には、そのお、ちよつとの押しじや駄目だと、思うよ．．．」いきなり話を振られた三人目の少女——暗視波奉は少し戸惑いながらも、そう答える。

波奉は人見知りなところがあり、友達である茜や優歌と会話をするときすらオドオドしてしまう所があるのだ。

ただ、二人にとってはいつもの事なのでとくに何かを言う事はない。

波奉の言葉を聞いて優歌は腕を組んで少しうなつてからポソリと言う。

「……確かに、はっさんの言う通りかもしれないね」

「なくんでそんな簡単に意見変えちゃうのよ。ほんのちよつと前まですぐに理性の糸が切れるって言ったじゃん」

「そうですけど、はっさんの観察眼の鋭さは茜さんも知っていますでしょう？　そこを踏まえれば意見を変えるのも当然でしょう」

「あ、あの、優歌ちゃん。その、『はっさん』って呼び方、止めてくれない？　なんかむず痒いよお」

「はっさんはため込んで『発散』するタイプなんですから適切なあだ名では？」

「そ、それは、そうだけど……」

そう言って俯きもじもじする波奉を見ながら茜はニタリと嫌な笑みを浮かべる。

それを見た波奉はあまりの不気味さにビクツと体を震わせ、椅子を盾に少しずつ距離を取ろうとした。

だが、後退った先には邪気を一切感じさせないほどきれいな笑みを浮かべた優歌の姿。

「あ、あわわわ……」

「さあて、はっちゃん」

「さあ、はっさん」

「イクよ♡」

部屋の角まで追い詰められた波奉は、二人の対照的な笑みを見て目頭に涙を浮かべていた。

だが、二対一であるが故に抵抗らしい抵抗もできないまま、二人の毒牙に襲われてしまふのであつた……。



給食の時間が終わり、その後の清掃時間も終わった。

そう、終わってしまったのだ。

俺はいつも通り重い足取りで階段を上がる。

彼女らの相手をするのは実際かなりキツく、肉体的にも精神的にもボロボロになってしまうのだ。

簡単にあしらえるのだが、塵も積もればなんとやら。

ずっと相手をしていけば当たり前だが疲れも溜まっていく。

だが、担任を任された以上、よほどのことがない限り休むことなど許されない。

こうなつてしまつた運命を呪いながらもそれを表に出すことなく俺はいつものペー
スで扉を開く。

「ほら。五時間目の授業を始めるぞ……」

俺は言葉を最後まで発する事が出来なかつた。

それどころか教室内に充満する独特な“におい”が鼻を突き、一瞬だが固まつてしまつた。

いや、“におい”だけではない。

独特の“音”も聞こえるのだ。

何かが震えるときに鳴る小さな振動音、それもとても細かい振動らしく音が絶えること
はない。

とても特徴的な音、独特の“におい”。

ここから今までの経験を踏まえ合理的に考えられる事は一つ。

そう、これは……

パイプかローターの振動音と愛液の臭いだ。

それに気が付くまでに要した時間は教室の扉を開けてから僅か〇・五秒程であつた。

ここ一ヶ月ほどの間に散々嫌になるほど経験したものがこんな風に生かされるなん

t.....いや、一生生かさない方が良かった経験だ。

ああ、もうホントこの仕事辞めたい。

.....そういう気持ちが大きくなっても辞められない『理由』があるんだけど。俺はそんな心境を表に出すことはなく教壇に向かう。

教壇に立つと同時に三人の顔を一瞥する。

いつも通りの笑顔を見せる早川、いたずらっ子の笑みを浮かべてこちらを見ている桃知、下を俯いてもじもじしている暗視。

.....よし。

「桃知。お前なにやらかした」

「一ミリも迷うことなくアタシに疑いを投げて来た!!」

「ここ一ヶ月の経験から考えてお前が犯人の可能性が高い」

俺がそう断言すると、早川が口到手を押さえてクスクスと笑い出した。

「茜さん、すぐにバレてしまいましたね」

「うう〜」

つまらなそうに呻る桃知の後ろを通り過ぎ、早川は暗視の隣に立った。

俺がそちらに視線を向けると同時に早川は暗視の机をずらした。

そして、

「なっ?!?」

つい、そんな声を上げてしまった。

椅子からゆっくり立ち上がった暗視はズボンとパンツを履いておらず、普段は隠れていなければいけない場所、いわゆる女性器の膣口に電気バイブらしきものが根元までずっぽりとはまり、そこから少し粘度のある液体——俗称で言うなら愛液が湧き水のように溢れ出ていた。

愛液は太ももを濡らし、足首付近まで垂れていた。

嫌な予感として暗視が今まで座っていた椅子にソツと視線を向けると、やはりいか何というか、びしょびしょに濡れていた。

「お、おい。暗視の顔が真っ赤だが、嫌がつてるのを無理矢理やらせたんじゃないだろうな」

「違いますよ。最初は無理やりでしたけど、今は興奮が抑えられずにいるだけですよ」
早川がそう言ってニコリと笑顔を浮かべる。

俺は早川が言った事が本当かどうかを表情から確かめ、事実であると確認すると同時に教室後方にある掃除用具入れの方へと向かい、そこにあるバケツを取り出すと廊下の手洗い場で水を溜めて教室へ戻る。

そして、息を吸って叫ぶ。

「さっき掃除した教室をまた汚すな！ 多少の事なら許してきたがさすがの俺も堪忍袋の尾が切れたぞ!! まず元凶の二人は椅子とその下に垂れた愛液を拭く!! 暗視は陸内にいれたバイブを抜いて足と足を拭いてパンツとズボンを履きなさい!!!」

笑っていた二人と、興奮してハアハア言っていた一人の目頭に涙が浮かんでいるように見えたが気にしない。

学業を学ぶ場所である教室をこんなくだらな事汚したというのはさすがに俺も怒りのピークを迎えるに十分だったらしい。

そして、この日の五時間目は清掃に費やすことになった。

ああ、今後の予定をまた組み直さなきゃ……。

4話 『“ポケットモンスター”ってどうして海外では
“Pok・mon”かは知ってるかい?ポケットモンス
ターって海外ではち○この事を指すからなんだよ』

「ハアアアアアアアア」

仕事が終わわり、生徒が全員帰ってから、俺は深いため息を吐く。

あの三人に五時間目を潰され、授業が止まったのは後々響いてきそうだ。

たかが一時間と思う人もいるだろうが、アイツら（特に桃知）の成績を考えると無駄
にできる時間なんてない。

まあ、それでも多少駆け足になるがこの差を埋めるのは簡単だ。

だけど、その為のスケジュール調整をしなくてはならないのだが……。

「あの、何しているんですか?」

俺は隣の席でこちらを見ている三宅先生にそう声をかける。

彼女はもう仕事を終わらせているのでさっさと帰ってもいいと思うのだが、まあ、ど
うしようも彼女の自由なので特に何も言わないでおく。

ただ、視線が気になって気が散るのできつきとどこかに行ってほしいのが本音だ。

「何か疲れているようですが、問題でもありました？」

「問題だらけですよ」

「そうなのですか？ 前任の方よりも顔色がよかったので大丈夫とばかり思っていたんですけど……」

そう言つて首をかしげる彼女に、俺は成績をまとめた紙を差し出す。

「……これ、」

「そうです。桃知の成績が酷いんですよ。ここを何とかしないと将来どうなる事やら……」

紙を見た三宅先生もあまりの酷さに言葉を失つていた。

だが、それは仕方がないと言えるだろう。

彼女らの学年は五年生だというのに、桃知の成績は二年生並みで止まつてしまつてい
るのだ。

多少なりと応用等が出来たりはしているのだが、それでもそこまで大きく変わつてい
る訳ではなく、足りないといしか言えないのが現状だ。

「成績が悪いとは聞いていましたがまさかここまでとは……」

「最低でも、足し算・引き算・掛け算・割り算・ひらがな・カタカナ・常用漢字・地図の

読み書き・パソコンの操作をできるようになれば安心なんですけどね。さらに欲を出すなら世の中の危険・・・麻薬とかですね。そう言った生きていくうえで来る危険を教えられれば満点だと思うんですが、それが中々・・・」

俺はそう言って今日授業で使ったプリントに視線を向ける。

早川や暗視は八割以上に丸が付いているのに、桃知は三割ほどしか丸がない。

単純な引つ掛け問題に引つ掛かって点を落としてしまっている所も多く、少し残念な気もする。

「何とかしたいのは山々ですが、ここら辺は本人次第なんですよね」

「そうですね。でも、そんなに悩んで頭の中詰めて行っても意味はありませんよ」

「ですかね・・・。もう少ししたら軽いテストをして、その点数を見てから何かレクレーションでもしてリラックスさせてやりますか」

「違いますよ」

俺の呟きに三宅先生はノータイムでそう言ってきた。

何が違うか分からず一瞬固まってしまった。

「えっと、違うって何がですか?」

「詰め込み過ぎなのは月城先生の方ですよ。休み時間でもほとんどパソコンに向かって問題用紙作っているじゃないですか。神経張り詰めすぎですよ。少しは休んだ方がい

「いですよ」

「そう、ですかね……」

自分でも薄々思っていたことを指摘され、少し苦笑しながらそう答えると、三宅先生は手帳を取り出しペラペラと捲ってから言った。

「ええ。そうですよ。明後日の夜は空いてますか？ 良い所連れて行ってあげますよ」

「良い所？ もしも酒屋とかだったら無理ですよ。俺、酒に弱いんで」

「大丈夫ですよ」

三宅先生はそう断言してから間を開けずに言う。

「ラブホなんで」

「……」

「一発又けば少しは頭の中スッキリしますよ」

そう言う彼女を余所に俺は資料をUSBメモリに保存し、パソコンの電源を落とす。

そして、

「じゃ、これで失礼します。後、今さっき明後日の予定が入ったのでお出かけのお誘いはキャンセルという事で」

「あからさまに流された……」

そりゃあ流すだろう。

変に反応しても無駄なもの。



帰宅してもやる事は特にない。

ここは学校から車で一時間ほどの距離にあるごく普通の七階建ての賃貸マンションで、番号は「四〇五」号室。

部屋にはあまり物はなく、リビングには大きめのソファアールと小さなテーブル、ソファールに向かい合うように薄型テレビが置かれていて、寝室の扉の隣に少し大きめの本棚がありその上段には参考書が、下段には小説が収められている。

小説と言っても高校生の頃買った物ばかりで今となっては古い作品でありここ数年数えるぐらいしか開いていない。

漫画類は実家に放置したままになっているし、それも小学生の頃買ったものでもう一三〜一四年も前の物である。

時間は九時半ほどで風呂を沸かす気力もないが、さすがに汗は流さないと不味いだろうと判断し、寝室にあるタンスから下着を取り出し、その隣に置いてあるパジャマ入れ（アミ籠）からパジャマ代わりの甚平を取って風呂場へと向かう。

蛇口を捻り、お湯が出るまで少し出してそれを頭から浴びる。

全身を濡らしてからシャンプーを手に取り、少し泡立てて頭につけ髪を洗う。

髪を洗っている間も頭の中は彼女らに出すプリントの内容をどうするかという事しか浮かばない。

難易度が高過ぎず低過ぎず適度な引つ掛けを入れて尚且つひらめきを入れた問題。

これがまた難しいのだ。

当たり前だが成長途中の子供の脳と成長してしまった大人の脳ではモノの見方や発想が大きく違う部分が出てくる。

そこも考慮しなければ子供向けの良い問題はできない。

俺は全身を洗い終わり、すぐに風呂を出る。

甚平を着て、少しドライヤーで髪を乾かしてからリビングの本棚の前へと向かい、何冊か取り出し、ソファアールへと腰を掛ける。

本を開き何分か眺めるが、参考になりはするもやはりもう一味アクセントが欲しかった。

手に取っていた参考書の最後の方にあるページを見ると、それはもう二年ほど前の物で、さすがに新しいモノを買った方が良さそうであった。

勉強方法とは早ければ数ヶ月、遅くても一年ちよつとでもあれば良い悪いはさておき

新しいモノが出てくる。

二年も経過すれば古くなるのは当然だ。

まあ、それでもこういった物ばかりを参考にして自分ではほとんど考えないのも問題がある。なので褒められたようなやり方とは思っていない。

ただ、名前の通り少し『参考』にする程度に留めておくのが賢明である。

時計を確認するともう一時近くになっていた為、本を閉じ寝室へ向かう。

寝室にはシングルベッドが設置されており、その隣にある布団干しに掛けられている掛け布団を被ると睡眠に入る。

学校には七時から七時半までには行けばいいので、大体五時半ぐらいに起きれば問題は無い。

スマホのアラームはセットしてあるので俺はゆっくりと意識を落とすとした。



やかましいアラームの音で目が覚める。時刻を確認すると時計の針は五時一五分辺りを指していた。

俺は布団を払い除け、ゆっくりと起き上がる。まだ頭はボーっとしているがそれでも

ベッドから降りて洗面所へと向かう。

昔から寝相が悪いせいで朝起きると確実に頭がド豪い事になってしまっているのだ。あまりにも髪の毛が絡まりすぎて櫛がへし折れたことすらもある。その為、髪の毛の様子を確認してから風呂場で軽くシャワーを浴びる。

無論、全身ではなく頭だけを濡らすように。

濡らした髪を軽くタオルで拭いてから櫛を入れた所でフツと気付いた。かなり髪が伸びているのだ。

少し前まではさっぱりしていたと思っただが、肩までかかる程になっていた。毎日鏡は見ていたはずなのにそんな当然の事に気付いていなかった。

俺は後頭部を少し掻き、今度の休みにでも床屋へ行こうと考えながら洗面所を後にした。

台所へと行き、冷蔵庫を開く。そこには昨日の晩飯用に作っておいた焼き魚と白ご飯のあまりが入っていた。

それを前にしてようやく帰ってすぐシャワーを浴びて寝てしまった事に気が付いた。

「……………三宅さんの言っていた通り疲れてるのかもな」

俺はボソツとそう呟いて焼き魚と白ご飯をレンジで温めた。

ほんの数十分の温め時間の間にも頭の中に浮かんでいるのは課題プリントについて

の事だけであった。

床屋に行くついでにどこかでリフレッシュしてきた方が本当に良さそうである。

頭の中で課題プリントについて考えながら、今後のスケジュールについても思考を割く。

ここの近くでリラックスできそうな場所と言えば、最寄り駅から四駅先にある中心駅で乗り継いで五駅ほど先にある温泉街しか思いつかない。

というより個人的にそこ以外にリラックスできるような場所がこの近辺にない。

レジャー施設とかは幾つもあるのだが、見たい映画なんてない、ゲームセンターに興味はない、スポーツはあまりやらない、美術品にも興味はない、動物園や遊園地だって別段好きという訳でもない。

言うならば娯楽関係にそこまで興味がないのだ。

全くないという訳でもなく、本は読むしゲームもするのだが、インターネット上やニュースでたびたび見かける廃人ゲーマーみたいなガチ勢ではなく、暇なときにゆつくりと進めていくような感じなのだ。

その為、少し前に買ったポケモンだって未だに全マップ制覇をしていない。

次回作が発売されるよりも前にクリアしたいところだが、そんな時間は無いので、どうしようかと思う。

俺はボーッと重要な事とくだらない事を考えながらスーツに着替える。

小学校の教員はいろいろな服装の人がいるが（無論、禁止されている服装もある）俺は基本的にスーツで過ごしている。

スーツに身を包むと気が引き締まるのだ。

着替えた後は戸締りをし、バッグにノートパソコン等必要な物を入れて家を出た。

いつものように、何気ない日の始まりである。



俺はいつものように教壇に立ち、静かに言う。

「桃知、宿題はどうした？」

「ダンバル・・・というかメタグロスの厳選してやってません！」

その言葉を聞いて、さすがの俺もやりきれなくなつた。

何か大きな事情があれば仕方がない、と思えたがゲームに時間を割いて出来ていないのは違う。

それは免罪符にはならない。

「あのな、後々に回せば回すほどキツくなるのはお前だぞ？」

「うっ……」

言葉を詰まらせる桃知。

それを見た早川がケラケラと笑いながら何気ない様子で言った。

「茜さんはポケモンが大好きですからねえ。それだったら仕方がないでしょう。ね、はっさん?」

「はへっ、う、うん。そ、そそ、そう、だね……」

暗視はオドオドしながら早川の言葉にそう答えた。

だが、その様子を見る限り同意したわけではなくいきなり話を振られた為、反射的に答えただけなのは確実であった。

「桃知、グラードンの種族値とゲンシカイキした際の種族値の変化は?」

「通常が、H一〇〇・A一五〇・B一四〇・C一〇〇・D九〇・S九〇の合計六七〇で、ゲンシカイキすることでAに三〇・Bに二〇・Cに五〇プラスされて合計七七〇です」

「そういった事を暗記できるなら少しはソレを勉強の方に割いてくれ」

俺が顔に手を当てて溜め息交じりにそう言うと、それを聞いていた早川がまたも何気ない様子で言う。

「茜さん。ダルマツカの種族値は?」

「H七〇・A九〇・B四五・C一五・D四五・S五〇の合計三一五でしょ?」

「桃知、なぜレートで使われることのないマイナーなポケモンの種族値をそこまで詳しく言えるんだ……」

「これでも一応、全ポケモンの種族値とタイプとタイプ相性を記憶してるんだもん！」
「胸を張って堂々と宣言してるんじゃないやねえ!!」

さすがに怒鳴ってしまった。

今現在実装されているポケモンの種類は七二〇種類＋メガシンカ&ゲンシカイキである。

その全てを記憶して暗記系の学習がロクに出来ていないというのがやりきれない気持ちになつてくる。

俺がこの現実を前に取り繕う事無く本気ガチで頭を抱えて悩んでいる間に桃知は早川との会話に花を咲かせていた。

というかポケモンの話題で盛り上がっている。

「あんな、そう言った話題で盛り上がる事を悪いとは言わない。だけど、勉強だけはしっかりとやってくれ」

「先生。勉強とゲーム。社会に出てどっちが大切になると思ってるんですか？」

「勉強だよ。何真剣な口調で言っているんだ」

そんなにゲームで生きていたかったらプロにでもなってみろ。

厳しい世界だけだ。

そんなくだらない言葉が頭に浮かぶと同時に、頭の中に一つの案が浮かび上がってきた。

それを形付ける事が出来れば、もしかしたら桃知の成績にいい影響を与えるかもしれない。

俺は少し息を吐いて精神を落ち着かせる。

そして、

「来週から少し授業プログラム変更するから、今日明日は今まで通りに行くぞ」

と宣言した。

さて、土日のうちに頑張らないとな。

宣言してしまった以上やらなといけないので、俺は土日の予定(あってないようなもの)をどうするかにも思考を割くのだった。

5話 『不穏な気配』

俺は今日行ったテストの採点をする。

普段、採点後は不機嫌になり、頭を抱えて溜め息をついているのだが今日は違う。すると、

「あら、今日はご機嫌ですね。いつもなら頭を抱えながらスケジュールの整理をしているのに」

と三宅先生に声を掛けられた。

「ええ、機嫌が良いんですよ」

俺はそう言つてテストの答案を見せる。

そこに書かれている点数を見て目を大きくする。

「これ、どうしたんですか!？」

「桃知の好きなゲームが分かったのでそれを勉強に絡めて見たんですよ」

そう、俺のやった事はいたって単純。

勉強の中に少しポケモンを入れただけだ。

ダメージ計算（つるぎのまいやわるだくみによるダメージ上昇率など）ができるなら

計算ができない訳ない為、そこを使ったり、ポケモンノブナガの野望を基に歴史にポケモンを絡めたり、ストーリーのセリフを漢字に変換できるだけする事で字を覚えさせたり……。

できることをやってみたら早川や暗視よりも一気に学力が付いた。

今後は時間をかけてゆっくり勉強の中からポケモンを排除して普通の勉強に出来れば良しである。

「なるほど。『好きほど物の上手なれ』とはよく言った物ですね」

「三宅先生、『好きこそ物の上手なれ』ですよ。あと、少し意味を間違えてます」
「てへ」

「教師なんですからそう言った事ぐらい頭の中に入れて、なるべく子ども達に間違った事を教えないようにしておいてくださいよ。あと、いい大人がその誤魔化し方しているのは普通にイタイですよ」

俺はそう言いながらPCの画面に視線を移す。

そして、課題プリントの作成に入る。

余談だが、『特別支援学級M』にいる三人は、全員がポケモン好きであった。

お陰で変に説明をしなくても良かった。

早川と暗視は元々が良かったので伸び比率はそこまででもないが、それでも伸びてい

る。

「さて、今日はここら辺で」

「あれ？ 珍しいですね。いつもならもう少し遅くまで残ってプリント作成しているのに」

「ちよつと予定がありましたね」

ポケモンプレイしてプリント作成に使える所を探すという大切な予定がな。



翌日。

俺は教室に入ると同時に静かに息を吐く。

そして、ゆっくりと大きく息を吸ってそれをすべて出すように叫ぶ。

「学校にゲーム機を持つてくるな!!!」

教室でさも当然のようにゲームをしている桃知と暗視は……より正確に言うなら暗視が大きく肩を揺らした。

「あら、先生。おはようございます」

「おはよう、早川。で、この状況は？」

「学校でも対戦パの立ち回りの練習をしたいからと言って暗視さんに無理矢理3DSを
持たせてこさせてバトルしていたんですよ」

俺は、そつと頭を抱えて落ち込む。

学校を何だと思っているのだろうか。

確かに息抜きで遊ぶのは良いし、持ち込む事はアウトだが特に強くとがめようとは思
わない。

だけど、こんな堂々と悪びれることなくやられたら流石に別問題だ。

「放課後まで没収します」

「あつ！ せつかく良い所だったのに!!」

「知るか」

俺はそう言って3DSを取り上げると、自身の手提げバッグの中にしまい込む。

桃知の事だから目を離れた隙にバッグから抜き取るかもしれないので、奥の方へと隠
しておく。

そして、教壇に立つ。

「ほら、さつさと朝礼を始めるぞ」

「はーん」

桃知が席に着く前にはもう、暗視と早川は席に着いており、桃知が席に着いたところ

で俺はいつも通り朝礼を開始する。

朝礼と言っても、別段、何か話すようなことがある訳ではなく、毎度毎度、軽い注意（特に桃知の暴走の件）をするだけである。

俺としては特に何事もなく普通の教師生活を歩みたいのだが、ここに配属になった以上、それが叶わないという現実が心を抉ってくる。

本当、何もなければ可愛い生徒なのだが、この子たちがどうしてこんな風になってしまったのか気がなるし、そもそも保護者は何をしているのかとツツコミを入れたかつたりする。

だけど、このご時世、プライバシーだのモンペだので騒がれている通り下手に踏み込むと何があるか分からない。

便利になり時代が進んだとしても人間自体が成長した訳ではないというのがやはり根底にあると思うが、一教師がどうこうしようと思わない事なので深く掘り下げようとは思わないし基本的にどうでも良いと思う。

それに、今俺がすべきことは生徒に学問を教えて将来の糧にもらう事である。こんなどうでも良い事に思考を割くことではない。

俺は頭の中に浮かんできていた事柄を仕事に関係するもの以外全てを切り捨てた。



中休み。

地域によつては二時休みとも休憩時間とも長休みとも言われる二時間目と三時間目の間にある短くもなく長くもない微妙な時間。

高校に上がれば無くなってしまふ正直、なぜあるのか分からない時間。

そんな時間の中で三人の少女たちは自身の椅子に腰を掛け、現在の生活の不満を漏らしていた。

「なんなのよ、あのクソ教師いゝ」

桃知茜という少女がポツキーを食べながらそう呟く。

普通、小学校は弁当が必要なとき以外は原則食べ物の持ち込みは禁止されているが、彼女たちはそんな事お構いなしに持ってきており、基本的にルール厳守の月城匠も授業中に食べたりにしない以上は黙認していたりする。

そのポツキーを持ってきた少女——早川優歌は机に置かれたポツキーをヒョイツと取り、一口食べてから言う。

「もう一ヶ月以上もやれてませんからねえ。さすがにこんな長い期間生ち○ぽで中をぐちやぐちやかき回されなかつたのは初めてですから、欲求不満になってしまいますよ

ね。．．．ね、はっさん」

「ひゃ、は、はううう．．．。えっと、その、そ、そう、だね．．．．」

いきなり話を振られた少女——暗視波奉はまさかこっちに話が回つてくるとは少しも思っていないが故に驚きの声を上げてしまった。

そんな暗視を見て、優歌は妖艶な笑みを浮かべると、その手をソツと暗視の下腹部へと伸ばしホットパンツの中の子供らしいパンツのさらに中——膣口に触れる。

そして、

「ひゃっ．．．あぁっ．．．．．っ!!」

くちやくちやと音を立てながら友人の膣内へと指を入れ、静かにかき回す。

友人がいつてもお構いなしにただひたすらその幼い指で犯し続ける。

それだけでなく、優歌はもう片方の手で自らの膣部を弄る。

「はっ、ああ．．．♡　ずっとやれてないせいでこんなに溜まって、少し触れただけでこんなに濡れて．．．っ!!♡♡♡」

優歌は話しながらも自らの膣内を弄り、クリトリスを弄り、そして、Gスポットに軽い刺激を与えたと同時に軽くイってしまった。

その顔は少し赤らみ、息が荒くなっていた。

茜はそれを見ながらポリポリとポツキーを食む。

「そんな風に下手に火照ったら逆に辛いだけじゃない。こういう時は、少し百合百合しい事をしてる友人たちの前にある小瓶を取り出す。」

その瓶に書かれている文字を見て早川はニンマリと不敵に笑う。

波奉は膾内を弄られまくり、ポーっとした表情で粘度のある唾液をトローツと垂らしビクンビクンツと軽く痙攣していた。

「茜さん、それ、どこで手に入れましたの？」

「パパが最近、『ふにんしょう』とかいうので飲んでる」

『不妊症』ではなく『不眠症』では？」

とんでもない言い間違いであるが、今までの茜を知っている優歌とすれば慣れたもので、流れるように言い間違えを訂正する。

訂正された茜は少し固まり、すぐに大きな声で誤魔化す。

「そ、そんなことより、これを使えばあの教師を肉バイブに出来るって事!!」

顔を赤くしながらそう言う茜を余所に優歌は小瓶を手にとってまじまじと眺める。

中には白い錠剤が入っており、ラベルの横には年齢による服用数がしっかりと書かれていた。

——二〇歳以上は三錠としつかり書いてあった。

だが、優歌は瓶から六錠も薬を出す。

實際問題、用量は守らねばならないのだが、このメスガキたちにはそんなことは関係ない。

欲求不満で理性よりも本能を優先させている者にとってそんなことは気にする事は無いのだ。



俺は何か寒気を覚えながら三時間目と四時間目を終わらせた。

なんと表せばいいのだろうか。

恐怖と言うか、蛇に睨まれた蛙と言うか、本能的な危機察知と言うか……。背中に冷たいモノを感じながら授業を進めることになった。

あの三人の眼も、エモノを見つめる野生の猛獣の眼みたいになっていて、嫌な予感しかしない。

後ろからいきなりクロロホルムを浸み込ませたハンカチで口を押えられても不思議ではないような気さえする。

いや、もしも彼女らの手にそれがあれば迷わずやってきそうな、そんな雰囲気がある。今までの教師生活の中で一番鳥肌が立っている。

上でも言ったが、恐怖を感じている。

だからと言って、それを言い訳に授業を中止できる訳もなく、通常通りに行うしかなかった。

そうして給食の時間になった。

いつも通り俺は給食を運び、食器に盛ろうとした。

だが、

「先生。今日は私たちが盛るので椅子に座って待っていてください♡」

と早川に言われた。

普段、変に偏りが出来ないように俺が持っているので、この申し出には驚いた。 . . .
というか、何か裏があると思えない。

普通に警戒していると、暗視がオドオドしながら言う。

「い、いつも盛ってもらっているから、そ、そのお礼したくて」

「お礼? いや、普通に仕事だからそんなに気を使わなくても」

「そんなつまらない小言はいくいくから、先生は座ってて」

反論をしようとした所で桃知に背中をグイグイと押されて自身の席まで追いやられてしまった。

視界の端では給食着を羽織った暗視が給食を皿の盛っていた。

真剣な顔でテキパキと偏りなく盛つて——いや、ちよつと待て。

「暗視、一つだけかなり大盛になつてゐるがそれは何だ？」

「へ、あ、あの……。せ、先生は大人でたくさん食べると思つて……。……」

「気持ちありがたいが、お前らも成長期でしつかりと食べなきゃいけない時期だから大丈夫だよ」

俺がそう言うと、暗視はいそいそと食材を均等に分けた。

普段、俺がやつてゐるように盛つてくれていてとても助かるのだが、少し手元が揺れて危なつかしいので、明日からはいつも通りにやろうと思う。

三人は流れるように盛つた給食を運び、席に着く。

そして、俺の方へ同時に視線を向けて来た。

「それじゃ、食べるか」

「「いただきます!!」」

うおっ！

普段から無口で大きな声を出すことのない暗視すら良い声で「いただきます」を言つただと……。

今日は槍でも降るんじゃないか？（超絶失礼）

俺は三人の気迫に少し押されながらも給食に手を付ける。

よく、給食に対して文句を言うモンスターペアレントとかが話題になったりするが、俺としては栄養バランスが整っていて口に入るなら問題がないと思っっている。

味気がないだの豪勢じゃないだの色々な話を聞く。

教師が言う事では無いと理解しているが、文句があるなら食わなくていい。

栄養の高くバランスの整っているモノを食べられるというだけでも世界的に見れば幸運で恵まれた事だというのにそれを当然だと思っただけで喚く人は飢えて倒れる。

……俺がどうしてここまで給食に対して文句を言う人に嫌悪のようなものを持つているのか簡単に説明すれば、以前赴任していた学校でお世話になった先輩が給食にケチを付けたモンペに追い詰められて去って行った事があるのだ。

つまり、その経験から普通に腹立たしいのだ。

そんな事を思い出しながら食べ進めるが、なんだか食べ辛い。

嫌いなものがあるという訳ではないのだが、なぜか三人からチラチラと見られているのだ。

複数の視線を感じながらの食事程箸の進まない食事は無いと思う。

俺は少し気持ち的に重い物を持ちながらも食事を終え、いつものように食器を片付けた。

6話 『重なる問題。痛くなりだす胃（ストレス）』

「ふあああああああああ．．．．．」

俺は大きなあくびをする。

現在は生徒も帰り、他の教師たちも帰宅を始める午後八時。

当たり前だが職員室もほとんど人は居らず、いたとしても雑談をしているか明日のスケジュールを再確認している者だけだ。

ちなみに俺はスケジュール確認でも雑談でもなくプリント作成をしている。

ここ数日、午後になると極端に眠くなり仕事に手がつかなくなっているのだ。

気を抜くと船を漕いでしまっているので定期的に手や足を抓ったりすることで半強制的に目を覚ましてはいるが、如何せん効果は薄く昨日からは某翼を授けるカフェイン接種用ドリンクに頼っている。

体育教師である権藤先生からは、

「見た目完全に社畜だぞ」

と言われた挙句に仮眠室へ行くことすら勧められた。

俺はその勧めに眠気眼を擦りながら答える。

「いえ、まだ仕事が残っているので・・・」

「まだ五月なのに七月の日程調整をするのはさすがに進み過ぎだからさすがに休め」

「なに言ってるんですか、もしも何かしらの問題が発生した時の為に先々まで考えておく方がいいでしょう・・・」

「だとしても詰め込み過ぎは体に毒だ」

権藤先生はそう言ってテストプリント作成をしていたノートパソコンを勝手にパタリと閉じた。

あつと思つた時には帰りの支度が全て終わっていた。

とてつもない早業に反応出来ず、思考が追いついた時にはもう机は綺麗さっぱりに片付けられている。

権藤先生は見た目の厳つさに似合わ繊細な作業が得意らしく、こういつた早業を時折しているのを横目で見てはいたが目の前でやられるとその速さに驚きしか浮かばない。

「ほれ、お前はさっさと帰れ。・・・・・・・・一応仮眠をとってからな。その状態での運転は危険すぎる」

「分かりました」

俺は権藤先生がまとめた荷物を受け取るとゆっくりと立ち上がる。

少し覚束ない足で職員室を出ると学校裏の駐車場を目指す。

あまりにも視界がブレている。

階段を降りる時も少し体勢が崩れて転びそうになってしまった。

慌てて手すりを掴んで転落は避けられたものの、心臓が止まるかと思った。

どうやら、思っている以上に意識が消えかけているらしい。

フラフラとしながらもどうにか車まで到着すると崩れるように中へと入る。

そして椅子を倒すと、アラームを設定して意識を落とす。

人間は睡眠までに一〇分から二〇分ほど掛かるらしいのだが、俺が意識を落とすまでには数秒と掛からなかった。

これは就寝ではなく気絶になるらしいのだが、俺はそんな事に思考を使う余裕などなく眠りに入るのだった。



ピピピ・・・と単調な音が鳴る。

俺は再度落ちそうになる意識を無理矢理覚醒させて時間を確認する。

時刻は深夜零時を過ぎており、駐車場には俺の車以外はなかった。

それを認識すると、大きなあくびをしてからキーを回してエンジンを掛ける。

シートベルトを付けてライトで前方を照らし、ギアをバックに入れると車の方向転換をして駐車場を後にした。

この時間になると大通りであろうと車通りは少なくなり出歩くものはそうそういない。

だが、こんな時間だからこそ油断していると重大な事故に繋がったりするモノだ。

俺は眠気眼を擦りながら安全運転で賃貸マンションまで到着した。

そうして部屋まで向かおうとした所で一階共有スペースに何故か設置されているベンチに誰かが座っているのが見えた。

近づいてみると、その人物は懐かしく見知った人物でありそして誰よりも会いたくない存在でもあった。

「あら？ こんな時間にお帰り？ 教師ってのも大変なのね」

「今日は少し個人的な事で遅れただけで普段はもつと早く帰宅していますよ。．．．それで、何の用事ですか？」

「随分と他人行儀ね。私とアナタの仲じゃない」

「ええ。そうですね」

この人物の名前は『望月 春実』。

俺の幼少期からの知り合いであり、彼女”の双子の姉に当たる存在だ。

腰まである茶色く長い髪の内側を赤く染め、眼に赤いカラーコンタクトを入れる事で独特な雰囲気を放っている。

服装は薄灰色の肩・へそ・胸の谷間部分だけが隠されていないハッキリ言って非合理的でこじやれたワンピースに白いニーソ、赤いヒールという何ともどこかのパーティー帰りとも思えるモノだった。

春実さんと会うのは数年ぶりであり、この住所を教えた記憶もなければ連絡を取った覚えもない。

年賀状も高校卒業辺りから特定の悪友にしか出しておらず、そこに書いている住所は実家のモノで固定してあった。

一体なぜ春実さんがココにいるのか分からず少し訝しんでいると、彼女は妖艶な笑みを浮かべながら言う。

「ねえ、教師生活ってどんな感じなの？」

「まこと残念なことに特殊学級配属になったので貴女が聞きたい答えは返せませんよ」
「あらそう、それは残念」

春実さんはそう答えると何故かその場でクルリと回転した。

それにいったいどんな意味があるのかなんて分からないが、変に質問しても機嫌を損ねるだけなので何も言わない。

「春香から未来を奪っておいで結局は何もなせてないのね」

「そうですね。これでも自分なりに精一杯やっているんですが周りから雑務や汚れ仕事を押し付けられて毎度毎度貧乏くじを引かされる生活ですよ。やはり理想と現実の違いは違いないです」

「ふうん……。その疲れで生気のない顔を見る限り嘘ではなさそうですね。……。ま、良いわ。今日は私も色々あつて疲れてるし、今回はこのぐらいにしといてあげる。また来るわね」

「では、その時まで引越しておきます」

俺がそう返すと春実さんはクスリと笑った。

「逃がさないわよ。私が目の前に現れた理由を察せれないほど馬鹿ではないでしょ？」
「そうですね」

彼女の言葉に俺はそう返事をした。

その理由なんて最初から察しているし、それを止めようとも思わない。

恨みというのは例え筋違いでも勘違いでも逆恨みであろうと先へ進む原動力になる。

彼女を突き動かす原動力が俺への恨みなのだから、それをどうこうするつもりはない。
い。

俺の返事を聞いた春実さんは鼻歌交じりに俺の横を通り過ぎ去って行った。



俺はいつも通りの時間に起きると、いつものように準備を済ませて家を出る。

そして愛車を見てついたため息を吐いてしまった。

春実さんは昔からどこか大人びていて何か問題が起きた時の解決方法も今思えば効率の良い方法ばかりであった。

学業に関しても優秀で、俺なんかじゃ逆立ちしても勝てない存在。

そんな彼女には致命的といえる欠点がある。

それは、

「一〇円パンチって、昭和世代の子供かよ」

あまりのしよぼさに俺はそう呟きながら軽くため息を吐いた。

どんな壮大な復讐をするのかと思いきやいきなり期待を裏切ってくれる。

ここで、何も知らない人たちなら子供のいたずらだと思いかもしれないが、俺には確信というより確実な証拠が目に入っていた。

車につけられた傷はサインになっており、このサインは春実さんが昔から使っている物なのだ。

やるのだとしたら足の付きそうにないようにやれよ、と思いつながらも運転できなくなっている訳ではないし愛車と言っても長年使っているから愛着があるというだけで後々修理知ればいいだけの事なので別段気にすることもなく車に乗り込みエンジンを掛けた。

流石の春実さんもエンジンに細工をすると言った事は無かつたらしく、異常はなさそうである。

まあ、もしも細工がされていたとしても命を落としかねない改造はしないだろう。

彼女なら、性格上長い間苦しめる方法を取るはずだ。

俺はアクセルを踏み、車を発進させる。

この時間であつても早めに出勤する社会人はちらほらと居て、大通りだと一部渋滞になつている所もある。

普段はここまで混むことはそこまでなく、こうなるといつもより一〇分から一五定を組み立てていく。

空は雲がほとんどない晴天であり、またいつも通りの日常の始まりを照らしていた。



給食も終わり午後の授業の時間になった。

今日の五、六時間目は自習時間で、普段なら遅れている勉強内容を進めたり、少し応用勉強をさせたりしているのだが、今回は自習にした。

三人に自習用のプリントを渡すと、俺は告げる。

「俺は少し『仮眠室』で横になっているから。何かあつたらすぐに報告に来るように」
そうして教室を出ると、東校舎二階にある『仮眠室』へと足を向ける。

仮眠室は職員室の隣にもあるのだが、なぜか東校舎にも設置されており、部屋の中にはベッドが四つほど設置されている。

なぜ四つだけなのか等いろいろ深く考えたいと所はあるが、今俺がすべきことは疑問を解消する事では無く、俺の中にある疑惑を確定させることである。

俺は一つのベッドの上にある掛け布団を丸めると、朝の内に用意しておいたビニールテープで固定する。

これは、ダミーだ。

どうせ俺が寝ていると分かればアイツらは確実にここへ来るだろう。

俺はダミーをベッドに寝かせるとその上に他の掛け布団を掛ける事で簡易的だがそこに人が寝ているかのように偽造して寝息を録音したボイスレコーダーを設置する。

そうしてから、いつも持ち歩いているバッグから休日を買っておいた万能ロープを取

り出すと、二本を編んで一本にして強度を上げると、次はそれを編んで丈夫な網にする。

ガキの頃に手に入れた技術がこんな風に役に立つとは思っていなかった。

幼少期、田舎に住んでいた頃によく悪友たちと山に罠を仕掛けたモノだ。

誰が一番すごい罠を仕掛けられるかを競い合い、どんどんと過激で発見し辛い罠を作っていた。

俺もその例に漏れず色々なモノを作った。

特にロープを使った罠が得意で、酷い時はタコ糸を編んで強力なロープにして使ったりもした為にこういった事は得意なのだ。

気付かれぬように仕掛けたり、二重三重のトラップにすることで確実に捕縛できるようにしたりと子供の常識に捕らわれない自由な発想で色々作ったモノである。

昔取った杵柄、とはよく言ったモノで過去に経験した事は大人になっても役に立つことがある。

ほら、今まさに役立つてる。

そういうえば、「山に世界最高の落とし穴掘ってくるわ」って言ってそのままになくなったチビ助（名前忘れた）はどうなったのだったか？

大分昔の事なので一切思い出せない。

夜になって大人が大騒ぎして、山に入って行った何人が罠に引つかかった事でより

被害が拡大し、そつちが大きな問題になったせいでチビ助の事が一切思い出せない。

見つかったのか行方不明のままなのか、ハッキリとしない。

今度旧友と会う予定があるからその時にでも聞いてみようか。

等々と考えている間にトラップが完成し、俺はボイスレコーダーのスイッチを入れてから入り口側のベッドの下へと体を潜り込ませた。

目線の低い子供だと奥のベッドの下はバレる可能性があるのだ。

しばらくして五時間目終了を知らせるチャイムが鳴った。

それが鳴り止んでから数分後、彼女らの話声と廊下を歩く音が近づいてくる。

息をひそめて気配を消していると『仮眠室』の扉が開かれた。

「ね、ねえ……やっぱり止めようよ。先生の顔を見てたでしょ？　すごく疲れてたじゃん……」

「疲れてるって事は多少何かしてもすぐには起きないって事よ☆　それに薬もあるんだし」

「そうですねえ。それに、この日の為に簡単には解けない縛り方を練習してましたもんね。……それで自分で試して酷い事にも……くすっ」

「それは言わないでよぉ〜」

いや、流石に声が大きい。

俺はガツクリと項垂れ、軽く小さくため息を吐く。

いくら疲れて寝ていたとしてもこれだけ大きな声で話していればいくら何でも起きる。

予想が当たっていたことに驚きはなく、やっぱりそうかという感想しか出てこない。最近やけに眠かった事に対しコイツらが薬を盛っているのではないかという漠然とした予想があつたのだが、今それが確定した。

信じたい気持ちがあつたわけではないが、それでも今までの経験から信じられそうにはなかった。

しばらく観察していると桃知たちはゆっくりとダミー人形へと近づいてゆく。

「スヤスヤと寝てるねえ」

「そうですね。あと少しで……ふふっ」

「……むう〜」

そんな会話をしている三人を俺は観察する。

目線が低い為に事情を知らない者が見たら通報案件な角度になっているが今は置いておく。

桃知は何か不気味な笑い声を出しながら指をうねうねと動かしている。

そして、ダミー人形に飛びついた瞬間、トラップが発動した。

人形に軽く括っていたロープが外れ、大きな網が俺の隠れているベッドから飛び出して三人を絡め捕った。

独特の編み方によって作られた網は人体に簡単に絡まり動きを封じる。

昔に比べたらやはり腕が鈍っており絡まりが甘い、子ども相手ならあれで十分だろう。

ちなみに、コレは藻掻けば藻掻くほどより絡まるようになっていく。

ガキの頃の柔軟な発想によって偶然作られた方法は、悪友たちは真似できず俺だけの技術だった。

つまり、これは俺の努力の結晶であり強く自信を持てるモノなのだ。

「ちよお、何?! 何なのおおおお!!?!」

「もしかしたらバレてたのかもしれないねえ」

「ふええ……」

「ハア……。オマエらは、おとなしくしておくという事が出来ないのか?」

俺がそう言うのと三人は同時に俺の方へ視線を向けた。

桃知は相当藻掻いていたらしく雁字搦めになっていたが、早川と暗視は下手に動いていなかったからか特に絡まってはいなかった。

「さて、俺に何か言う事はあるか?」

もしもマンガみたいに表現するならば俺の体からはどす黒いオーラが発せられているだろう。

それだけキレている。

「えっと、あの、その……ごめんなさい」

「よし」

俺はそう前置きしてから言う。

「今すぐその縄解いてやるからそこに正座しろ」

そうして、俺は三人を相手に放課後まで説教をしたのだった。さすがに喉が痛くなつた。

7話 『DBって男の憧れが詰まってるよね。まあ、特に本編に関係ないけど』

俺は怒りの表情を隠すことなく三人を睨む。

顔を青くして席に座る三人の隣にはもう一つ机が設置されており、そこには大量のプリントが積み上がっていた。

そのプリントは反省文のボツ原稿である。

今回の件に関する反省文を書かせているのだがなぜココまでボツを出せるのかが不思議である。

無論、意地悪でこのようにしている訳ではなく、『何が』『どうして』『このような行動をして』『どうだったから』『怒られたので』『今後はこうするよう心がけます』という六つさえ書いてあれば良ししようと思っていたのだが、それが出来ていないのである。簡単に言えば、反省文にすらなっていない。

暗視と早川は良い線に行っているのだが桃知はそもそも文章として成立すらしていない。

文は滅茶苦茶、支離滅裂、反省の色無し。

読むたびに胃が痛くなっている気がするし、少し胃薬を飲みたくもなってきた。

教師って、ここまでストレスの溜まる職業だっけ？（今更）

少しため息を吐きつつ俺は桃知に再度懇切丁寧に『反省文とは』から説明をする。

だが、桃知は腑に落ちない顔で首を傾げていた。

ちなみにこれでこのやり取りは二〇回を超えている。

さすがにそろそろ理解してくれないと精神的にきつかったりする。

「なあ、桃知。もう少しマジメに書こうと思わないのか？」

「書いてるじゃん」

「それならばひらがな多様で文字埋めをするな。書けない字を書けと言っているんじゃないだろう。小学五年生までに習う常用文字を使えと言っているんだ」

「だって書けないんだもん」

「だったらこの漢字ドリルでもやるか？」

俺はそう言うのとバッグから『小学生漢字ドリル1年〜6年分丸わかり』を取り出した。

瞬間、桃知は俺が机に置いていたポツ原稿をバツと奪って席に戻り新しく反省文を書き始めた。

そこまで嫌ならやらなければいいのに。

そんなことを思いながら、バッグから漢字辞書を取り出して桃知の机に置く。

「これ見て良いから。ただし間違った漢字を使わない様にしつかり意味を読むんだぞ」
「は〜い」

桃知はそう返事をして紙に視線を移した。

それから十数分経ち、早川・暗視の順番で反省文が提出された。が、結局この日の放課後までに桃知は反省文を完成させる事ができなかった。

最後の方は俺の方も大分妥協していたのだが、漢字が使われるようになっただけで中身は一切進歩していなかったのだ。

胃がキリキリと音を立てている気がしたが、気のせいだと信じたい。



夜、家に帰ると部屋の前に見知った人がいた。

無視したいのだが扉に背を預けて凭れ掛かられている以上無視するのは不可能だろう。

強引な手段を使わなければ、の話ではあるが。

俺は春実さんが弄っていたスマホをサツと奪うと桃知用に用意していた人形の中にあった鮫型のハンドパペットの中へ素早く入れ、廊下の奥の方へと転がした。

突然の事に彼女は数秒間停止していたが、すぐに慌ててハンドパペット（インスマホ）を追いかける。

そして、それを横目に家の鍵を開けると室内に入り素早く鍵を閉めて事を終わらせる。

さて、ミッションコンプリートだ。

これをゲームで出来れば大佐から「いいぞ、スネーク」とお褒めの言葉を貰えるだろう。

そう胸を張って言える程完璧な揺動作戦だつて

「ちよつと！ なにすんのよ！ 開けなさい!!!」

背後でドンドンと扉を叩かれているが気にしない方針で行くとする。

たまにガチャガチャとドアノブが無理やり回されそうになっているがそれも無視。

こちらに害意を持っていて、あまり関わりたくないような相手と口を利く必要なんてないのだ。

俺は荷物を置くと風呂場へと足を向ける。

食事は帰ってくる途中のコンビニで済ませて来た。

無論、栄養に偏りが出ない様にしっかりと考えて弁当と野菜スティックと野菜ジュースとファ○チキを購入した。

食物繊維とタンパク質と糖質とその他ビタミンさえ補給できれば形は問わない。

扉の方からはずっとガチャガチャドンドンと音が鳴っているが、俺はそれを環境音と割り切つて服を脱ぐと、スーツは軽く畳んで籠に入れ下着は洗濯機の中に放り込む。

そして、サツとシャワーを浴びながらも頭の中で今後の予定意をひたすら組立てて行く。

だが、家のチャイムが鳴らされ、その思考は中断された。

全身を軽く拭き、素早く寝間着に着替えてから出ると、俺より少し身長の高い警察官がいた。

一瞬思考が固まったが、よく見るとその警察官の後ろで少し低身長 of 警察官に春実さんが確保されていた。

「なにか？」

「近隣の住民から通報がありまして事情を聞かせて欲しいのですが」

「痴話喧嘩です。シャワー浴びていて気付きませんでした。こちらで対処するので大丈夫です。お手数おかけしました」

俺は一瞬の間もなくそう答える。

警察官は少し眉を顰めたが、すぐに「わかりました」と答えるともう片方の警察官に指示を出して春実さんを解放する。

「こちらの不手際で申し訳ございません」

そう言つて頭を下げて帰つてもらつた。

無論、春実さんの頭を掴んで強引に下げさせている。

凄い表情で抵抗してきているが男女の筋力差で無理矢理抑え込んでいる。

だが、それでも片手だけでやつてる俺と全身で抵抗している春実さんでは大分無理して抑えているので辛かったりする。

そして、警察官がいなくなった所で手を離れた。

「何をしているんですか？」

「アンタのせいでしょうが!!」

春実さんの張り手が綺麗に当たった。

パアンツツという音が頭の中を反響しているが、これぐらいは許してやる（謎の上から目線）。

俺は叩かれた頬をさすりながら春実さんに視線を戻す。

「満足ですか？」

「本当なら金属バットを使って頭蓋骨を破壊してやりたいところよ」

「死にますよ、ソレ」

「殺したいって言ってるの。気付きなさい」

「ツンデレのつもりですか？ 流行らないので止めたほうがよろしいかと。．．．考えてみてください。二十代後半でツンデレとか二次元キャラしか需要有りませんよ」

「どうやら昔に比べて口が達者になったようじゃない．．．。アナタが昔大好きだった作品の攻撃を食らわせてあげようかしら？」

右の拳を作ってプルプルと震わせている春実さんの言葉に俺は首を傾げてしまった。

「か〇はめ波を放てるのですか？ だとしたら五〇年分の修行をどこかで行ったのですか？」

「死ねエ!! 龍拳ツツ!!」

下から繰り出されたアツパーが飛んできて普通に喰らってしまった。

龍拳はアツパー系の技じゃないっつ．．．!!

俺が顎を抑えて呻ってる間に春実さんはどこかに行ってしまった。



翌朝、俺は未だに痛む顎を抑えながら教室へと向かう。

あの人の目的が『復讐』である事は間違いないのだが、それをするまでの過程がめちゃくちゃすぎて理解出来ない。

普通に俺を苦しめたいのなら学校に俺に対するクレーム電話を入れて職場に居辛くさせたりすればいい。

それだというのにあのような奇妙な行動をするのは理解ができない。

今は授業スケジュールの方へ思考を割きたいのだが、理解できない事をされている以上そちらに気を向ける必要が出て来て少し面倒くさい。

少しボーっとしながら教室の扉を開けるといつも通り三人が話を止める。

彼女らはいつも何か話をしているのだが、俺が来ると同時にピタリと止めてしまうのだ。

何の話をしているのか気にならない訳ではないのだが、無理矢理聞き出す気もない。

俺はこれまたいつも通り教壇に向かう。

三人はそれぞれ席に座り、こちらに視線を向けている。

「ま、なんだ。まず初めに今日の六時間目は予定を変更して自習とする。自習時間は特別に何をしていてもいいぞ。本を読むもよし、ゲームするもよし。ただしトイレなどの用事を除いて教室から出る事は禁止だ」

そんな俺の言葉に顔を一番明るくしたのは桃知だった。

彼女にとって勉強しなくていい時間があるというのはとても嬉しい事なのだろう。

だけど、俺はそんな彼女に視線を向けながら（ある意味で）死刑宣告をする。

「桃知、お前はまだ反省文を出せてないから六時間目は反省文を書く時間だ」

「差別だー！！！！」

「差別と区別を混合しない様に。そこら辺に関する宿題プリント出すぞ」

「何モ文句ハアリマセン」

「桃知さん、片言棒読みになっていきますよ」

体を固めて汗を流しながら少しでも宿題を減らそうとする桃知に対し、早川は少しため息交じりに言う。

いつも通りの光景なので特に何も言う事は無い。

俺はバッグからプリントを取り出す。

昨日寝る前に完成させて先ほど職員室に設置されているコピー機で何枚か擦ってきた小テストを三人に渡した。

そして、

「これは来週行う予定のテストの予習用になってるから、しっかりとやるように」と告げるのだった。



色々あったが無事に六時間を迎え俺は今、桃知と共に『特別支援学級M』から二つ教室を挟んだ準備室にいる。

監視がメインであるが、コイツらは三人一緒に居させると何があるか分からない為に危険低下も目的としている。

今まではそこら辺を緩く捉えていたが睡眠薬を盛られて以来警戒をし続けている。

「できましたあ」

「……………ここここここここ、漢字に出来る。ここは前後の文章が滅茶苦茶だ。

やりなおし」

「もおやだあ!!!」

桃知はそう言っつてボツ紙をグシャグシャにして投げ捨てた。

裏は白紙だから後々使えるのに、もったいない事をするヤツだ。

「はあ……………。それなら、反省文免除の条件出してやろうか?」

「なにになに?!? 今すぐ出して!!」

「お前、もう少し態度を隠そうと努力したらどうだ」

あまりの変わり身の早さに呆れてしまう。

ずつとこの調子なので少しは成長して欲しい気持ちでいっぱいだ。

ただ、このまま行くといつまで経っても反省文提出が終わらないのも事実である。

これ以上こんな所で停滞するなら多少の妥協も致し方ないだろう。

「来週の本テストで合計点数が一番高かったら免除、これでどうだ？」

「そんなことで良いの!?! ラッキー♪」

「言っておくが、今までのテストは全てお前が一番合計点数が低かったぞ」

「大丈夫大丈夫♪ だってえアタシ本番には強いから♡」

「だったら今までのテストを何だと思っていたんだ・・・」

「あくびが出る退屈な作業」

「よし、次のテストは今まで以上に凝った内容にしておこう」

「そんなあゝ」

「あ、一番になれなかったら免除しないからしっかりと書いてくよう」

「ひくどくいゝゝゝ!!」

泣き言は聴かない。

少しアメを与えてやったのだからこれ以上は必要ないだろう。

これ以上を望むのは流石に都合が良すぎる。

俺はぶつくさ文句を言っている桃知の意見を全て却下し、テストの作製に移った。

その間、桃知は俺の手に抱き着いて来たり机に上って腰を振ったりとしてきたが特に気にすることなくプリントを作り続けた。

・ ・ ・ ・ ・ そんなことをしている暇があるなら一文字でも多く文字を書け。
少し呆れながらもこんなハチャメチャな日常に少し自分が慣れている事を感じた。

8話 『少女はただ本気を出していなかっただけなの だっ』

テスト当日。

桃知は今まで以上に、それはもう早川や暗視では比べ物にならない程目の前の答案用紙に集中して問題を解いていた。

反省文回避のためにここまでの集中力を発揮できるならそれを常に発揮して欲しいモノである。

黒板の前に座り三人を監視しつつ書類整理をしている間に一時間目が終わる。二時間目も三時間目も似たり寄ったりで終わっていく。

そうして二次休みになって俺一・二時間目のテスト用紙を採点してゆく。

暗視や早川はいつも通り八〇点以上であるのだが、桃知はその半分以下の三〇点取れればいい方だった。

なのに、今回は九〇点を超えている。

普段からこれぐらいやってくればいいのだが、反省文がそんなに嫌なのか。

書きたくないなら問題を起こさなければいいだけの話だろうに。

答案に赤ペンで丸を書いてある内に二次休み終了五分前のチャイムが鳴る。

それを聞いてから俺は職員室を後にして教室へと向かった。

その後もテストは進んで行き、採点をするたびに桃知が二人よりも高い点数を取っているところに頭痛を覚える。

なぜ今までこれをできていなかったのかが強い疑問でしかない。

それでも彼女がこのテストの為にしっかりと勉強してきたことが窺えるのでそれを嬉しく感じていたりもする。

多少の凡ミスはあるのだが、それを引いても九〇点を超えているという事は彼女の努力が伺えるというものである。

昼休みの時間になり俺が今回の点数から今後の授業内容をどうしようか考えていると隣から声を掛けられた。

そちらに視線を移すとどこか楽しそうな表情を浮かべる三宅先生がいた。

また何かの誘いか、と思いながらも仕事上話さないといけないので彼女の方へと向き直る。

「なにかありました?」

「いえ、なんだか楽しそうだったので何があったのか気になりました」

そう言う彼女に俺は手元にあつた桃知のテスト用紙を三宅先生へ渡す。

三宅先生はテスト用紙を見ると驚いたような表情になる。

まあ、今までの彼女を知る者ならこのテストの点を見て驚かない事は無いだろう。

「凄いですね。まさかここまで高い点数を取るなんて」

「ええ、まあでも点数が良いのと頭が良いのは別問題ですからね。これが今後も続けば次は机に向かつているだけじゃ学べない事を教えていきたいと思つています」

「それつて、夜の補習授業ですか？ それだつたら最初に私が相手」

「んな訳ないでしょう。自然に触れさせたり様々な所に見学とかに行つたりして実際に触れさせたいんですよ」

俺の言葉に三宅先生は少し眉を顰める。

「まあ、あそこの授業日程とかは担任教師に一任されますけど、社会見学とかどうやるつもりですか？ どこかの会社に行くにしても向こうが許可してくるか・・・」

「ああ、その辺に関してはちよつと知り合ひのツテを使おうと思つています」

「ツテ、ですか？」

「昔からの友人に顔の広い奴がいるんで、アイツに頼んでみようかなつて・・・」

「女性ですか？」

「・・・なんでそんなこと聞くのですか？ どうでもいいでしょう」

ホント、なんでこんな事を聞くんだ。

女性がこういつた恋愛系とかが好きであるとアイツはよく言っていたが、そうなのだろうか？

三宅先生の態度とかを見ているとそのように思えてくるが・・・。

「まあ、確か今は女になってるはずです」

「・・・オカマさんなのですか？」

「ある種そうであり、ある種違います」

アイツの事を思い、そんな曖昧な答えしかできない現状少し肩を落とす。

昔から変わり者で取っ掛かりの無いようなヤツだったが、今じや昔の面影が（性格も見た目も）全くない状態だからな。

最後に連絡をしたのは元旦のちよつとしたあいさつ程度だが、何事も無ければ元気にしているだろう。

少しスマホに視線を落とし、アイツの事に思考を向けると同時に昼休み終了5分前を知らせるチャイムが鳴った。

俺は三宅先生と会話を止めると職員室を出て教室へと向かった。



教室の扉を開けてすぐに俺は片手を頭に当てて深くため息を吐いた。

今の視界に映っているのは堂々と飴を舐めている三人の姿だ。

別に舐めるなどは言わないし多少の事ならば目を瞑るし今までも瞑ってきた。

だが、今回に関しては別の意味で頭を抱えてしまった。

「……お前らは愛知県にでも旅行に行ったのか？」

「ん……んちゅ……ネットが買った……ちゅぼつれろお」

「最近の世の中が便利なのは理解したからさっさと舐め終われ。五時間目開始まで後三分を切ったぞ」

俺はそう言いながら教壇近くに設置していた椅子に腰かけるとバッグからテストプリントを取り出す。

その間も三人は飴を舐め続けている。

特徴的な形をしたその飴が何なのかを俺はアイツから（無理矢理）教え込まれた為に知っている。

「ちゅぶ、んちゅつ、れろお、ちゅぶ」

「ぢゅ、ぢゅぶちゅ、じゅぼつじゅ、ぬぶ」

「んぶつ、れろちゅぶ、じゅぼ、じゅるう、じゅぶぶぶ」

三人の舐めている飴。

その正体は——所謂『子宝飴』である。

別名『授かり飴』。

愛知県小牧市にある田縣神社やその周辺で販売されている飴であり、その形状は男性器を模して作られている。

神社自体も祭りの際に男性器を模した木製オブジェがあつちこつちに投入されておりある種力オスな情景であると聞いたことがある。

そのこの飴をわざわざ取り寄せて教室で味わうな。しかもなんでチラチラこつちに視線向けて音を立てながら舐めるんだよ。

勉強とかの為に糖分を取る事は別に止めたりしないがなぜわざわざソレにした。

俺がテストプリントの最終確認をして時間を潰していると授業開始のチャイムが鳴った。

「ほれ、いつまで舐めてるんだ。テスト開始だぞ」

そう言いながらプリントを机に並べると、桃知はつまらなそうな顔をしてから子宝飴を噛み砕いた。

股間辺りがヒュツと冷たくなり軽く冷や汗が出る。

イメージやそれっぽい事を見るだけでも本能的に反応してしまうのは仕方が無いだ

ろう。

三人は各々鉛を処理してから鉛筆を持ってプリントに向き合う。

特に詰まる事も無くスラスラと問題を進めて行く。

カンニングをするとは一切疑っていない為監視していなくてもいい気はするのだが、規則で決まっているので怪しい動きが無いかを一応見ている。

見ていると言つても頭の中で今後の予定を整理しているけどな。

多少眉を顰めたりするところはアレど授業開始から三〇分もすれば全問解け終わつたらしく最後の見直しに入っている。

・・・桃知以外。

全部終わつたらすぐに顔を伏せて寝息を立てている。

午前中もこんな感じでありこのテストに対する自信が溢れているようにも感じるがその慢心で痛い目を見ない事を祈っている。

そうこうしている間に五時間目も終わり、六時間目も似たような感じで終わった。

「それじゃ、今日は特にホームルームはやらないから各自時間までに帰るように」

俺はそう言い残し教室を出ようとした所で後ろから声を掛けられた。

振り向くと少しもじもじしている暗視がすぐ後ろに立っていた。

いつの間にも、と思つたがとりあえず腰を落とし視線を同じにしてから言う。

「どうした？ 何かあったか？」

「えっと、えっとね、先生。．．．無理、しないでね」

その言葉に俺はキョトンとしてしまった。

だが、すぐに少し前に三宅先生や権藤先生から「疲れているぞ」と忠告を受けたのを思い出す。

表に出さない様にしていたつもりだがどうやら気付かれていたらしい。

これは、教師失格だな。

生徒に心配させてしまうなんて、やはり休んだ方がいいのだろう。

俺は軽く息を吐いてから暗視の頭を撫でる。

「心配してくれてありがとうな。でも、先生は大丈夫だ。これでも体は丈夫なんぞな」

「は、はううう．．．」

暗視はそう言いながら少し顔を赤くして俯く。

彼女の長い前髪で顔が隠れ表情が見えない為どう判断して良いか分からず慌てて手を離す。

「す、すまない。嫌だったか？」

「う、ううん。少し恥ずかしかっただけ。．．．先生、また撫でてくれる？」

「．．．．．おう、いいぞ。何かあったらいくらでも撫でてやるぞ」

「約束、だよ」

暗視はそう言うのと左手の小指を立ててこちらに伸ばしてきた。

なるほど、『指切りげんまん』か。

ホント、こういうところは普通の子供なんだよな。

そう思いながら俺も左手を伸ばし彼女の小指にソツと絡める。

「指切りげんまん、嘘ついたらハリセンボン飲みます。指切った」

指を離すと暗視は俺がさつきまで触れていた左手を抱くように右手でそつと抑え、うきうきとしている。

何が嬉しいのかはさっぱり分からないが、それでも満足してもらえらいいか。

俺は再度、暗視の頭を撫でると今度こそ教室を後にする。

さて、今日ひと踏ん張りして明日から少しずつ休んでいきますか。



嬉しさを隠すことなく体を揺らしている波奉を茜はジト目で睨む。

普段恥ずかしがり屋でもじもじしている友人が乙女の顔をして笑顔を浮かべていた。流石に変な視線を向けてしまうのは仕方が無いと言えるだろう。

そんなウキウキとしている波奉に優歌は微笑を浮かべながら言う。

「あの先生の事、好きなんですか？」

「ひやうつ！ え、な、なんで……」

「流石にバレバレですよ。恋する乙女の顔でニチャニチャしてたら猿でも気付きますよ」

「ニチャニチャ……」

波奉は自分の顔を手で触って確認する。

そんな様子を見ながら茜が軽く息を吐いてから言った。

「それで？ 先生の事好きなの？」

「う、うん……。大好き」

「へくなんで？」

茜は少しつまらなそうな表情でそう問う。

今まで異性に対してそう言った感情を見せなかった友人の心境の変化が少し引つかかっていたのだろう。

そんな少女の質問に波奉は返す。

「だって、今までの先生と違って私たちの事をしっかり見てくれてるんだもん。優しくて真つ直ぐで……気付いたら……」

「あく、それ以上は良いよ。もう胸がいっぱい」

自分から質問をしておいて茜は最後まで聞くことなく話を切った。

ただ、少女が自分の興味のあること以外には無関心で無神経な態度を取る事を理解している二人は特にそれに関して何も言わない。

「それにしても指斬りげんまんまで約束するなんてなんか普通だよね」

「そうかな？ 最大限私の想いも込めてただけど・・・」

「？ どゆこと？」

波奉の言葉に茜は小首を傾げる。

指斬りげんまんに最大限の想いを込めた、なんて言葉普通ならそのまま流していただろう。

だが、普段からおとなしくほとんど冗談を言う事の無い少女の口から出たのが引つかった。

「私さ、左手の小指で指斬りげんまんしたんだよ」

「・・・それで？」

「古来日本では左手の小指は心臓と繋がっているという考えがあったの。心臓 イコール 命って考えの時代に。そして、指斬りげんまんはもともと遊女——つまるところ売春婦が真の愛に生きるときに小指を第一関節から切り離して『命を懸けてでも愛します』って

行動で伝えた所に由来する行為。つまり、左手の小指とする指斬りげんまんは強いおまじないなの。素敵でしょ」

普段のオドオドした様子無くそう話す波奉に茜は少し引いた。

人とは好きなモノに対しては強い集中力や記憶力を持ちソレに対しての話になれば饒舌になる者も多い。

少女がオカルト系の本を読んでいる事は知っていたがまさかここまでとは思って思わず友人の意外な一面を垣間見て脳の処理が追いついていないのだ。

そんな茜を余所に波奉は言う。

「ねえ、優歌ちゃん。あの部屋いつでも使えるようにしておこうよ。私も我慢できなくなってきたし」

その言葉に優歌は飛び切りの笑顔で答える。

「いいですね。やっぱり少しでも発散させないといけませんからね。茜さんはどうします?」

「ん? やるに決まってるじゃん。でもさ、今まで一回もたった様子の無い先生は本当に大丈夫なの?」

「それなら大丈夫ですよ」

優歌は一切の間もなく断言した。

まさかそう返つてくるとは思っていなかった茜はキョトンとした顔になる。

その顔を真っ直ぐ妖艶な笑みを浮かべて見据えながら優歌は言う。

「先生のヒミツ、私知っちゃいましたから」

9話 『知り合いと情報』

テストから少し経って休日になった。

俺は普段着に着替えて昼過ぎ辺りに家を出るとこの街の中央駅近くにある喫茶店へと入る。

軽く店内を見渡すと待ち合わせをしていた人物はとつくに席に座っていた。

俺がアイツを視覚するとほぼ同時にレジにいた店員が声をかけて来た。

「いらつしやいませお客様。お一人ですか？」

「いや、待ち合わせです。相手はもう来ているみたいなので大丈夫です」

そう答えると「そうですか。ではごゆっくりと」と店員はその場を去る。

それを見届けてから俺はアイツの元へと歩を進める。

昔に比べると色々と変わってしまった人物なんだが、雰囲気とかがソイツらしさを醸し出している。

「よう、久しぶりだなマコト」

「やあ、久しぶりだね匠」

俺はソイツ——マコトの机を挟んで真ン前に腰掛ける。

コイツの名前は『大森マコト』。昔からの腐れ縁であり俺に知らない知識を（無理矢理）叩き込んだ人物でもある。

興味が無いと言う俺に対しネットスラングやアニメマンガゲーム知識を叩き込むまでは許せたが、性知識からエロ単語まで教え込まれてしまった。ある種嫌な記憶だったりする。

「君は変わらないね。その生気のない眼をどうにかした方が良いと思うよ」

「どうにもならないよ。．．．お前は十分変ったよな。スカートがお似合いの様で」
俺がそう返すとマコトは少し恥ずかしそうに笑う。

ホント変わったな、コイツも。

「ガキの頃は一緒に山の中を駆け回って泥だらけになっていたのにな」

「まあ、あの頃の私は男オレだったからな」

そう。

マコトは子供の頃は男だった。所謂トランスジェンダーというヤツだ。

昔から女っぽい奴だと思っていたが高校卒業と同時に性転換手術を開始して今ではれつきとした女性だ。そして何故か性転換したと同時に男勝りな性格になった。

また、本人は今まで通りに接して欲しいので特に変に意識することなく関わっている。

「それで？ 私オレに頼みつてなんだ？ お前の事だからどうせ『生徒の為』とか言うんだらうけどさ」

「よく分かっているじゃないか。．．生徒たちに社会科見学をさせたくてな。良い所ないか？」

「ん、そうだねえ。．．．それじゃ、君の抱えている悩みを教えることを条件に仲介してやっていいよ」

「は？」

ニヤニヤと笑うマコトの表情はまるで俺のすべてを見据えているように感じた。

いや、きつと見据えているのだろう。

昔からそういう風に全てを分かたような顔で確信を突いて来るヤツだ。

「顔に疲れの色が出てる。どうせ、生徒関連だろ？ まったく、君はもつと夢を見ろ。君が教師を目指したのだから『あの子』に対する君なりの罪滅ぼしの為だ」

そこまで言ってからマコトは間を置き再度口を開いた。

「ハッキリ言つて下らない。アレは誰がどう見ても不幸な事故であり抱える事自体が間違っている。人は夢や希望を持たなきゃすぐに潰れるよ」

「．．．それは自覚している。でも、これが俺に生き方だ。それに、『人』と『夢』を合わせてみる」

「うん? ……『怖い』だね。なるほど、言うじゃないか」

カカカツと楽しそうにマコトは笑った。

そして、真剣な顔になる。

「まあ、雑談はここまでだ。ここからは大人の会話と行こうじゃないか。……それで?

抱えている事は何だ? 心配するな、君も知っているだろうが私は口が堅い」

「超絶極秘社外秘企業秘密秘伝だぞ。いいか?」

「とりあえず『秘密』系の言葉を並べた感じだね。いいよ、聞いてやるさ」

「………何があろうと誰かに漏らすなよ」

俺はそう前置きをして今自分が配属されているクラスの事とあの三人の事をできるだけ事細かに話した。

最初に何度か念押しをしたがよほどの事が無い限りコイツが誰かに言う事が無いというのには理解している。

できるだけ漏れの無いように話し終わるとマコトは腕を組んで呻りそれからゆつくりと口を開いた。

「想像以上に厄介な事になってるね」

「想像以上だろうな。そりゃ」

「せいぜい学級崩壊が起きて教室で密室殺人事件が起こったのかと……」

「ニュースになるレベルの重大事件だよそりゃ」

名探偵でも呼ばないといけないような問題じゃないか。

コロンとか金〇一とかそこら辺を呼べってか。

「春実ちゃんが出てくるとはねえ。彼女も君みたいに過去に囚われ過ぎている。どうも変な事になりそうなのだった」

「俺もそう思うが、それが償いになるならどうでも良いとは思ってる」

「二人とも変な所で拗れてるねえ。……はあ、それで一番の悩みは生徒の事かあ」

マコトはそう言うのと少し眉を顰めてテーブルを指でトントンと鳴らす。

そうして数秒後に面倒くさそうに言った。

「うくん、もう押し倒して立場理解らせれば早くない？」

「生徒に手を出すかよ」

「真面目だねえ」

マコトはフフツと笑う。

蚊帳の外にいるコイツはともかく、当事者の俺からすれば笑えなかつたりする。

俺は深くため息を吐いてから言う。

「しっかし、私も今^{オレ}まで色々な経験をしてきたけどこんなことは初めてだな。どう対処したもんか……」

「逆に経験があつた方が恐ろしい」

そう返すとマコトは自身の顎に手を付けて少し考えこんだ後に呟く。

「あのさ、その生徒の一人——早川優歌ちゃん、だっけ？ 多分だけどその子なら面識あるよ」

「………は？」

「多分だけど、この子でしょ？」

マコトはそう言いながらスマホを取り出すとこちらに渡してきた。

受け取って表示されている写真に目をやると確かに早川だった。

そしてその隣にスーツを着てピースサインをしているマコトも映っている。

「ああ、この子だ」

「やっぱりかあ。この子が何者かは知ってるよね？」

ニヤニヤと笑うマコトの表情に軽くイラツとしながらもそれを表情に出すことなく俺はその問いに答えた。

「日本有数の巨大財閥の一つ『早川財閥』の令嬢だろ？」

「知っていたか。………そう、あの『三沢財閥』とも肩を並べ政界にも影響を持っている所謂上級国民と呼ばれる一族だね」

「その上級国民つてのを嫌がる人もいるって聞くからあまり口に出さない方が良いと思

うぞ」

「確かに、そうだね」

マコトは特に気にする事なく笑う。

特に気にした様子無く飄々としているその姿はコイツの本質が一切変わっていない事が分かる。

「まあ、とりあえず校外学習の社会見学だね。……えっと、今すぐに使えるツテだったら月見市に本部がある『服部組』が、」

「そういった方面は却下で」

俺はマコトの言葉を遮りそう切り捨てた。

社会見学をするのに何で裏社会のおっかない人の元へ行かなければいけないんだ。

「そうだねえ。……それじゃあ、ここはどう？」

マコトはスマホを少し操作してから俺の方に画面を向けて来る。

スマホの画面には清水寺の写真が映し出されていた。

「京都？」

「そう。中学生になれば修学旅行として行くことになるだろうけど、今の内に行つておいて歴史に触れさせるのを最初にした方が良いんじゃないかな？ 君が生徒たちを歴

史に触れさせている間にこっちで探つてやるさ」

「ありがとう。．．．出来ればスーパーとかコンビニで頼むな」

俺がそう言うのとマコトはケラケラと笑う。

「釘刺しか．．．。つてか、学校側からそういうった連絡してアポ取りすれば良いんじゃないのかな？」

「俺の担当しているクラスの授業内容や日程は全て俺に一任されてるからな。『学校側』としてのアポ取りは禁止されてるんだよ。．．．基本、学校からしてもアイツらを外に出したくないだろうからな」

そう、ため息交じりに言う。

あの三人をなるべく表沙汰にしたいくない気持ちは一応理解している。

学校の公式ホームページにも書かれていないし、そもそも東校舎が物置としてしか使われていない事になっている。

その為、『特別支援学級M』は存在しない事になっているし、表向き俺は他の教師のサポートをしている事になっている。

それで解決している辺り大分緩いんだと感じていたりする。

「なるほどね、何となく事情は分かっちゃったよ。それじゃあこつちで色々や合っておくさ。京都の方も手配しておくよ。．．．夏休み終わりでも良いかな？ 私オレも忙しいんだ」

「大丈夫だ。それまでに基礎授業をより徹底させる」

「ならいい。……つと、私にも予定があるからね。ここで失礼させてもらうよ。今後の予定合わせはメールか何かでお願い」

マコトはそう言うのと立ち上がりさっさと店を出て行ってしまった。

……ココの支払いをせずに。

なるほど、諸々の手配をする代わりに奢れという事か。

肩を落として呆れと悪い意味での関心を覚えながら俺は財布を取り出すのだった。



大森マコトは鼻歌交じりに街を歩く。

特に定職に就いている訳でもない彼女は基本暇を持って余している事が多い。

金を得る方法は別に定職についている必要はない。

マコトは情報を集めそれを売ったり、時には非合法的な取引で生活費を稼いでいる。

社会には表と裏がある。

友人である匠も表から隠されている事柄に巻き込まれているがあんなのは白に近い

グレーよりもさらに白い。

マコトのように裏社会のさらに奥にあるところまで下りている存在からすれば日陰の世界に居るようにはか見えぬ。

ただ、マコトも完全に奥深くまで関わっている訳でもなく、彼女の親戚はもはや暗闇の世界で輝くような人間だったりする。

鼻歌交じりにマコトはスマホを取り出すと登録されている連絡番号をタツチする。

数回のコールの後、相手が出る。

『もしもし』

「やあ、数日ぶりだね。今日さっそく彼と会う約束があったから上手く誘導しておいたよ」

『あら、それはありがとうございます。報酬はいつもの所ですらよろしいでしょうか?』

「はいよ〜」

マコトは軽い口調でそう言う。

傍から見れば普通の仕事会話のように思えるかもしれないが、この報酬が数百万単位だと知れば見方が大きく変わるだろう。

『それにしても、マコトさんと先生が知り合いだとは思いませんでしたよ』

「ふっふふ〜、これでも私は顔が広いからねえ。・・・それで? この前渡した情報は役立ちそうかな?」

『ええ。先生がなんで平然としているのかが分かりました。……後、聞きたいことがあるのですがよろしいですか?』

通話相手が改まってそう言った事にマコトは少しキョトンとする。

だが、追加で金になるなら良いか、と思いい少しは鼻歌混じりに答えた。

「どうしたんだい?」

『先生がどうしてあんなにも「教師としての職」に拘っているのかを、』

「ああ、それは話せない」

相手の言葉を最後まで聞くことなくマコトはそう切り捨てる。

まさかそう返ってくるとは思っていなかった通話相手はどこか困惑したように言う。

『ダメなのですか?』

「ああ、こればかりは彼の問題だからね。彼自身から話してくれることを待っていないさ
い」

『……分かりました。それでは、また何かあれば連絡いたします』

ブツツと通話が切られる。

マコトは数秒程スマホの画面を眺めた後、ポケットにしまい込み人混みの中へとその姿を隠して行く。

裏で着々と追い詰められ始めている事を、月城匠はまだ知らない。

10話 『過去』

生徒が全員帰宅した午後七時半。

俺は職員室でいつも通り今後のスケジュールの微調整をする。

前回のテストで桃知がやれば大分できるという事が分かった以上、授業難易度をもう少し上げて様子を見ていくのだ。

もう五月も終わりに近付き天候も安定している。

少し最近の天気 zu 思いを巡らせながら今日行つた授業プリントを基に予定調整をしていると隣から三宅先生が声をかけて来た。

「またスケジュール管理ですか？ 毎日少しずつ変更していますけどそこまで神経質にやる程の事ですかね？」

「今までの学業の遅れから考えればこれぐらいが普通です」

そう答えると三宅先生は少し詰まらなそうに頬を膨らませる。

「まあ、あそこのやり方は月城先生に一任されていますから文句はありませんけど……どこか納得していないような表情だが特に気にする事は無いだろう。」

そもそも、小学五年生でありながら（桃知だけ）小学二年生と同じレベルだったのだ

からその遅れを取り戻すためにスケジュールを詰めるのは仕方のない事だと思う。

ただ、前回のテストで問題の桃知のレベルも一気に上がったのは少し嬉しかったりする……のだが、ここで油断してはいけない。

今回アイツが頑張ったのだから、反省文を書きたくないからなのだ。

そんな下心丸出しで上がった学力を理由に油断をしていたら一気に学力が落ちるのは火を見るより明らかだ。

ここからどう維持していくかを考えないといけない。

顎に手を当てて少し思案していると三宅先生が手をパントツと合わせてから言った。

「そういえば、今週の金曜日に飲み会があるんですよ。良かったら参加しません？ 再来週の運動会に向けてみんなで『頑張るぞー』と気合いを入れる目的のモノなんですよ。毎年この時期にやっているのですが、今年赴任されたばかりの月城先生は知らなかったですよね」

「あ、拒否します」

「……えっ!?!」

俺の言葉に三宅先生はオーバーリアクションに反応する。

「来ないのですか?」

「ええ、俺は酒が苦手なんです。飲むとブレーキが利かなくなってしまうんで」

「・・・なるほど。飲ませればいいのか（ボソツ）」

「聞こえていますよ」

話してはいけない事を話してしまった気がする。

今後はこの人から渡された飲食物全般に注意を向けないといけないのかもしれない。
俺は深くため息を吐くと荷物を纏める。

そして、

「今日はこれで失礼しますね。お疲れ様でした」

「あゝ、お疲れ様でした。今度ホテル行きましょうね」

「行きません」

この人の平常運転が理解できない。

教師としてはまともな人なんだけどな・・・。

少し呆れ笑いをしながら俺は職員室を後にした。



家に戻ると今日もまた春実さんが玄関に背を付けて立っていた。

それを視覚すると同時に肩をがっくりと落として深くため息を吐いてみる。

するとそれに気づいた春実さんがズカズカと足音を立てながら近づいて来た。

「何なのよ今の反応は!! もっと・・・こう・・・マシな反応は出来ない訳!!!」

「言葉が出てこないなら無理に言おうとしなくていいですよ」

「くっ・・・随分と言うようになったじゃない」

「この程度でその反応とは、子どもじゃないんですから・・・」

つついっ呆れてそう言葉を漏らしてしまった。

だが、彼女が顔をグイッと近づけて来たと同時に異変の正体に気付く。

そして、つい鼻を塞いでしまった。

「酒臭いですよ。飲み過ぎなのでは？」

「は? この私が酒に飲まれてるだけでも言いたいのか? 馬鹿じゃないのか? 私はアン

タと違って酒に強いんだよ」

「そうですか。それじゃあさっさと退いてください。明日に備えて休まないといけない

ので」

俺はそれだけを言うと彼女の隣を通り抜けて部屋に入ろうとしてドサツと言う音に視線を向けてしまった。

先ほどまで二本足で立っていたハズの春実さんが膝を付き尻を上げ上半身が地面に付いた何とも情けない状態で倒れていた。

見捨てるのも気が引けて近づき話しかけるが返事が無い。ただの屍のようだ。ハアと深くため息を吐くと俺は春実さんを抱えて部屋に入る。

そこら辺に放置して万が一な事あったら気分が悪い。

と言つても俺の家にはシングルベッドしかなく二人で寝るのには狭いし、そもそも二人で寝る気もない。

俺は春実さんを寢室のベッドに寝かすとソツとタオルケットをかける。

そうして、寢室を後にすると晩飯をサツと作る。

と言つても目玉焼きを作るだけだが。

白米に関しては朝の残りがあるし、みそ汁はインスタントに余りがありさつさと消費したいのでそれで済ませる。

目玉焼きに醤油をかけて食べる。

そう言えば、目玉焼きには醤油派、塩派、ケチャップ派、ソース派がいるらしいがどれが一番美味しいのだろうか？

まあ、人それぞれの味覚の違いで甲乙は決まるだろうけど。

そんなどうでも良い事を思いながら食器を片付けて風呂場へと向かう。

脱衣所に入り念のために鍵をかけておく。

そうしてから服を脱ぎ、いつも通りシャワーを浴びる。

ゆっくり風呂に浸かりたい気分だったのだが、春実さんの事がある以上のんびりしている暇はなさそうである。

その事を思うとつい深くため息を吐いてしまった。

風呂場を出て体を拭くとさっさと寝間着に着替える。

普段はすぐにも寝に入るのだが、今日は何時もよりも早めに帰宅しておりまだ寝るには早い。

「・・・どうしたものか」

来週までの授業プリントはもう完成してしまっているし、スケジュールも学校で調整してしまったので手持ち無沙汰になってしまっている。

仕方がないので3DSを開き、適当にポケモンの厳選をする。

なんやかんや言ってもあの三人は頑張ってくれているのだ。

たまには遊びに付き合ってもやるのも良いだろう。

下手に勉強を詰め込んでやらせても逆に身に付かない。

どこかの某超加速インフレバトル漫画でも言っているが「よく動き、よく学び、よく遊び、よく食べて、よく休む」これは意外に重要だったりする。

特に幼い子供には何よりも大切だったりする。——大人になればある程度無理しても大丈夫だからよく遊んだりよく休む必要はあまりない。

多少リラックスできればいいのだ。

死ぬ気でやろう、基本的に死なないから。

しばらく無心でタマゴの孵化をしていると気付けば午後一〇時を過ぎていた。

いつもよりは早めだが、俺は3DSを閉じてタオルケットを被ってリビングのソファーに寝転がる。

そして、眼を閉じれば俺の意識はスツと闇の中へと沈んでいった。



パツと目を覚ますと時計の針が4時35分辺りを指していた。

いつもより一時間ほど早く起床してしまった。

(……まあ、いいか)

俺はゆっくり体を起こすと洗面所まで向かう。

少し肌寒いのでお湯を出し、温まったのを確認してからそれで顔を洗う。

そうしてから髪を櫛でとかす。——ちなみに未だに床屋には行けておらず髪は大分伸びてしまっている。

今週末にでも『アイツ』の経営している床屋にでも行こう。

そう思いすぐにスマホを操作してメッセージを送ると数秒と経たずに返信が来た。

ぶつきらばうに『ん』とだけのモノだが、いつもの事なのでそのままスマホをしまう。普段はやかましいヤツなのだが、なぜかメール等の連絡では反応が薄い。

まあ、ネットとかで性格が大きく変わる人がいるとどこかで聞いたことがあるのでそういうパターンと一緒だろう。

俺は着替え、台所に向かうと余り物で朝食を作る。

と言つても昨晩同様、目玉焼きを作りインスタントコーヒを淹れるだけだが。

白米に関しては昨日の残り。

準備が終わる頃には五時四〇分ほどになっていた。

それを確認してから寝室に向かうと、腹を出した状態で春実さんが寝息を立てていた。

どうやら寝相の悪さは相変わらずらしい。

俺は一旦台所まで戻りお玉杓子とフライパンを持って寝室に戻る。

そして、

「朝ですよ。起きなさい」

二つを思い切りぶつけ合い大きな音を鳴らす。

ガンガングワングワンと激しい音が部屋中に響き、春実さんは慌てた様子で飛び上が

る。

「……………はへ？」

「はい、おはようございます。朝ごはん出来てますからそれ食べたらさっさと帰ってくださいね」

それだけを伝えてリビングへ向かおうとすると頭に柔らかい物が当たり床に落ちる。

下を見れば枕が転がっていた。

「なに、したの？」

「何もしていませんよ。泥酔して倒れたから放置するのもアレなんでベッドで寝かせただけですよ」

俺の言葉に春実さんはジト目を向けてくるがそれを無視する。

「……………アンタ馬鹿じゃない？ 放置しておけばよかったのに」

「流石の俺もそこまで鬼ではありませんよ」

「見離しなさいよ。それが一番お似合いよ」

春実さんは米を咀嚼し、飲み込んでから言葉を続ける。

「春香の時そうだったでしょ？」

「……………そうですね」

「あの子の手を離して未来を奪った人間が、人にものを教えているなんてね」

「彼女の未来を奪ってしまったからこそ彼女の夢を叶えようとしたんですよ」

「無理でしょ。アナタはどうせあの時みたいに手を離すわ」

「……次こそは離しませんよ」

そう答えると春実さんは深くため息を吐く。

そしてどす黒い瞳でこちらをジッと睨んできた。

「アナタが死ねばよかったのよ。春香もきつと恨んでいるわよ」

「そうですね。恨んでいるでしょうね」

俺はそれだけを言うと目の前の食事に視線を落とす。

春実さんもそれ以降何も言う事無く食事を続けている。

そうして、食事を終えた春実さんは何も言う事無く部屋を出て行った。

「……ホント、恨んでもらった方が楽なんだよ」

無意識的にそう呟き柵の上に置かれている小さな額縁で飾られた写真を見る。

まだ三人で笑顔でいられた頃、最後に撮られた写真。

俺と春実さん——そして春香が楽しそうに笑っている過去の幻影を。



いつも通り出勤するとほぼ同タイミングで出勤してきた三宅先生に声を掛けられた。

「おはようございます。なんか疲れ目ですね」

「おはようございます。昨日色々ありましたので」

そう答えると三宅先生はどこか楽しそうな顔になる。

「恋人とお楽しみでしたか？」

「・・・残念ながら、恋人と別れてもう一四年は経過していますよ」

「一四年、ですか。つまり小学生頃ですね。それから恋人いないんですね」

「ええ」

俺はそう答えながら手提げバッグ内の授業プリントを机の上に出してゆく。

そして、しっかりと枚数を確認する。

「なんです？ 喧嘩でもしたんですか？ 子供って少しの事で遊ばなくなったりします

からね」

「・・・そうですね。喧嘩別れなら良かったんですけど」

「・・・あつ。あの、すみません。変な事聞いてしまって」

俺の言いたい事に気付いたららしい三宅先生はそう謝罪をする。

それに対し、

「いいですよ。もう、昔の事ですから・・・」

とだけ答えると俺は荷物を纏めて教室へと向かった。

11話 『バレた』

俺はいつも通り授業をする。

現在は算数の『小数×小数』を説明している。

大体の計算方法の説明を終わらせてから早速プリントを渡す。

「分からないところあったら言うんだぞ」

とは言うモノの、三人はそれぞれ目の前のプリントに視線を落とし真面目に問題を解いている。

ほんの二ヶ月前までこんな当たり前の光景が当たり前では無かった事を考えるとどこかジーンと来るものがあるな。

未だに通常クラスからすればズレている所はあるが、それでも普通に授業をできるこの環境はホントに良い物だろう。

授業が始まり最初五分程を説明に使い、残りはプリントの問題を解くだけなのだがそんなの二〇分もあれば終わってしまう。

最初に全問解いてプリントを持ってきたのは早川で、次に暗視だった。

それから五分ほど遅れて桃知も提出する。

俺はその場で採点をしていくと早川と暗視は九割以上の正解（ちよつとした計算ミス有り）で桃知が七割以上の正解（一部空白の欄有り）であった。

桃知の正解率が前のテスト時よりも下がっているがそれでも前に比べたら大分マシなのでここからまた少しずつ伸ばしていけばいいと思っている。

「よし、全員合格。後の時間は本を読むなりしてゆっくり休め」

俺がそう言うのと椅子に座っていた三人が各々動き出す。

最近は無理に詰め込むのではなく休めるときは休ませる方法を取っている。

こうしてから僅かではあるが三人の記憶力や理解力が上がってきているのだ。

ちなみに、俺は三人が本を読んだり談笑をしている間にPCへ授業データを打ち込んで今後の予定の微調整をしている。

だが、何故かいつも本を読んでいる暗視が本を持って近づいて来た。

「? どうした?」

「あ、あの。読めない文字が、あるの」

「・・・なるほど。見せてみなさい」

ああ、何だろうか。

この会話は普通の生徒と教師のやり取りみたいで目頭が熱くなりそう。

俺はどこか感動を覚えながら暗視の開いた本のページを見る。

そして、速攻で頭を抱えてつい先ほどまで覚えていた感動のようなものが全て吹き飛ぶ。

暗視の開いているページの挿絵はセーラー服を着た（多分）ヒロインであろうキャラが淫らな事になっている物であった。

そう、所謂官能小説と呼ばれるモノだ。

「…………お前さ、まさか今までずっとこれ読んでたのか？」

「うん…………、現在最新二巻まで出てる」

「大分長いシリーズなんだなあ。それで、誰に言われてやった？」

俺の言葉に暗視が肩をビクリ動かし、桃知が読んでいた本に顔を埋めた。

あまりにも分かりやすいその行動に深いため息が出る。

「桃知、お前はそろそろ自分の辞書に『反省』と『友達に無理強いをしない』っていう言葉を入力しなさい」

俺はそう言いながらも暗視の開いているページに書かれている小学五年生までに習わない漢字とその読み方をメモ帳に書き込んで渡す。

それを受け取った暗視は席に戻ると少し顔を赤くしながら本に視線を戻す。

桃知の方に視線を向ければ明後日の方向を見ながら口笛を吹いている。漫画でしか見た事ない光景のため息を吐くしかなかった。



放課後、俺は職員室でパソコンを開いて今日行った授業プリントの採点内容と授業態度を纏めていく。

赴任したての時の記録を見れば三人の成長が分かり少し気分が和らぐ。

幾つかのプリントを纏めていると国語のプリントが見当たらないことに気付いた。

バッグの中を探ってみたが見当たらない。どうやら、教室に置いてきてしまったらしい。

俺は軽く息を吐くと立ち上がり職員室を後にする。

東校舎へ向かうには一度、一階まで下りてから渡り廊下を通過する必要がある。

二〜三階にある渡り廊下は他の生徒が侵入しない様に扉で封鎖されており東校舎側からしか開かない様になっている。つかさそうじやないと万が一火事が起きた時に逃げ遅れる危険があるから。

東校舎に入り二階まで上がった所でちょうど上から桃知と早川が下りて来た。

「おっ！ お前ら、まだ帰ってなかったのか。もうすぐ六時になるぞ」

「大丈夫ですよ、先生。先ほどお迎えを呼んだところですので」

「アタシはそこに乗せてもらうんだ」

桃知はそう言つて笑顔でピースをする。

早川のそのやり方は流石お嬢様と言つた所だろう。

「そうだ、先生。提案あるんだけどいい?」

「? なんだ?」

「もしも今度のテストで高得点取れたらさ。一つ言う事何でも聞いてよ。先生の出来る事で良いから」

嫌な予感しかしないのは気のせいだろうか。

純粹に見えるその笑顔の裏でいったい何を考えているのか腹が読めない。

ただ、これで少しでもやる気を出してくれるならいいか。

「いいぞ。ただし、俺のできる事限定だからな。拒否されたら別の物に変えるんだぞ」

「は〜い」

桃知は満面の笑みを浮かべながらそう返事をした。

普通にしていればただの子供なんだが、普段の行いのせいで純粹に見れないのが何とも言えない気分になってくる。

常日頃の行いつてのは大切だな（遠い眼）。

「まあ、何だ。気を付けて帰るんだぞ」

そこまで言ったところで少し気になっていたことを口にする。

「………ところで暗視は先に帰ったのか？」

その質問に二人は顔を赤らめどこか妖艶な笑みを浮かべながら言う。

「後ろ♡」

「えっ、

後頭部のズズズキとした痛みで目が覚める。

未だに意識はハッキリとしておらず何が起きたのかを脳が理解してくれない。

だが、下半身の違和感をトリガーに意識が覚醒する。

目を見開き何事かを確認するとズボンが脱がされ俺のち○こを三人が舐めていた。

「なあっ!?!」

「あゝ、ようやく起きたんだ先生♡」

「フフツ、先生の男の味、すつごく美味しいですよ。それに、この臭い・・・♡」

「んちゅ♡ れろお、ぶちゅ♡ むちゅにゅぶ♡」

慌てて自分の状況を確認すると、手はポールを囲うように後ろで組まされて手錠で封じられており、足も（手ではないが）手錠で封じられていた。ポールは床に固定されておりビクともしない。

気絶していたせいで『あの方法』が使用できずに完全に勃起したち○こが反り立っている。

「なん・・・お前らっ・・・!」

俺が混乱で言葉をうまく出せないでいると幼いその顔に似合わない程淫らな笑顔を浮かべながら早川が俺の耳元で呟く。

「『呼吸法』、ですよね。先生のトリック」

「ツ!!」

「スポーツ選手たちが体力維持や精神安定をする為に使っている方法の亜種。特別な呼吸で興奮を抑えておち○ちんが立たない様にしていたんですね♡ でも、意識が無ければ無意味ですからね」

早川はそこまで言うのと耳に舌を入れて舐めて来た。

下半身では桃知と暗視がそれぞれ取り合うようにフェラをしている。

「むちゅう♡ れろ、ぐちや♡ ぬぶぶ♡♡」

「ん、んぶぶ♡ ん♡ ん♡ じゅぽ♡ ちゅ♡♡」

「ぐちゅ、ぬちゅ♡ ぐちやぐちゅ♡ フツ、ぴちや♡♡」

「ツツツツ………!!」

快樂が脳を走る。

今までに感じた事の無い感覚を処理しきれず思考が定まらない。

何とか抵抗しようとするが手錠がガチャガチャと音を鳴らすだけで意味を成さない。

感触的に子供のおもちやではなく鉄製の本物みたいである。つまりは人力で破壊する事は不可能であろう。

どうにかしようとし続けるが本能的な快樂で思考力が鈍り出す。

「あく、先生のち○ちんすつごくビクビクしてる♡ 出そう？ 射精して、射精せ♡♡

♡

「茜ちゃん、最初に私が飲むね．．．♡ あくむ、ん♡♡」

暗視が亀頭をその小さな口で頬張る。

瞬間、限界を迎えたムスコが快楽のままにソレを吐き出す。

ビュルルツツという感覚と共に暗視の口の中へと出された精液を口の中で転がし、それだけで体をビクビクツツ♡ と痙攣させる。

「ん、ん．．．んくつ．．．．．はあああ♡ 凄く濃くて、凄く美味しい♡♡♡」

いつもと違いどこか引き込まれてしまいそうなほど淫らな表情を浮かべる暗視を見て俺の理性はよりこの状況を打破する方へとシフトしようとする。

「先生凄いですね。射精したのにまだ元気ですよ。ほら、見てください。はっさんのおま○こ♡ おもらしたみたいに愛液でびしょびしょになって今すぐにでも先生のうち○ちんを飲み込みたいって言ってますよ♡♡」

「．．．．．早川、なんでお前は俺の『呼吸法』の事を知っている？」

「あら、この状況でそれを聞きますか．．．マコトさんから聞いたんですよ」

あの野郎。

今回の件の原因の一端となった人物の顔が浮かび怒りが前面に出そうになる。

「まあ、『呼吸法』以外はプライスレスだと言われて教えてもらえませんでしたけどね」
「なる、ほど」

俺はそれだけを言うと大きく息を吸い、吐く。

それを繰り返して全身に酸素を巡らせる。

「今更、勃起を抑えようとしても無駄ですよ。私たちの中にビュービュー出すまで止める気はありませんから」

早川はそう宣言するとまた耳を舐め始めた。

桃知と暗視も再度ち〇こを舐めて刺激を与えてくる。

「れろ、ん♡ スンスン♡ はあ♡♡」

「んく、むちゅ♡ あむ、ぬぶ♡♡♡」

「ぴちや、ずぞ♡ ぬちよぬちゅ、フー♡」

再度俺を襲う快樂の波を押し殺し、それに流されずひたすら呼吸を続ける。

ひたすら大きく吸い、吐く行為を繰り返す。

そして、

——ゴグツツという鈍い音が部屋内に響く。

突然の事に三人は停止し、ポカーンとする。

その隙に手錠から手を抜き、外した骨をはめ直す。

「へ？」

唐突に発生した事に幼い頭では理解が追いついていないらしく俺は早川の胸ポケットから鍵を取ると桃知と暗視を怪我しない様に注意しつつ押し退け、足枷となっていた手錠を外し、右手首にぶら下がっている手錠も外す。

耳を舐められる前、近づいて来た早川の胸ポケットから金属の擦れる音が聞こえていたのでそこに鍵があると予想していたのだ。

拘束を外したら、部屋の端に無造作に放り出されていたズボンとパンツを急いで履く。

今回の原因の一端であるマコトから過去に教わった拘束外しの技術が役立つとは……。

無理矢理叩き込まれた不必要な物を使う日が来るなんて想像もしていなかった。

いや、そもそも何でアイツは骨を外す技術を知っていてしかもそれを同級生に叩き込むという狂行に至ったのだろうか。この疑問は今度本人に会った時でも問いただそう。

「さて、と。お前ら、反省文だけじゃ済まさないぞ」

三人に向き直りそう宣言すると流石に焦っているであろう桃知がそつと口を開く。

「えっと、先生のち○ちんで理解わからせる感じですか？」

「これから一週間、宿題の量を2倍にする」

俺の言葉に桃知は絶叫、早川は肩を落としてため息を、暗視は何も聞こえてないよう
で夢中でオナニーを——ハイハイそこストップ発情止めい。

流石に今この状況で説教をしている余裕はなく、まず汚れた部屋の掃除を始める事に
した。

ああ、仕事が増えた。

12話 『滝①』

あれから一日が経過し、俺は一時間目から三人に反省文を書かせている。

前書かせた物は一枚で済ませたが、今回は三枚を課題としている。

早川と暗視はさらさらと書いているが、やはり桃知が頭を抱えて呻っている。

こうなる事を想像できなかったのか疑問でしかない。

授業開始から三〇分が経過したところで急に桃知が立ち上がり近付いてきた。

また前みたいにひらがなで埋めたのかと思いつつ顔に向けていきなり抱き着いて来た。

背中に手を回し上目遣いでこつちを見てくる。

スツと鼻を刺激する甘い匂いと桃知の表情に胸がドキツと鳴る。

「ねえ、先生。ちよつとは免除してよお。ね？ いいでしょ？」

「つ。・・・ダメだ。真面目に書きなさい」

俺はそう言つて桃知に軽くデコピンをする。

「ううゝ・・・」

「二人を見習つて真面目になりなさい」

桃知は軽いため息を吐いて席に戻る。

それを横目に俺は息を整え、乱れた心を落ち着かせる。

昨日の影響なのか三人を直視したり近づかれるだけで心臓がドキドキと鼓動を速めてしまう。

その度に息を整えてムスコがおっ立たないようにしている。

そうして、授業が終わり一旦職員室へと戻ろうと廊下を歩いていると後ろから足音が近づいてくる。

何かあったのかと思い振り返ると、ガバツといきなり飛びつかれた。

「なっ!」

「油断大敵ですよ。先生♡ んっ」

俺の首に手を回しガツシリと抱き着いて来てから舌を絡めて来たのは、早川だった。

突然の事に一瞬混乱してしまったがすぐに引きはがそうとするが、子どもとは思えない程の力でガツシリとホールドされ、早川が舌を動かすたびにポタポタと唾液が廊下に垂れる。

「ングッ、ん……」

「んちゅ、ちゅぱちゅ、れろ……んく、ん」

早川の舌が口の中に入って来てそのまま俺の舌に絡めようとしてくる。

『口や耳、脇とか臍とか時には指の先もそうだけど神経の集中している所は性感帯にできるとだよ』

混乱する頭の中に浮かんできたのはマコトから教わった言葉でありこんな所では役に立ちそうにないモノであった。

グルグルと回る思考でこれ以上はマズいと（何とか）判断して早川の脇に手をやると全力でくすぐる。

「ひゃうっ！」

流石の早川もくすぐったいのは苦手だったのか、手が緩みその隙にホールドから抜け出す。

そうして口元を拭い、息を整える。

「おま、お前っ……」

「はあ♡ 先生と唾液混ぜちゃいましたね。どうします？ 先生が良いなら、私の愛液と先生の精液混ぜ混ぜしてもいいんですよ♡」

「アホか。俺は教師でお前は生徒。手を出したりはしない」

そう宣言するとニヤニヤしていた早川がスンツとつまらないような表情を浮かべる。

「強情ですね。素直になればいいのに、何が先生をそこまで縛るんですかね」

「……………」

「まあ、いいです。今日はここまでで♡」

それだけを言うと早川はくるりと踵を返しきつさと教室の方へと戻って行った。

その背中が、その雰囲気がどこか不穏なモノを感じさせた。



席に座り楽しそうに鼻歌を奏でながら優歌は足をパタパタと動かす。

普段からどこかつまらなそうな表情をしているその顔に浮かぶ楽しそうな笑顔に茜は首を傾げる。

「ねえ、優歌ちゃん。昨日の今日で先生の態度が違うけどさ。やっぱり昨日の事が影響してるんだよね」

「しているでしょうね。それに昨日先生が寝ている間に媚薬を使って無理矢理興奮させていましたしね。先生みたいに真面目な人ほど一度快楽を覚えさせちゃえばそれが後を引いちやうんですよ」

そんな言葉に茜は「へ〜」と感心したように返す。

そもそも茜が今まで会った大人は少し煽ればすぐに手を出してくる者しかいなかったのだ。なのに一切の煽りの利かない匠はある意味天敵であった。

その壁が瓦解し始めていると聞かされればドキドキと胸が高まり、興奮し始めてしまうのは仕方が無いと言えるだろう。

「それじゃあさ、今押せばいけるかな？」

「いやあ、さつき押してみましたけど跳ね除けられてしまいましたよ。意固地な人です」
「そ、それじゃさ、昨日みたいなことするの？」

波奉はオドオドしながらもそう言う。が、その顔は紅く火照っており興奮を隠しきれない。いや、顔だけではない。

少女は自身の手を使ってクチャクチャと自慰をして指を動かすたびにビクツ♡と体を震わせる。自重という言葉はここにはないらしい。

「我慢できないんですか、はっさん。でも、下手に弄つたらもつと我慢できなくなりますよ」

優歌の言葉を聞きながらも波奉は指を止めない。

そんな友人を見て茜は自身のランドセルの中に手を入れてガサゴソと中を探る。

そして、何かを掴むとサツと取り出す。

「はい、はっちゃん。パイプ。これ使って」

何故そんなものをランドセルに入れているのだという野暮なツツコミをする者はこ

の場にはいなかった。

「ん、ありがとう。茜ちゃん」

波奉は受け取るとバイブを口に近付けてレロリと舐めて自身のだれで濡らし始める。

そんな姿を横目に茜はつまらなそうにぼやく。

「むゝ、あとどれだけすればいいのよゝ」

「焦りは禁物。外堀から埋めていくものですよゝ」

「・・・ま、やれるならいいけど」

茜はそう納得してランドセルから取り出したガムを口に含んだ。



休日。

俺は朝早くから友人の経営する床屋へと足を向けていた。

さつさとして行って散髪してもらって今日一日は今後の予定を考える事に使いたいのである。

七時半過ぎぐらいに到着する。

扉を引いてみると一切の抵抗なく開いたのでそのまま中に入ると、奥から懐かしい声が聞こえて来た。

「おっと、早えなあ。相変わらずその先々まで考えてさつさと事を済ませる所は変わっていないようだなあ！ 元気そう・・・ではないが生きているからヨシ！ 久しぶりだなあ!!」

うるさい。

つい癖で耳を塞いでしまった。

昔つからテンションがおかしい奴だったがここしばらく会っていない間に悪化していたらしい。

奥から身長二メートル以上はある黒く光る肌の筋肉ダルマが現れ、これからまたうるさくなるのだらうなと直感する。

コイツの名前は『熊谷くまが ユウト』。

小学生の頃からのクラスメイトであり、マコトなんかより信頼できている人間である。

この巨体でありながら繊細な作業が得意で、気付いたらいつの間にか床屋になっていた。

「散髪頼む。お任せで」

「ほいほい。さつきと座れ。つたく、疲れが顔に出てるぞ」

ユウトはそう言いながらもテキパキと準備をする。

そして、そのクリームパンのような腕には似つかわしくないほど小さな鋏を機用に持ち散髪を始めた。

「やっぱり学校教員つてのは大変なのかあ？ 痩せたように見えるぞ」

「昨年から五kg減った」

「………食べるか？」

「急にマジトーンになるな。しっかりと食べてるから気にするな」

ユウトは軽いため息を吐きながら俺は気になっていたので切っていく。

鏡越しにそんな姿を見ながら俺は気になっていたことを質問する。

「なあ、チビ助つて覚えてるか？」

「ん……？ ああ、あのクソガキか。覚えてるが、いったいどうした？」

「いやさ、アイツが行方不明になった後に見つかったかどうか忘れちまってな」

「あゝ、どうだっけな」

ピタリと手を止めて数秒間沈黙した後ユウトは豪快に笑いだした。

「うるさいぞ……」

「いやあ、どうだったかすっかり忘れちまった！ ま、忘れたって事はそれほど重要じゃ

ないってことだ！ ガハハハハッ!!」

「単純だな」

「昔をくよくよ振り返るよりも先を見た方が良いんだよ!!」

豪快にそう断言するその姿は俺には眩しく見えた。

過去に縛られればかりを見ている俺にとってその生き方は素晴らしくも思えた。

そんな俺の雰囲気気が付いたのかユウトは少し声のトーンを落とす。

「すまん。お前には嫌な言葉だったな」

「いいさ。俺自身がダメだって事は十分理解してる」

「そう答えるとユウトは少し頭を掻くとポソリと呟く。

「鶴亀山かくきやまの寺の裏にある道をまっすぐ進んだ先に小さな滝があつてな。古い考え方もし

れないが滝行で心を無にしたらどうだ？」

「ふむ」

予想外の言葉だったが確かに一理ある。

滝行、というのはいささか極端かもしれないが心を無にするのはありかもしれない。

——いや、無にする事よりも煩惱を祓うのにも良いだろうか。

「それじゃあ帰りにでも寄ってみる」

「馬鹿か。着替えとか体を拭く物が無いといけないだろ。なんだ？ 風邪を引きたいっ

てかあ？」

「……仕事に支障でるから駄目だな」

「ハッ！ やっぱどこか抜けてる所も変わらねえなあ。……なあ、今年も行くのか？」

「行くよ」

「そっか。まあ、なんだ。いい加減自分を許してやれよ」

ユウトはそれだけを言うとかキョキン、と鋏を動かした。

そうして、それからは数言だけを交わし散髪は終わった。

「一五〇〇円ね」

「ん……」

料金を払うと俺はさっさと床屋を出る。

扉を開けた時に丁度吹いた風が当たり、少しだけ肌寒く感じる。

だが、それを気にせずに足を進めた。



『鶴亀山』はこの街の北東に位置する山で、街を真っ二つに分けている『鶴亀川』の源流

のある山でもある。

古くは街に襲い掛かる厄を塞いでいると言われていたらしいが今ではただ少し大きめの寺がポツンと建っているだけの面白みのない山であり観光客もそれほどいない。

そもそも首都圏から微妙に外れた位置にあるこの街の観光スポットなんて北西にある展望台付きの寺か西にある『月見展望台』だけだろう。

それ以外はよくある地方都市とそこまで変わらない。

「……………」

さて、俺はユウトに言われて滝に向かおうと山道に踏み入ったばかりなのだが、二〇メートルほど歩いて右折した所に人が倒れていたのだ。

短く纏められた黒い髪にぶかぶかの上着とジーンズの人物。

何か不穏な物を感じはするのだが放っておくのも良心が痛むので声をかける。

「あゝ、大丈夫ですか」

瞬間、その人物はピクリと肩を震わせる。

そして、ゆっくりと顔を上げてかすれた声で言った。

「喉、乾いた……」

13話 『滝②』

俺が持つて来ていた飲料水を渡すと倒れていた人物はそれを一気に飲み干す。

そうして、口を拭ってから俺の方へと視線を向ける。

少し丸く幼さの残る顔に水面のように青い瞳をしている少女だった。

「いやあ、ごめんねえ。ちよつと道に迷つちやつてさあ。はっはっは。普段はそこら辺の自販機でテキトーに買っておくんだけど今日は飲みたい物が全部売り切れでねえ……あれ？ 今日だっけ？ 昨日だっけ？」

少女は体についている砂埃を払いながらゆっくりと立ち上がる。

「私は『水守』。アンタは？」

「………月城」

「そうか、月城。君のおかげで助かったよ」

そう言つて少女は笑う。

倒れる程なのだろうか、と歩いて来た道を少し振り返つてから言う。

「ほんの数メートル歩けば寺あるけど」

「………あれ？ 戻つて来ちゃった？」

「戻って、か。．．．どこに向かう予定だったの？」

俺は水守にそう問いかける。

その問いに少しキョトンとした表情を浮かべてから答えた。

「山に住んでる変わり者の友達のところ。私って方向音痴だからすぐに道に迷っちゃうんだよねえ。いや、まいったまいった」

「友達に迎えに来てもらったら？ 連絡はつく？」

「ん、彼は連絡できるアイテム持ってないからねえ。やるとしたら狼煙だけだよ」

「現代にそんな古い連絡手段を使っている人がいる事に驚いたよ」

「まあ、そうだよね。私だってスマホ持っているのに。所で、月城はどこに行くつもりだったの？」

水守は俺の渡したペットボトルをポケットにしまう。

「．．．少し滝に当たりに」

「滝？ ．．．あ、あそこか。当たりに行く人間なんて何時振りだろうねえ。後に憑いて行っていいかな？」

「字が違う気がする．．．」

「合ってるよ。まあ、君には関係ないさ。そんな事より早く滝まで連れて行ってくれ。何度でも言うが私は方向音痴なんだ」

自信満々で胸を張りながら言う事では無い気がする。

ただ、そんな自分のマイナスの面だろうと誇れているというのもしかしたら強い証なのだろう。

くよくよせずに前へと進める心は、きつと素晴らしい物なのだろう。

「まあ、いいよ。その友達つてのは滝の近くにでも住んでいるの?」

「いいや。もつと奥地。でも滝あたりまで行けば基本会える」

水でも汲みに行っているのだろうか?

そんな疑問を覚えながらも俺は何かの縁と道を歩き始める。

——いや、待て。滝までは一本道のハズなのになぜ迷うのだろうか。

少し疑問を覚えるが聞くのもヤボだろう。

数分歩いていっていると、先の方から水音が聞こえて来た。

そして、道を曲がるとそこに小さな滝があった。

そこまで勢いもなく素人が当たったとしても（上から何かが落ちてこない限り）危険性はそこまでないだろう。

そんな事を思いながら滝を眺めていると、視界の端で何かが動くのが見えた。

視線を向けるとそこに黒い和服（袴）を着ている青年がいた。

「よう、水守。そっちの人間は?」

「ん、さつきそこで知り合つた学校教員の人。道案内してもらつてたんだあ」
水守がそう言うのと青年は俺の方に視線を向ける。

「まあ、なんだ。アンタのおかげでコイツを探す手間が省けた。礼を言う」
青年は軽く頭を下げる。

俺もそれに返すように頭を下げる。

「それじゃ、行くぞ。大森が待つてるぞ」

「ほいほい。それじゃあね、月城。また縁があれば」

「お、おう・・・」

ブンブンと大きく手を振る水守に俺は軽く手を振り返す。

そうして、二人は森の奥へと姿を消した。

不思議な雰囲気の人たちだった。

縁がない限りもう会う事は無いと思う。

「・・・まあ、良いか」

俺はさつきと自分の中で結論を出して近くの小屋に視線を向ける。

小さな小屋で、滝行をする際に着替えをしたりする為の物らしい。——小屋近くの

立て札にもそう書かれてるし。

俺は小屋に入ると水着に着替えて外に出る。

山という事もあつてか水は冷たかった。

もしかしたら夏に来た方が良かったかもしれない。

鳥肌の立つ感覚を全身に味わいながらも滝壺近くまで足を進める。

沢の深さは足首より少し上程で、人が溺れるには十分の深さと言えるだろう。

一般的に人は三〇c m程の深さの水場でも溺れると言われている。

何かあれば十分ここで死ぬる。

「……しつかりと注意を払うか」

どれだけ注意を払おうと何かあるかもしれないが……。

俺は少し身を屈めて水の中に手を入れる。

ちやぶつ、と手が濡れる冷たい感覚に少し気分が落ち込む。

水の中から幼い手が伸びてきてそのまま引きずり込まれる、そんなイメージが頭を

過った。

それが現実だったなら俺は一切の抵抗をせずに身を委ねていただろう。

「……いや、今はまだやるべき事があるか」

俺は立ち上がると、手を前に出して滝の勢いを肌で確かめる。

多少の刺激はあるが痛いという訳でなくむしろマツサージの際の刺激と同じくらい

だろうか。

それを確認してから、俺は全身を滝の中に入れる。

目を瞑り視界が塞がると水の音と体が打たれる感覚だけが今、俺の全てになる。そんな自然の中の流れを受けながら俺は頭の中を空っぽにした。

何も考えず、ただ視覚以外の感覚が受け取る刺激だけを受け入れ続ける。

どれくらい時間が経過したかはもう分からない。

ただ、体の先端からじわじわと熱が失われていく感覚だけが脳に伝わる。

流石にこれ以上続けると低体温症になりかねない為、ここで切り上げる事にした。

滝から体を出して空を見るといつの間にか日が傾いていた。

ここに来たのが確かお昼過ぎくらいだったのを思えば数時間は滝の中にいた事になるだろう。

そう考えたら急に寒くなってきた。プラシーボ効果というヤツだろうか。

俺は体を震わせながら小屋に戻り持つて来ていたタオルで全身を丁寧に拭くとすぐに着替えて外に出る。

そうしてすぐに帰路に入りながら少し森の方へと視線を向けた。

森は深く黒く暗い穴をポツカリと開けて不気味な雰囲気を出していた。



翌日。

俺はいつも通りの時間に起床していつも通りの時間に家を出た。

昨日の滝行が良かったのかは分からないが、頭がスーッと冴えている気がする。

いつも通りの運転のハズだが、いつも以上に周りに視線を向ける事ができている。

学校に到着して車から降りると丁度三宅先生も到着したところだった。

「おはようございます。大分さつぱりしましたねえ。もつさりした陰鬱な雰囲気からさわやかな雰囲気が変わっていますよ」

「流石に放置し過ぎていましたからね。あれ以上伸ばしつばなしにするのは流石にアレだったのだから」

「そうですね。そこら辺しつかりした方が良いと思いますよ。せつかく整った顔立ちなんですから♪」

三宅先生はそう言ってクスリと笑う。

俺は軽くため息を吐いてからその言葉に返す。

「お世辞でもそう言ってもらえるのは嬉しいですね」

「お世辞じゃないですよ。ここで言うのも何ですが月城先生の顔って私の好みなんですよ」

「この地味顔がですか？」

「変に飾ってなくて変に崩れている訳でもない普通の顔だから、です。アイドルとかイケメンの人たちって顔が整い過ぎてて見分けがつかないんですよ。あっ、TOKI
○は見分け付きますよ」

「最近じゃ農作業していることの多いあの人たちをアイドル判定して良いのか微妙なラインだと思えますけどね」

そんな会話をしている内に職員室に到着していた。

職員室では俺よりも先に到着していた教員たちが授業の準備をしていたり駄弁つていたりしている。

それを横目に自身の席に着くとバッグから今日の授業で使う予定のプリントを取り出して最終チェックをする。誤字脱字はないか見ている内に朝礼の時間が近付いて来たので、俺はプリントをバッグにしまつて職員室を後にした。

渡り廊下を通り階段を上り教室へ向けて足を進める。教室からはいつものように三人の話し声が聞こえており、声色から察するに元気であるようだ。

俺は扉に手を掛けてガラツと開く。

開く音に反応して三人はこちらに視線を向けて来た。

そして、

「あく、先生♡ おはよう〜」

桃知が席から立つとトテトテと近づいて来た。

そうして、流れるように抱き着いてくる。

ギョツと体を寄せて頬を赤らめて真っ直ぐこちらを見上げるその姿に俺はため息を吐いてしまった。

俺は手刀を作ると桃知の頭に軽くチョップをする。

「あぶっ」

「アホなことしてしないで席につけ。朝礼をやるぞ」

そう言つて桃知を剥がす。

思いの他力強かったが、体と体の間に手を差し込んでグイツと押し退ける。

「うう〜」

俺は教壇まで向かうとバッグからプリントを取り出す。

そして、いつも通り口を開く。

「それじゃ、朝礼を始める」



昼休み。

少女たちは教室で駄弁っていた。

特に会話の発端となった茜は机に突っ伏して項垂れる。

「全然ダメだったじゃん」

「うゝん、先週末までは確かに大丈夫だったんですけどねえ。休みの間に何かあったんでしようか？」

優歌は顎に手を当てて頭を捻る。

匠に媚薬を盛り快樂を刻み付けた事で難攻不落状態であった城壁の堀を埋めて攻めやすくした筈だったのに、ほんの僅かな時間で堀が再出現して再度難攻不落になってしまっていた。

かの有名な徳川家康でも埋めた堀が一瞬で再出現したら心が折れて呆けてしまうかもしれない。だが、優歌は違った。

今まで関わってきた（家族を除く）異性が少し誘惑するだけで簡単に盛った獣になっていた経験が次の行動を導き出す。

どうであれ脳は快樂を覚えているだろう。ならば、再度それを強く思い出させれば良いのだ。

「ふむ……」

優歌は思考を先へ先へと掘り進めていく。

背後から襲い掛かる作戦は二度目となれば警戒されている為通じないだろう。同様に睡眠薬も警戒されている。

誘惑はそもそも効かない為に選択肢に含まれないだけでなく確実にスルーされる。最悪は怒られて反省文提出になるだろう。

まず第一に注意で済むラインと確実に怒られるラインを見定めないといけない。

今までにも色々とは仕掛けてきているが確実に行動を起こして匠に対して何かしらの危害が加わった時は確定で反省文になっている。

つまり、誘惑で興奮させなければならぬだろう。

ある程度のラインが曖昧である以上、今は『触れたらアウト』と考えて行動をすべきだ。

優歌の思考は一つ一つ曖昧な点を除外して行き、今後の行動を導き出した。

「ふふっ、少し時間が掛かりますが少しずつ慣らしていくしかなさそうですね」
そう言いながらソツと傍観をしていた波奉の方に視線を向ける。

今まで気配を消していた波奉は感じた事のあるデジャブにタラリと冷や汗を流す。

そして、突つ伏していた茜に助けを求める視線を送るが、求めた救助先も優歌と同じような視線を向けて来ていた。

逃げ場がない状況に再度デジヤブを感じると同時に次自分がどうなるかを察した。

「ね、ねえ。茜ちゃん、優歌ちゃん……。また、やるの?」

「大丈夫ですよお、はっさん。次は私たちもやるので」

「優歌ちゃんは何を考えているかアタシは分からないけどとりあえず酸性」

「『賛成』ですよ茜さん」

もはや茜のソレは言い間違いとかそんなレベルではないし、それに的確なツツコミを入れられている優歌もおかしいのだが、その点に割り入って指摘する者はいなかった。

いや、そもそもとして教師とセックスしようとしたり、どう性的に襲うかを計画している時点でおかしいがそこに何もツツコミが無い以上は言い間違い(?)程度にとやかく言う事自体がヤボというモノだろう。

「とりあえず、昼休みは後一五分ほどありますし準備をしますか」

優歌がそう言ってポケットから取り出したスマートフォンを軽く操作すると、サングラスをかけたスーツの男たちが現れてどたとと行動を開始する。

「うわあ、お嬢様の力をふんだんに使ってるねえ。何度も見たことあるけどやっぱり慣れないなあ」

「ふふっ。使えるモノなら使い潰すまでですよ」

「あぶ……。うぶう……。(ガクガク)」

楽しそうに会話をする二人を余所に波奉はドタドタと現れた人波を前に気絶をし、軽く痙攣をしていた。

人見知りとかそんなレベルではない気がするが気にしてはいけない。

14話 『特別な日』

「ふむ・・・」

俺は目の前のPCの画面に映る予定表を眺める。

ここ最近、三人（主に桃知）がぐんぐんと成績を伸ばしており元々の予定以上に授業が進んでしまったのだ。

このまま行っても良いのだが、さすがに詰め込み過ぎた感じが強い。

今日の五・六時間目は通常通りに授業を行う予定であったが、少し特別日程にするのもいいだろう。

具体的に言えば宿題用に用意したプリントをやってもらった後は自由時間&本日の宿題は無し、である。

宿題は授業の復習や反復の為の物だが、少しぐらいこんな日があっても大きな影響は出ないだろう。

プリントを軽く纏めるとバッグへと入れると俺は職員室を後にする。

一階の渡り廊下を通った時にそこから見える駐車場に黒色の車が見えてそちらに視線を向ける。

車の周りには黒いサングラスにスーツ姿の男が複数人居り、何かしらの資材を積み込んでいた。

学校内で堂々と行動している為には不審者としてはあまりにも目立ちすぎているので関係者かもしれないが念のために近付いて声をかける。

「あの、すみません。何をしていますか？」

こちらに気付いたらしい男たちの中から指示を出していた人物が一步出て来た。

「お疲れ様です、月城さん」

「・・・？ 私の事を知っているんですか？」

「はい。お嬢様からお話を伺っています。変に生真面目な担任教師であると」

お嬢様。その言葉に俺の頭には早川の顔が浮かんで来た。

「はあ・・・。それで、なぜここに？」

「こちらにも守秘義務がありますので。・・・お嬢様から依頼があつただけ答えおきます。では、こちらにも仕事がありますので」

男はそう言うのと部下たちへの命令を再開した。

そうして荷物を全て仕舞い込むと全員が乗り込んでさっさと行ってしまった。

それを見送りながら俺は肩を落としてため息を吐いてしまう。

いったい何をやったのか考えるだけで頭が痛くなってくる。

俺は何をされても大丈夫なように警戒をしつつ教室へと向かう。

扉の前で軽く息を吸うとガララツと音を立てながら扉を開く。

まず目に飛び込んできたのはクラシックな雰囲気になった教室であった。

扉から左手側——ロッカーのある側がカウンターとして改造されており少し陰になつていて見辛いが豆の入っているであろう缶やコーヒーミル、小さなケトルを含め学校でそうそう見る事の無いだろう道具が他にも多くしつかりと整理された状態で置いてあつた。

それだけでなく廊下側には小部屋が作られており『従業員更衣室』と書かれた看板と簡易的な扉が設置されている。ただ、一番目についたのはそれではない。

現実逃避の為に改造されて専門店状態になつていた教室に意識を向けていたが、そろそろ目の前の事柄について意識を向けないと事態は進展しないだろう。

俺は軽く深呼吸をして視線を下に向ける。

「いらつしやいませご主人様あ♡」

ガラピシヤツと勢いよく扉を閉める。

頬を抓り夢ではない事を確認してから、目薬をさして目頭を軽くマッサージする。そうしてからもう一度何事もなかったように扉を開く。

「いらつしやいませご主人さ、

「何を企んでいるんだオマエら」

扉を開いてすぐそこに居たのはメイド服姿の桃知と早川だった。

早川は白いカチューシャと少しフリフリとしながらも厳かな雰囲気もしつかりと残しているミニスカート服で、こう言つてはアレだがマコトに（無理矢理）秋葉原へと連れていかれた時に見た覚えがある。

そして、桃知はというと白いカチューシャは共通なのだが白いフリフリのついた黒いマイクロビキニにガーターベルトという何とも寒そうな姿だった。それはメイドのもりなのだろうか？

「で、次はなにをやらかした？」

「ちよつとく、信頼ないなあ。社会体験だよお」

「.....?」

俺が首を傾げると早川がニンマリとした笑顔を浮かべて桃知の言葉の続きを言う。

どこか嫌な予感を覚えつつも早川の方がしつかりと説明はしてくれるのでその言葉を待つ。

「今回は喫茶店兼メイド喫茶の店員さんの練習です。こういった接客業を学ぶのは良い事でしょう?」

「まあ、社会勉強をしようとするその考え方はとても賞賛するが、いつの間に教室を改造

したんだ？」

「昼休みの間にちよちよいつと」

さも当然のようにそう言い放つ少女を前にため息を吐きそうになる。

別に早川のやり方に変に文句がある訳ではないし、彼女からすればこれが普通の事なのだろう。

だが、生まれも育ちも庶民の俺からすれば感覚のズレが大きく感じる。

「この衣装もすぐに作ってもらったんですよ。かわいいですか？」

「優歌ちゃんのは普通過ぎると思うけどねえ。アタシの方がカワイイと思うよ」

「ハア……。そう言うのは良いから」

「そうですねえ。……うくん、とりあえず席にご案内しますね」

笑顔でそう言う早川を前に再度ため息を吐くと俺はその案内に従う。

元々自習時間を予定していたのだ。宿題はそのままにして付き合っただけやるのも良いだろう。

それに一応少し前からレクレーションのようなものをしようと色々考えていたのだ。方向性はかなり違うが、それでも本人が楽しんでいてそれが息抜きになるなら特に止めさせる理由もない。

が、教室を改造するのは止めて欲しかったな。

「はい、ではこちらの席へどうぞ」

言われるがままカウンター席に座る。

カウンターの肌触りは駅前などにあるカフェの物と大きな差異はなく急造とは思えない程しつかりとしていた。また、鼻腔を吐く匂いはまさにそういった専門店を思わせる。

椅子も少し古さを感じられる色をしており、ここだけを切り取って見れば古くからある店にしか思われないう。

確認を終えると同時に早川がメニュー表を持ってきた。

「ご注文が決まれば呼んでくださいね」

それだけを言い残すとカウンター内へと引つ込んでしまった。動きだけを見れば本物のお店のようにしつかりしているように感じる。

俺は（安易に）安心してメニュー表を開き、油断しきっていた自分自身をぶん殴りたくなった。

メニュー表には普通の店では一切書かれていないような事が書かれまくっていたのだ。

【ゴム一つ 一五〇円】

「フェラ一分 一〇〇〇円」 「フェラ五分 三五〇〇円」 「Wフェラ五分 五〇〇〇円」

「手コキ一分 一三〇〇円」 「手コキ五分 四〇〇〇円」 「W手コキ五分 八〇〇〇円」

「足コキ一分 一五〇〇円」 「足コキ五分 四〇〇〇円」 「W足コキ五分 七五〇〇円」

「脇コキ一分 一五〇〇円」 「脇コキ五分 四〇〇〇円」 「脇コキ&フェラ五分 八五〇〇円」

「素股一分 一〇〇〇円」 「素股五分 三五〇〇円」 「素股サンド五分 八五〇〇円」

「乳首ズリ一分 一三〇〇円」 「乳首ズリ五分 四〇〇〇円」 「W乳首ズリ五分 九〇〇〇円」

「膣挿入（ゴム有り）一分 一五〇〇円」 「膣挿入（ゴム有り）五分 五〇〇〇円」

「膣挿入（生）一分 二五〇〇円」 「膣挿入（生）五分 一〇〇〇〇円」

「射精するまで膣コキ 私たちが満足するまで膣内で♡」

俺はメニュー表を力いっぱい破いた。

一二つに裂き、四つに裂き、原形を残すことなく破り捨てる。

「あー何してんの!？」

「ああ、せつかく作ってもらったのにこんな事に・・・」

「なんてモンを作らせてるんだ」

「彼らからすれば仕事ですから」

飄々とそう言い切る早川の態度に俺は今日何度目かの溜め息を吐く。

そうして脳裏に過るのは表情を崩さず淡々と手集作業をしていた彼らの姿だった。今更ながら一つぐらい劳いの言葉でもかければ良かったと思う。

「まあ、いいです。まだまだありますので」

「当然のように予備を取り出すんじゃない。ってか幾つあるんだよ」

「一〇個ほど」

それを聞いて頭を抱えてしまった。

いくら何でもそれは作り過ぎだろう。このメニュー表は今回しか使わない小道具でしかない——と思う。

だというのにこれだけ作ってしまうとはあまりにも無駄だろう。

「少しはその労力を他に回せないのか」

「え〜? 先生が私たちの欲求不満を解消してくればいいですよ」

「馬鹿なこと言っているんじゃない。生徒に手を出せるかよ」

俺はそう言いながら破いたメニユー表を近くのゴミ箱に押し込んだ。

ゴミ箱は黒板近くにありここにあるのはこのカフェテリアの為だけに設置された物の様である。

横目で確認すれば早川がカウンターの奥にメニユー表をしまっていた。

そこで先ほどから疑問に思っていたことを質問する。

「そういうえば、暗視は？」

「あ、はっさんですか？ フフツ、ちよつと待つてくださいいね」

早川がそう言つて『従業員更衣室』の中へと入つていき——中からドタバタと音が聞こえてくる。

心配になりソツと扉まで近づくとタイミングが良いのか悪いのか早川が暗視を引きずりながら出て来た。

そうして、俺は顔に手を当てると深くため息を吐く。

暗視も他二人と同様に白いカチューシャを付けているのは変わりないがそれ以外が多岐異なっていた。

黒いネコミミに猫の手と呼ばれる手袋、足も同系統の靴（または靴下か？）を履いており、もはやフリフリすらないただのスクール水着を着ていた。

カチューシャ以外にメイド要素がない。

「いったいどこからツツコミを入れればいいのか分からないようになってきたが取り合えずこれだけは言っておく。」

「暗視、拒否したか？」

「はひっ……、えっと……その……」

おどおどと言ひ淀む暗視の言葉を桃知が続けた。

「最初の方はノリノリだったよ。でも先生が来る前に冷静になって隠れちゃったけど」再度深くため息を吐いた。

「できればもう少しマトモな思考はできないのだろうか。」

「ああ……。もういいから、服を着てきなさい」

俺がそう言うのと暗視は小さく頷いてそそくさと更衣室内に入ってしまった。

それを見送り俺はどうしたものかと思索する。

教室が改造されたとはいえ前半分は形を保っており授業を行うには支障がないが、それでも教室としての雰囲気は崩れてしまっている。しかし、これを撤去するには相当直しが掛かるだろう。

顎に手を当てて思索していると、袖をグイグイと引つ張られた。

視線をそちらに向けると桃知が少し前かがみになり腰をフリフリとさせながら甘っ

たる語尾を付けて口を動かす。

「先生♡ 特別なサービス、しましょうか♡」

「……」

「あれえ？きよーみ無いのぉ？♡」

「その右手に持っているゲーム機器を見れば何となく理解できる」
「ウグウ」

大げさな動きをしながらやりたいことはゲームの様だ。

その姿を見て少し笑ってしまった。ここ一ヶ月ちよつとで桃知は学力が上がり少しだけ変わってきたように見えていたがどうやら違ったらしい。

こういった幼い面は微笑ましく思う反面どこか羨ましくも思う。ずっとに忘れてしまった童心を見ていると自然と笑みがこぼれるのだ。

「まあ、最近は頑張っていたからな。今回は特別だぞ」

俺はそう言ってバッグからゲーム機を取り出す。

桃知は目をキラキラとさせると俺の隣の席に座りニカツと笑顔を浮かべる。

「私は強いからね！」

「……そうか」

それだけ返すと俺はゲーム画面に視線を落とした。

15話 『前半は伏字が多めだけどこんな回があつても良いと思う』

俺は、机に突つ伏してピクピクと痙攣をしたかのような動きをしている桃知を見てどうしたものかと頭を悩ませる。

五連勝したところで桃知は今のような状態になつてしまった。

少しやり過ぎたかとも思うが、桃知本人から手加減なしだと言われたのでガチパで挑んだ——のだが……。

「おい、桃知。大丈夫か？」

「……………」

無言で返された。

流石に心配になり肩に触れようと手を伸ばした所で変化があつた。

「フフ。フヘ、フフフフフフフフフフ」

突如として不気味な笑い声をあげる。ついに壊れたかと心配したが、桃知はゆらりと不気味に顔を上げると何処か狂気じみた目をギラギラとさせながら言う。

「先生の事よわわトレーナーだと思つてたから本気出してなかつたけどここまでコケ

にされたら本気出すしかないよねえ」

「・・・そ、そうか。今日はもうここまですておいた方がいいんじゃないか？」

「えく？ もしかして勝てる自信ないのお？」

「さつきまでボコボコにされていただろお前」

「うぐう!!」

桃知は胸辺りを抑えて苦しそうなリアクションを取った。

強がつているが先度々連敗した事実はどうしても消す事は出来ない。

「と・に・か・く、次こそは絶対に勝つから!!」

「はいはい」

もはや意地だけで突っかかってきているその姿をどこか微笑ましく感じつつ俺はゲーム機の画面に視線を移す。

選択するメンバーは前衛に場を作るラ○ラージ・後衛にはラ○キーとナツ○レイを入れて対戦を始める。

桃知が先発で出したのがファ○アロー。レートで良く見るヤツだ。

コイツは特性の効果で、飛行タイプの技（主に高火力のブレイ○バードと回復技のはね○すめ）を先制で連発してくる。厄介だがラグ○ージを一撃で落とせるほどの火力はない。

その為、簡単にステル○ロックで場を作る事ができた。

「やっぱり先発って事はメガじゃないもんね。でも、ブレバのダメージは与えだし、とんぼ○えりでさっさと交代しちゃうもんねえ！」

「ナット○イに交代」

「あふう・・・(´p´)」

てつ○トゲとゴツゴツメ○トのコンボによりファイ○ローのHPがかなり削られた。

そうして場に現れたのはガ○ーラだった。これまたレートで見る面だ。

桃知としてはメ○進化してからグロ○パンチで攻撃力上昇を狙いたい所だろうが、触技を迂闊に使えばやられるのは桃知の方だ。つまりはここで選択する技は限られてくるだろう。つとつか一っしかない。

「メ○シンカ！ からのじ○ん!!」

だろうな。非接触技で採用率が高いのはそれしかない。それでも倒すには少なくとも3〜4発は必要になる。

ならば俺が使うのは耐久を高める技ぐらいだろう。

「やどりぎ○タネ」

「害悪型だあ!!」

そりやそうだろう。ナット○レイを攻撃型で運用する人を俺は見た事が無いし、しよう

とも思わない。

「だったらフア○アローに交代——あつ！」

いくら弱点を付けるからと咄嗟に選択したみたいだがあまりにも愚策だろう。

俺はの○いで攻撃力と耐久力を積んでついでに素早さを下げる。画面ではフアイ○ローがステ○スロツクで虫の息になっていた。

もはやこちらが手を下さなくても死にそうである。

「……こうなったら、オーバ○ヒートオ!!」

「ラグラ○ジに交代」

「＼(^ o ^)／」

もはや言葉ではなくなっていた。

基本的にフ○イアローは物理型なので特攻が下がる事のデメリットは少ないがこの現状では大きな痛手になる。

桃知ははねや○めでの回復ではなくブレ○ブバードで少しでもHPを削る事を選択した。ここで回復してもラ○ラーズの攻撃を耐えられないので正しい選択だ。

フ○イアローが自死したことはい○なだれが不発に終わった。

「いつけー！ ギル○ルド!!」

コイツはレートで良く見る上位陣を使わないとダメなのか？

選出されている三体が全員トップポケなのは本気なのかネタなのか評価に困る。

ただ、ラ○ラージも攻撃を受け続けた事で体力がかなり削られてしまっている。ここで終わりだろう。本来なら持ち物でオボン○みを持たせ型が基本だが、実はメガス○ーン持ちの個体である。

ス○ルスロックで場を作りつつあ○ごいで場を作りメガ○ンカしてた○のぼりを使う応用型で運用している。メガアタッカー型と比べて攻撃力はかなり落ちるが、それでもタイプ一致&雨補正である程度の火力は出る。器用貧乏になりやすい面もあるが、刺さる場面ではかなり強い。

今回は場を作るくらいしか活躍しなかったが……。

そうしてラグ○ージはせいな○つるぎで落ちた。

「ギルガ○ドなら、コイツで倒せる」

「……ラツ○ー？ え？ 先生、選択ミスした？」

俺の出したラ○キーを見て困惑の表情を浮かべる桃知。

ラツ○ーは、どく○く・ちいさ○なる・たま○うみ・ちきゆ○なげの四つの技で戦う事が基本なのだが、その全てがギルガ○ドに通用しない。まさに耐久型のトップであるラ○キーを狩る為のポケ○ンと言えるだろう。

あくまでも元来のラツ○ーならばの話だが。

「まあ、いいや。せい〇るつるぎー！」

「だい〇んじ」

「ふへ？」

ステルス〇ツクのダメージで多少なりとHPが削られていたギ〇ガルドはラッ〇ーの攻撃であつさりと落ちた。

ラ〇キーは意外にも技範囲が広くその面だけで言えば優秀な部類に入る。

俺の使用している型はち〇ゆうなげの代わりにだ〇もんじを採用している対ギルガ〇ド型なのだ。

あまり刺さる場面はないけど。

残ったメガガル〇ラはナット〇イを突破できずに終わり対戦は終わった。

「………どうする？ もう一度やるか？」

「先生はなんで害悪型ばかり使ってるのよお!!!」

「安定を取って」

「ふん!!」

「あべし」

俺の言葉に桃知は自身のカチューシャを掴んで投げて来た。

見事に顔面へ直撃した。それはそのまま床に落ちる。

「バーカ！ バーカ！ せんせゝの永劫童貞くくく!!」

桃知はそう言うのと教室を飛び出していった。水着メイド姿のままです。

「ちよ、おい！」

一瞬、ポカーンとしてしまったがすぐに慌ててその後を追いかける。

頭の片隅では少し大人げなかった事を少し反省した。



茜と匠が教室を飛び出して行くのを見送った優歌は投げ出されたゲーム機の通信を切断するとセーブをして電源を落とす。

そうして、カウンター席に腰掛けると少しクスリと笑う。

「茜さんはもう少しパーティー編成を見直した方が良いでしょうねえ」

そう呟いて少し視線を横に動かす。そこには着替えたはいいモノの茜と匠がゲームをしていた為に手持ち無沙汰になって一人でゲーム画面に視線を落としていた波奉がブスツとした表情で机に突っ伏してゲームを続けていた。

彼女は寂しい事が苦手だ。孤独が嫌いだ。——いや、彼女だけではない。優歌自身もそれを苦手としている。

だからこそ不服そうな顔をしている友人の気持ちを理解できる。

「はっさんく。お二人とも行つてしまいましたねえ」

「うん」

いつもと違う端的な返事。これは波奉が不機嫌であることの証明である。

少女は不機嫌になると途端にあがり症なところが引つ込み端的な言葉だけで会話をするようになる。所謂『私、不機嫌ですアピール』なのだが、普段の姿を知っている故にギャップが大きい。

優歌は少し息を吐くと波奉の隣に座る。

「茜さんに嫉妬ですか？ …はっさんが先生を気に入っている事は知っていますけど、先生は確実に私たちを平等にしか見ていませんよ。先ほどのだつて、はっさんが着替えていていなかった事と茜さんがお誘いをしたからそれを優先させただけですし」

「知ってる」

波奉はそう答えると机に顔埋める。

これも所謂『ほつといてよアピール』なのだが、優歌はその姿を見てクスリと笑うと、波奉の背後へと回り後ろから両手で少しふつくらとしている胸部を揉みしだく。

突然の事に波奉の体がビクリと反応し、それから軽く痙攣しだす。

「はっさんのおっぱいは私のと比べると小さいですけど、茜さんよりは大きいですから

ねえ。こうやって揉んで行けばもつと大きくなるんじゃないんですかねえ」

「ん．．．んく．．．．．っ！」

「あゝれえ？　（ここ）、少しピンと立って固くなってませんかねえ」

優歌は執拗に波奉の乳首をこねくる。

元々そこまで固くなつてはいなかった乳首は、そこを重点的に攻められた事により敏感になつており、少し触れられただけで声が漏れそうになる。

自身の服の袖を噛んで声を我慢しているモノの、時間経過と共に目は蕩けて口からは唾液を漏らし、局部は愛液でべつとりと濡れていた。

臍の下ら辺はキュンキュンと反応しており、一切触られていない事で焦らされ刺激はまだかと感度を高めて行っている。もちろん、優歌はそれを理解しながらあえて局部に触れることなく乳首を弄り続ける。

流石に我慢が出来なくなり自分の手で弄ろうとすると、優歌が右手で乳首を攻めながら左手でそれを止める。

「私が許可しない限り触っちゃダメですよ」

「で、でも．．．」

「あら？　さつきまで不機嫌だったのにそんなもの欲しそうな顔しちゃって．．．もう頭の中トロトロになっちゃいましたか？」

「うう……」

「くすっ」

必死になって我慢をしている姿を見て優歌はつい笑ってしまった。

波奉は良き友人であると同時にどこか玩具オモチャのように見えてしまう事がある。オドオドしている姿が所謂『いじめてオーラ』を出してしまっており、優歌の心をゾワゾワと刺激するのだ。

そのせいもあつてついついやり過ぎなくらい弄んでしまう。

「ほらほら、先生の好感度上げたいんですよ？ なら教室汚さないように我慢しないと」
「ふあっ……せん、せいっ……♡ んぐ、く……」

波奉は自分の服の胸元を手で掴むと口まで持つていきグツと銜える。

口車に乗せられているという事は十分理解しているが、それでもそれに乗ってしまふ。この状態で浮かんで来た乙女心がさらにこの状況にアクセントを加え、波奉の視界にバチバチと火花が散る。

「ん、んんっ……ツツ!!♡♡」

「あれ？ イツちやいました？」

優歌の言葉に波奉は答えられなかった。今のはあくまでも軽イキでありオーガズムまでは達していない。

た。特に床には愛液と尿の混ざった水たまりができていやらしい臭いを教室内へ充満させている。

もう色々と手遅れな状態になっているが、快楽に飲まれた波奉とドSスイッチが完全に入った優歌は後々の事は一切考えず、今得られる快楽に身を委ねている二人は周りの事に意識を向けて行為を続けるのだった。

16話 『クソウサギ×す by. 作者』

東校舎一階奥の教室まで走って行った桃知は扉を乱暴に閉める。

後を追うように開けようとしたがガツと何かにつつかえている様で開かない。

「ッ！ 桃知!!」

「うっさい!! 放っておいてよ!!」

放っておく、それが出来れば楽なだろう。でも、そんな事は出来ないし、していい理由も意味もない。

それに、教師になると決めた日に決意したんだ。生徒一人一人に向き合えるようになる。

だから「放っておいて」と言われたからと「はいはい」なんて従う気はさらさらでない。

俺は少し腰を落として扉の端を掴むとそのまま上へと持ち上げる。

ガゴツという少し低い音と共に扉が外れる。この校舎の様に古い設計の扉は持ち上げるだけで簡単に外れるのだ。

外した扉を横に退けて教室内を見ると、扉のすぐ近くで桃知が目をまん丸にして硬直していた。どうやら扉を外すとは思っていなかったようだ。

俺は腰を落として桃知と視線を合わせると優しい声色で静かに言う。

「なあ、桃知。今回の事は俺が大人げなかった、本当にごめん」

「うるっ、さいってば。うう・・・」

桃知の眼に涙が浮かぶ。俺はその頭に手をやり優しく撫でる。

小動物を撫でると同じような力加減で静かに手を動かすとさらさらとした感触が手を伝う。

「こればかりは完全に俺が悪かったよ」

「・・・あのパーティーは、ネットで調べて作った自慢のポケオンたちだったの。でも、先生には敵わなくて、ほぼ完全に対策されて・・・悔しくてっ」

桃知の眼からポロポロと大粒の涙が溢れ出す。確かに俺のパーティーはトップメタに仕上げている為に勝ち目は薄かったのは否めない。

悲しそうに無く桃知の顔を見て、俺は心が締め付けられるような気持になる。

俺はソツと桃知を抱きしめた。

「ごめんな。流石に強くやり過ぎた。俺に出来る謝罪ならいくらでもするよ」

瞬間、俺の股間に桃知の手が突っ込まれる。

頬を冷や汗が伝う感覚が今まで以上に感じられ、ゆっくりと視線を下へと向ける。

そこには先ほどまで泣いていた筈の桃知が笑顔で片手にボイスレコーダーを持って

いる姿があった。俺と目が合ったのが分かったのか桃知はボイスレコーダーの再生ス
イツチを押した。

『俺に出来る謝罪ならいくらでもするよ』

ほんの数秒前に自分の口から出た言葉が流れる。

桃知が何を考えているのかを本能的に悟りブワツと全身から汗が噴き出す。

その間も桃知のボイスレコーダーを持っていない方の手は俺の股間を弄っており、何
とか勃起しないように無理して精神を落ち着けているも咄嗟に行ったが為に不完全と
なってしまう、軽く固くなり出してしまっているのが分かった。

「も、桃知・・・?」

「せんせえ、なんでもしてくれるんだよねえ♡」

「いや待て、俺は何でもするといった記憶は一切無い」

「今言った」

「知っているか? それを世では誘導尋問と言うんだぞ。そしてそれは宜しくない行為
だ」

「ん、でもお言ったのは事実だもん♪」

ギユツと桃知は股間を触っていた手に力を籠める。

突然刺激が強くなったことに反応して完全に勃起してしまったソレを桃知の指で優

しく包み込みより刺激を強めていく。

「あく、こんなに硬くしちゃって♡ 口では色々言っていたけどこっちは正直だねえ」
「お・ま・えなあ……!」

引きはがそうと桃知の肩に手を置いた瞬間、スルリと抜けて抱き着いて来た。

桃知の匂いがより強くなり、耳元ではその息遣いがよりはつきりと感じられる。

「先生だつてこーぶんしてるんだしさあ。少しだけやっていこうよお」

「だから、俺は、生徒に手を出そうとは、思わんっ!」

「おち○ちん立たせて言うセリフじゃないよ、それ。ふふくん、いただきまあす」

桃知の下が俺の耳をレロリと舐める。それに合わせて手の動きもより激しくなる。

拘束されたあの日の様に脳へバチバチと快樂が押し寄せる。

「フフツ、やつぱり体はしよーじきだね♡ すっごい気持ちよさそー♡ ほら、しーこ
しーこ」

「んく……や、めろ……」

「えー……? やーだ。せんせーは私たちにずうっと我慢させてたんだから少しは要求
不憫解消してくれてもいいじゃん」

「……訂正、して……おく。『欲求不満』だ……」

こんな状況でも教師としての性なのか間違いを訂正してしまっている辺り、自分は職

業病なのかもしれない。

そしてこんな状況だというのに今後の漢字勉強のスケジュールを無意識的に頭の中で組んで行っている。だが、そこに思考を裂く前に目の前の状況に少しでも多く思考を裂かなければならない。

桃知と体が接している隙間に手を入れると引き？がすために、それでも突き飛ばさないうように押す。桃知も力を込めて抵抗してきているが、流石に大人と子供の筋力差のおかげか手加減しているとはいえそれでも徐々に離れていく。

「いい加減に、しろ……」

「む、う」

突然、パツと桃知が手を離れた事に驚き変に力が抜けてしまった。

そこを押し倒され、後頭部を廊下の床に軽く打ち付けてしまう。感覚的に桃知が馬乗りになってきているのが分かるが、頭を打ったためか視界が歪み上手く状況把握ができない。

それでも何とか上半身を起こそうとして違和感に気付く。

「おい、どうやって今の一瞬でズボンとパンツを脱がした？」

「頑張った」

「頑張るだけでそれができるとは思えないんだが……」

なんか言葉紡ぐが、まだ視界は不良である。

「ん〜、どうしよっかなあ?」

桃知はペロリと舌なめずりをする。

その表情は年齢に似合わない程厭らしく乱れており、少女がどれだけ興奮しているのかを直感で感じさせた。

「ここであつちやうと優歌ちゃんに何か言われちやうしなあ♡ ふふっ♡♡」

桃知は少し腰を浮かすと、とろとろに濡れた秘部を俺のソコに乗せる。

これの名前はマコトから聞いた覚えがある。確か『素股』と言った行為だった気がする。

『素股』。男性器を挿入するのではなく女性の股に挟んで摩擦する疑似的な性交、だったか。もうしばらく前の事だから大分忘れてる。

いや、こんな事を覚えていても生活の役に立たないから必要ないんだが。

桃知はゆっくりと腰を動かし始める。

「ハア・・・♡ んっ・・・♡ んあ♡♡」

擦れる度に桃知の口からは甘い声が出る。

無意識的かつ本能的に出ているであろうその声に少女の意思は関係なく、今日の前で腰を動かしているのは一匹の雌と表現した方が良いのかもしれない。

とろんと蕩けた目に口からはよだれが零れ肌を伝っている。

「はうっ……んんっ………ッ！」

桃知が体を軽く痙攣させながらただ喘ぐ。

そして、突然止まったかと思うとそのどこか呆けたようにも見える瞳でこちらを真っ直ぐ見て来た。

「も、もち………ッ!!」

ガバツと桃知が覆いかぶさって来た。それだけでなく唇を重ねて来たのだ。

いや、唇を重ねて来ただけでなく舌を絡めてきている。口内に広がる甘い味と絡まってくる舌の動きが俺の脳に刺激を伝えてくる。

「んちゅ……ん……ちゅぽっ………」

口と言う小さな空間では逃げ道なんてものは無く自然に俺と桃知の舌が絡み合う。

その間も桃知は腰を動かしており、抵抗できずされるがままになってしまっている。

どれほど長いキスだっただろうか。普段なら自身の心拍である程度予測できるがこの状況下では一切当てにならない為に時間が分からない。

桃知はゆっくりと唇を離し態勢を上げる。ツツと粘度のある唾液が橋の様につたっている。

「ハーツ♡ ハーツ♡」

肩で大きく息をしながらも腰の動きを止めない桃知。その息遣いから何となく桃知もそろそろ限界である事が伺えた。

俺がそれに気づくとほぼ同時に桃知の動きがより激しい物になる。

そして、

「イツ、イツツツ~~~~~~~~♡♡♡♡♡」

桃知は全身を激しく痙攣させて絶頂した。

間が良いのか悪いのかようやく体の調子も戻ってきた為、起き上がろうとして再度桃知に押し倒される。また頭を打った。

痛む場所を抑えながらそれでも起き上がろうとして、体の上にあつた重量感が無くなっていた。

その代わりに何か温かい物に俺のアレが包まれた感覚がした。——つい先日にも感じた事がある為にそれが何なのかはすぐに分かった。

視線を少し落とせば、俺の股間に顔を埋めてソレを啜えている桃知の姿が目映った。

「お・ま・え・なあ！ いい加減にしろ・・・！」

「ふあつへ、へんへひほこほはへふひほーばっはんばほふ」

「啜えながら言うな。ニュアンス的に分かるが多分理解できない層が一定数出てくるか

ら

「……………じゅぽ」

俺の言葉を無視して桃知は顔を動かし始めた。

喉奥が絶妙とも思える程狭まっており、深く唾えられるたびに亀頭が締め付けられ浅くなっても舌が別ベクトルでの刺激を与えてくる。

その度に背筋から脳にかけてゾクゾクとした感覚が伝わり、それを感じ取っているのかゾワゾワとした感覚に合わせるように動きが激しくなる。

そして、ナニカが爆発するような感覚と共に桃知の喉奥に激しく精液を射精してしまつた。

「んぐ……………んんんっつ……………ん……………ゴクツ……………ふはあ」

唾えた状態のまま喉を鳴らして、喉奥に射精たソレを桃知は全部飲み干した。

その顔は満足そうになりながらも蕩けており、これ以上の事を誘う様な雌の瞳でこちらを真っ直ぐ見据えて来ていた。

「せんせえ♡ もつと、ちようだい……………」

「っ……………駄目だ。俺は教師でお前は生徒。この一線だけは譲れない」

「え〜？ その生徒の口で気持ちよくなつてビュー♡ビュー♡って沢山射精しちやつたのにい？♡♡」

「その口で無理やりやってきたのはどこのどいつだ？」

「えっと、中央ヨーロッパに位置する連邦共和制国家？」

「国じゃない」

まさかそう返されるとは思わなかった。——待て、まだヨーロッパに関しての授業はしていないぞ。

授業だけが全てではないと理解しているが、普段から勉強できていないのになんぞそれを記憶しているんだ。

先ほどまでの感情は吹き飛び講師としての性が顔を出す。

人は興味のある事程真剣に向き合い記憶にとどめる傾向があるが、一体ヨーロッパのどこに桃知の惹かれた場所があるのかが分からない。そこさえわかれば今後の授業などにも生かせそうな気がするのだが………。

「それじゃ、私先に教室に戻ってるね〜♡」

俺の脳が学習に関して思考を巡らせている間に桃知はパンツとズボンを履いてさっさと去って行った。

その切り替えの早さに唾然としてしまい、十数秒もポカーンとしてしまった。

17話 『それぞれの休日』

休日。少女は自室のベッドからゆつくりと起き上がる。

少女の名前は暗視波奉。とある小学校に通うごく普通の小学生である。

眠気眼を擦り枕元に置いてある目覚まし時計を確認すると時計の針は丁度9時を指した所だった。普段ならもつと早く起きているが休日という事と昨夜は遅くまで起きていたのもあつてこんな時間になつてしまった。

「ふあ〜…んっ♡」

大きな欠伸をしてから波奉は体の違和感に反応する。

布団を捲り、パジャマのズボンも捲り中を見る。——そこにはパンツまで愛液でぐちやぐちやに濡れ、未だに疼きの止まらない自身の股間があつた。

波奉はそこをソツと指で触れると、少しずつ掻きまわすように動かし始める。

「あっ♡んふう♡はふっ…♡♡」

膣内に刺激を与えているのは指だけではない。指で届くよりもさらに奥にある微振動が刺激を与えてくる。

そう、少女の膣奥にはローターが入っている。何故かと問われれば、理由はいたって

単純。昨夜は遅くまでオナニーをしていてオーガズムに達し、その快樂に飲まれたまま寝落ちてしまったのだ。

波奉は右手で膣を刺激しながら枕元に左手を伸ばし、そこにあるリモコンを掴む。特徴的なピンク色のリモコンにあるボタンを押すと膣奥の刺激がより強くなる。お分かりいただけるだろうが、遠隔型のローターである。

「はあ……あつ♡ んん……ふつ……あふつ……♡♡ ふつ……あ、ツツ……♡♡」

ビクビクと下半身を中心に体が震え、悲しくもないのに目頭に涙が浮かぶ。それでもなお指の動きは止まらずただひたすらに膣内をかき回していく。

火照った体はより強い刺激と快樂を求め、それを受ける度に口から甘い声が漏れる。

「あん……ツ♡ イツ……イ、くう……♡ はあツ♡ あああツツ♡♡♡」
 そして、波奉がオーガズムに達すると同時に潮を吹きさらに膣奥にあつたローターが飛び出す。

快樂の余韻で体は痙攣しプシュツ♡プシュツ♡と細かく潮を吹いてしまう。

布団が完全に駄目になってしまっているがそれが気にならない程、意識は快樂の中へと沈んでいた。

そう、快樂の中である。どんな快樂だろうと永続的に続くことは無い。

物の数分で冷静（賢者モード）になった波奉はティッシュで拭ける所は拭いて掛け布団を持ち部屋を出る。

家は静まり返っており、両親が共にいない事を示していた。

両親は会社の重要ポジションに付いており、休日だろうと何かあればすぐに出勤してしまう。

「・・・・・・・・」

それが日常となつている為に波奉は無言のまま階段を降りると、洗濯機の中に放り込みボタンを押す。

洗濯が始まるのを確認してから自室へと戻り、勉強机の引き出しの中にある回転レバーを掴みベッドの横にある差込口に差し込むとグルグルと回す。それに応じてベッドの床板が中央から盛り上がり、マットレスが干される。

そこから動かないように固定してから窓を開けて風が入るようにする。

ざっくりとした後処理を終えてから次は風呂場に足を向ける。布団の処理が終わっても愛液で下半身とパジャマは汚れてしまっている。その処理もしなければならぬ。

服を脱ぎ、下着も脱ぎ何も身に纏わぬ姿になると、風呂桶に脱いだ服を入れて水を張る。

汚れと言っても愛液であり洗剤を使う必要はなく、そもそも手が荒れる恐れがあるの

で使いたくもない。水で洗い流すだけで充分である。

そうしてある程度洗い終わってからシャワーを浴びる。少し時間が経過したのもあつてか愛液が乾き肌に張り付いたような感覚を伝えて来ていたそれが段々と無くなつていく。

「ふう……」

全身をくまなく洗い流してからタオルで体を拭く。家の中には洗濯機の音だけが響き、もの悲しさを伝えて来ていた。

波奉は用意していた替えの下着と普段着に着替えると洗ったパジャマ等を持って自室へと戻る。自室には物干しスタンドが設置されており、そこへ丁寧にパジャマと下着掛けて干す。

もはや休日は毎朝このようになっていゝるのもあつてか慣れたものになつていゝる。

「ん〜。んふう……」

一通り終わらせてから体を伸ばして解す。

波奉は休日があまり好きではない。読書かゲーム以外にやる事が無いから。

友人と呼べる茜と優歌の二人は少し離れた場所に住んでおり、会うのにも時間が掛かる。特に、優歌に関しては川を跨いだ隣の市に住んでいゝるので子供の足では向かう事すら厳しい。

電車を使えば何とかなるが、子供のお小遣いでは電車賃でもかなりの出費になるので頻繁に向かう事は出来ない。

どうしたものかと頭を悩ませるが、何も思いつかずゆつくりと時間は流れていのだった。



桃知茜の朝は遅い。

朝と言うよりも、もはや昼を過ぎている。朝早くまで一晩中レート戦をしていた者の末路だ。

寝たのではない、気が付いたら意識が落ちていたのだ。世間一般でこれを気絶と呼ぶ。

かなり不健康な行為であり、担任教師が知ったら淡々と説教をしてくる事だろう。目が覚めて最初にするのはゲーム機の画面に目を向ける事でありそのまま流れるようにボタンを押して操作を開始する。

頭の中にあるのは睡眠前までの対戦の記録と結果であり、勝利の為にどのようなパーティーにするのかを再構築していく。

そこに使う脳容量を勉強の方に少しでも割けば担任教師は泣いて喜ぶ事だろう。

(ヒー○ランをパーティーから外すとしてその代わりにコ○タスカキュ○コンを入れてウチのリザ○ドンをメガ型運用じゃなくて非メガ型サンパワーするとして、ナット○イは確定、と。それとさらに読み合いをさせる為にあめふらしペリ○パーとオボン○実持ちラグラージを入れる事でメガラグ雨パを匂わせつつ、相手の水タイプを牽制できるようつげ○チョッキ持ちサ○ダーで一旦潜ってそこから対策を見て行こう。それ次第で雨パ匂わせを止めて……)

もう一度言おう、そこに使う脳容量を勉強の方に少しでも割けば担任教師は泣いて喜ぶ事だろう。マジで、確実に。

茜は頭の中で新しいパーティーを決めてボックス内を漁るが目当ての一匹が見当たらず少し困惑する。だが、寝起きから段々と覚醒して来た脳が先日の事を思い出させた。

先日、友人である波奉が雨パを作っていたのを見て使っていなかったペ○ツパー(6V)を上げてしまっていたのだ。その時はまだ雨パ(匂わせ)を再構築する事を一切考えていなかったのでどうしようかと考える。

あくまでも匂わせなので適当なペリッ○でも良さそうなのだが、万が一に選出することになると少しでも打点を出して欲しい。ナット○イが場を作り、ペ○ツパーが雨を

降らせ、サン〇ーが雷を落とす、そんな戦法を使う為にも厳選は必須となる。

ちなみにだが、このパーティーだと中途半端な対策のせいで火力に特化されたパーティーに全滅する可能性が高いのだが、完全に覚醒しきっていない脳はそれを思い起こさせなかった。

そして、厳選を開始しようとした所で腹の虫が音を出した。

「……………腹が減っても山吹できる……………だっけ？　まあ、何か食べて来よう」

ここに担任教師がいたならば一瞬の間もなく「そこは『腹が減っては戦はできぬ』だと訂正しただろう。というよりもどこから『山吹』出て来たのだろうか。

多分それは今後明かされることのない一生の謎になるだろうがどうでも良いので言及はしない。する気もない。

茜は部屋を出ると眠気眼を擦りながら階段を下りる。リビングに付くとそこには新聞紙を広げて読んでいる父親がいただけで母親の姿は見当たらない。

「おはよ……………お母さんは？」

「ん？　近所の奥さんたちと会食に行ったよ……………お腹空いたのか？　今持つて来るから少し待つてなさい」

父親はゆっくりと立ち上がると台所の方へと向かう。茜はそれを横目に椅子に座つてテレビを付けると撮り溜めていたアニメ（ポケモン）を再生する。

オープニングが終わった当たりで父親がレンチンした昨夜の余りを持ってきた。

「ありがと〜」

「.....」

父親は何も返さず新聞に向き直る。

これはいつも通りの光景だ。茜の両親は共に働いており家にいる事が極端に少ない。それを何年も続けていたせいで子供との接し方に慣れていないのだ。冷たいのではなく、愛情表現が不器用なだけなのである。

茜自身、その事を理解しているので特に何も言う事無く食事を終えると食器を水に付けて自室に戻った。

そして、ゲーム機を掴むとベッドにダイブする。低反発でありながら確かな柔らかさを持つマットレスが少女の体を迎えた。

その柔らかさに心地よさを覚えながら茜は枕元にある引き出しの中に手を突っ込むと中をこそこそと漁る。

バツと勢い良く取り出した物は愛用の電動デイルドだった。

茜はゲーム機を起動しながら慣れたように引き出しからローションを取り出して足も巧みに使いつつ片手でデイルド全体を濡らす。

そのまま自身の秘部に入れると電源をオンした。

「んっ……っ♡」

膣内全体をデイルドの振動が刺激し、背中にぞわぞわとした感覚が走る。

茜はパンツで抜けないように抑えるとゲーム機に視線を移してキャラを操作する。向かう先は育て屋であり、さらにはその眼前にある廃人ロードだ。

ポ○ケンを預け、廃人ロードを走り、卵を受け取り、また廃人ロードを走る。

卵から孵ったなら個体値を見て低ければ逃がす。この作業を右手だけでしながら左手でデイルドを動かす。

もはや手慣れたものなのか快楽で思考が鈍化する中でも的確にキャラを操作し、多くの卵を孵化しては逃がして行く。

ただ、流石に快感が全身を包んでいくとゲーム機から手を離して左手でデイルドを膣奥に突きながら右手で自身の乳首を摘まみ刺激していく。

「あっ……っ♡ んっ、くう……っ♡ んっ♡」

茜はシーツを食み、声を殺す。

一階には父親が居り大きな喘ぎ声を出せば家中に気まずい空気が流れる事になる。

特別支援学級に通っている為に親も事情はしつかりと理解しているがそれとこれとは話が別になる。

普段なら両親は仕事で家を空けている為に一切の躊躇も恥じらいもなく声を出して

いるが親がいるのなら流石に声を抑える。

グボグボと音を出しながらデイルドを動かし続け、快樂が高調になると同時に子宮を今まで以上に深く押し込む。

「ツ♡ ～～～～～ツツツ♡♡♡」

絶頂。脳内に電気が走り視界にパチパチと火花が浮かぶ。ここしばらく生で性行為をできていなかった為にその絶頂は深くそして長い。

それでも覚めるときは一瞬でスーッと頭が冴えていく。

今までならもつと快樂の中に入れただろうが最近はその時間が段々と短くなって行っている気がする。

「むく、やっぱりやってないのがげーにんなのかなあ」

ここに担任教師がいたならば一瞬の間もなく『原因』な」と訂正して（ry

茜は愛液で濡れた自身の秘部をティッシュで拭く。パンツもぐしよぐしよになってしまっている為洗濯は必須だろう。

頭が覚めたにもかかわらず膣奥はまだキュンキュンと刺激を求めており、それが茜の欲求不満を表しているようであった。



繁華街から少し外れた場所。

通称『裏繁華街』。——何の捻りの無い名称だがこう呼ばれているのだから仕方ない。

ここは所謂社会のはみ出し者が巣くつている場所であり、昼間は稀に一般人が通り抜ける事はあるモノの夜となれば闇に属する者が闊歩する危険地帯になる。

チンピラから反社会勢力、『深淵』と呼ばれる最奥に属する者すらもいる事がある。そんな場所を数人の部下を引き連れて一人の少女が歩いていた。

あまりにも不釣り合いなその姿は悪い意味で視線を集める。腹を空かせたライオンがいるサバンナの中心で体中に生肉を張り付けて武器を持たず歩いているような物だ。数人の部下はボディーガードの役割を持っているが、ここではあまりにも非力で戦力として数えるにはあまりにも心細い。

だが、そんな少女に襲い掛かろうとする者はいない。

チンピラはボディーガードの厳つさにビビっているだけだが、反社会勢力は少女に怯えている。

少女の名前は『早川優歌』。日本有数の『早川財閥』の令嬢である。

上手に使えば大金を簡単に得る事の出来る材料でしかない優歌はあまりにも無防備

に歩を進めているが、それでも手を出そうとする者は一向に現れない。

これは優歌に何かしら権限がある訳でも権利がある訳でもない。ただ、暗黙の了解の下で保護されているだけなのだ。

約二年前に起こった出来事により反社会勢力が『不干涉』でいる事を決めた一人の少年の関係者にしてそう浅くない関係のある少女は手を出しただけで普通以上のリスクが付きまとう爆弾でしかない。

それ故に傍観でいる事で身を守っているのだ。

そんな事情を知ってか知らずかは不明だが優歌は鼻歌交じりに目的地を目指す。

暗闇が支配する道を進むと、とある店に付いた。そこは大通りから外れた場所に入り口を構える少し変わったパチンコ店である。

より正確に言うなら一般人の立ち入りが極端に少ない『裏繁華街』に、だが。

入り口近くのベンチ兼喫煙所（壁無し吹きさらし）で煙草を知っている数名が物珍しそうに優歌の方へ視線を向けるが、ボディガードの圧に押されすぐに視線を逸らした。

パチンコ店前に到着してから優歌はその場から動かさずにじつと店を眺める。それから五分とせずにパチンコ店の扉が開き一人の男が出て来た。

よろよろの上着に自然に穴が開いたであろうジーンズ、金髪に染められた髪は手入れ

されておらずボサボサで不清潔さすら覚えさせた。煙草を口に咥えているその男は優歌に気が付きはしたが特に気にする様子はなくその通り抜けようとして、

「パツキンさん、ですよね？」

そう呼び止められた。

「……俺を『パツキン』呼びするのはアイツ含めて数人のハズなんだがなあ」

「恐らく貴方の言っている『アイツ』とは彼の事なのでしょうね」

「つて、よく見たら『早川財閥』のご令嬢サマかよ。……んで、何か用か？」

「ええ、貴方に折り入ってご相談があります」

「俺じゃなくて『ナナシ』や『暗闇の使者』を頼れよ」

「その方々は最終手段です」

「チツ、俺は捨て駒って所か」

自身に振り被るだろう事態を感じ取った金髪の男は面倒くさそうな態度を一切隠さうとしない。

それを見ながらも優歌は気にすることなく言葉をかける。

「表通りのお店へ行きましょう。あそこなら個室でお話ができます」

「拒否権は……ないんだろなア」

勝手に歩き始めた優歌の後に金髪の男はフラフラとついて行く。

そうして流れるように個室まで通されると、優歌のボディガードたちが部屋を出て行く。それをぼけーっと眺めながら金髪の男は言う。

「お供は外かよ」

「二人でお話したいので♪」

そう言つて笑顔を浮かべる優歌を見ながら金髪の男は深くため息を吐いた。

年相応の幼さを感じさせながらもどこか大人びた雰囲気をつつたその姿に一瞬、とある少年の姿が重なつた。

(なるほど、アイツの真似っ子か。駄目な見本を学んだようだな……)

金髪の男は分析しながら後頭部を搔く。

「で、用件は？」

「この人について調べて欲しいのです」

差し出された写真を受け取るとそこに映る人物をまじまじと眺める。

「コイツは？」

「私の担任教師です」

「は？ 先公の事かよ。んなモン適当な探偵でも雇つておけよ」

「雇いましたよ。でも、”ある一定まで”調べたところで全員が依頼金を返金して逃げてしまつたんですよ」

「なら、尚更『ナナシ』共の案件だろ」

「いいえ、貴方の案件だと私は思っています。．．．そうですね？」

その言葉にどんな意味が込められているのか何て分かるのは僅かな人間だろう。そして、その意味を理解したからこそ金髪の男は静かに立ち上がった。

「分かった。報酬は？」

「前金で五〇万。後は成功報酬です」

「上出来」

金髪の男はそう言うのと椅子から立ち上がった。

「あの、まだ先生について何も．．．」

「写真一枚あれば十分だ」

優歌の静止にそう返すとそれ以上何も言わずに個室を後にした。

その背を眺めながら優歌は運ばれてくる大量の料理をどう処理するのか頭を悩ませるのだった。

18話 『じわじわと外堀を埋めていきたい』

休日、俺はマコトに呼び出され駅前にある喫茶店へと向かっていた。

少し前に待ち合わせした場所なので特に店内について感想を述べる事は無い。

前回来た際に対応してくれて店員さんに同じようなセリフを言っただけで店の奥にあるテーブル席に座り鼻歌交じりに本を読んでいるマコトの下へと向かう。

マコトは読んでいる本に集中しているのか俺が正面の席に座るまでこちらに気付かなかったように慌てて本をしまう。

「すまない。最近私好みオレの小説を発見してね。ついつい読みふけてしまうんだ」

「そこら辺は相変わらずだな。それで？ そっちから連絡して来るなんて珍しいが・・・何かあったのか？」

「君について調べている者がいる」

マコトは前振りなくそれを伝えて来た。

下手に長い話をされるだけ怠いのでそれ自体はありがたいのだが言葉が足りない。

「俺について？」

「そう、今月に入って七人もだよ。こっちとしては追い払うのもボランティアだからあ

まりやりたくないんだけどねえ。でも、他の誰でもない君に関わる事だから」

「そうか、それはすまない」

「いいさいいさ。私オレと君との仲だ」

そう言つて笑うマコトの言葉に嘘はないのだろう。

俺の過去を知っている人物の中で、一番その事を気にかけて気を使つてくれているのはコイツなのだ。

普段から飄々とした態度でどこか掴みどころのないヤツだが、以外に義理堅く責任感も強い。——たまに信用し辛い時もあるが、それでも頼りにしている。

「しっかし、俺について調べるねえ。心当たりがないと言えない所が悲しい」

「君はなんやかんや言つて恨みを買つている所が多いからねえ。恨みじゃないにしても君の抱えている生徒たちは色々と規格外だ」

「.」

「二人は国内有数の大財閥の一人娘、一人は大手企業兼財閥の『三沢財閥』のエリート社員二人の娘、一人は一般家庭だけど両親は共に高い実績を持っている。それぞれが濃い」

「生徒たちの家庭に深く追及するつもりは無いんだけどな。家庭の事でトラ

ブルでもない限り」

「最後にそれを付け足す辺り君は大分職業病だと思うよ」

マコトはどこか呆れたように笑う。

ただ、俺自身その自覚がある故に特に言葉を返す事はしない。

「それで？ 伝えたいことはそれだけか？」

「まあこれだけと言えばそうなんだけどさ、君に質問もあるから呼んだのさ」

「質問？」

その言葉が少し引つかかった。マコトは気になれば自分で調べて勝手に裏取りをしていくタイプだ。

質問をする前にはもう答えを得ている為に質問なんてしない。そんな人間だ。

学生時代も教師が授業を行うときにはもう内容を全部把握して理解していたりとする事なす事確実に一手先に行っているような姿を知っている為、そこがどうにも不思議でならない。

「なあに、質問と言ってもあくまでも確認みたいなものさ」

マコトは少し間を開けてから言葉が続けた。

「今年も、墓参りには行くのかい？」

「ああ、行くさ」

「そうかそうか。なら今年は背後に気を付けるんだね。付けられているという事を前提に動くように」

「忠告感謝するよ」

俺はそれだけ言うと店を後にする。

特に注文することなく出て行く俺を店員さんがジトーつと見て来ていたが、すぐにマコトが注文を始めた為そつちに向かつて行った。



金髪の男はカフェから出て歩いて行く月城を見ると入れ違うように店内へと入る。

店内には楽しそうに注文をするマコトが居り、その姿を見て金髪の男は軽いため息を吐くと他の店員の言葉を無視してマコトの正面にドカツと座る。

「よオ、坊主。随分と変わったなあ」

「おっ！ 貴方ですか。大分久しぶりですね、最後に会ったのは何時でしたっけ？」

「テメエがそんな姿になる前じゃなかったか？ 大分昔だなこりゃ」

突然現れたガラの悪い男に店員はオドオドとなるがそれを見たマコトの「知り合いだから気にしないで」という言葉に少し落ち着きを取り戻す。

「ぎ、ぎゅっくり〜」

少し額に汗を浮かべながらウエイトレスは店の奥へと引っ込んでいく。
それを横目に金髪の男は静かに口を開く。

「あの男はお前の友人だろ？」

「……なるほど、貴方が次でしたか。私^{オレ}としては恩人に対して攻撃はしたくないのですが」

「なら、しなければいい。俺とお前、ぶつかつたらどつちが勝つかなんて分かりきっているだろ？」

「うん。私^{オレ}の圧勝だろうね」

「クツクツク。言うようになったじゃねえか」

金髪の男はそう言って笑うが、事実その通りである。

方や裏社会に身を置く情報者。

方や毎日パチンコに勤しむ社会不適合者。

ぶつかり合えば勝敗がどうなるのか、その後の後処理をどうするか
の行動を含めてマコトの方が圧倒的に上である。

その為、金髪の男の言葉はただのブラフである。

「幾ら貰いました？ それ以上に出しますのでこの件から手を引いてくれませんか？」

私^{オレ}としては彼の古傷を抉って欲しくないので」

マコトは優しい言葉でそう持ち掛ける。

もしも彼女^{かれ}の事を深く知っている者がこの光景を見れば顎の関節が外れるレベルで口を開いていただろう。

基本的に譲歩なんて事をしようという発想を持たず、自身の利益を優先させる姿勢を変えてまで隠そうとするソレに踏み込んで怒りを買いたい物好きはそうそういない。

それを理解しながら金髪の男は表情を崩さない。それどころか不敵な笑みを浮かべている。

「もう五〇万も受け取っちまってるよ。後は成功報酬だと。それならいくらでも金を引っ張って来れるんだ、これ以上に美味しい話があるか？」

「なら、これに好きな数字を書くといい」

懐から取り出されたのは一枚の小切手。金額は何も書かれておらずそのままではただの紙切れでしかない。

それを眺めてから金髪の男は呆れたように言う。

「俺は現金至上主義だ」

「なら後で現金で払おう。幾らが良い？」

「残念な事に金額の問題じゃない。俺のなけなしのプライドの問題だ」

「なら、——ここに一〇〇万円がある。そして、彼についての情報が纏めてあるファイルも。これで手を引いてくれないか？」

取り出された札束に金髪の男は眉を顰める。

力でねじ伏せる事は簡単だろう。それこそ追い返した後に事故に見せかけて殺す事だつて可能だろう。

「裏取りはするぞ」

「ここに書かれている事ならばしてきて構わない。だから、」

「書かれていない事に関しては追及するなつてか」

金髪の男はファイルを掴むとペラペラと中身を確認する。

「どうせ優歌……早川のお嬢ちゃんからの依頼でしょ？ ならこれで手を打たせてほしい」

「さつきも言ったが、裏取りはする。……まあ、金は受け取るんだ。ここに書かれていること以外は伝えねえよ」

それだけ言うのと金髪の男はファイルを持って立ち上がる。

ただ、マコトはその言葉に違和感と僅かな確信を覚えて慌てたように声を上げる。

「伝えないって、追及はする気っ!？」

「するさ。その上でファイル内にある情報の何を伝えるかを精査する。……つた

く、そんな顔をするな。テメエからも金は受け取ったんだ。最低限の約束は守るよ」
金髪の男はそれ以上言う事無く店を後にする。

ほぼチンピラ同然で過去の栄光なんて完全に失ったパチカスであるが、それでもプロの世界に身を置いていた人物である。金を受け取った以上契約を破る事はしない。

それを理解しながらもマコトは眉を顰めるしかない。

約一〇年前に世話になった人間のだが、それでも一〇〇パーセント信頼できるような人間でもないのが最低限疑いの目は持つ。

金髪の男自身もそれを感じ取りながらも信頼させようという気はない。と、言うよりもそもそも過去に多くの物を投げ捨てて逃げた自分が信頼を得れるとは思ってもいないというのが本音だが……。



さて、どうしたものか。

腕を組んで頭を悩ませるが案は一切浮かんで来ない。ただ、頭だけを動かしていても状況が好転しないのは分かっているのでまずは行動を試してみる。

「お〜い、大丈夫か？」

俺が声を掛けたのは公園のベンチにうつ伏せになって動かない少女だ。身長からして中高生くらいだろうか。

ただ寝ているだけなら特に何も思わず放置するが、日除けのないベンチに寝転んでピクリとも動かない姿を見ると流石に放っておけない。

今はまだ六月にも入ってはいないのだが、それでも日差しは暑い。

放置していたら熱中症になる恐れだつてあるのだ。

ただし触れない。

最近のご時世では挨拶をしただけでも通報された例があるのだ。下手に手を出す訳にもいかない。

何度か呼びかけていると突然ガバツと顔を上げた。

「ううう、フラれたあ〜」

「・・・」

「私なんて、私なんてえええええ〜〜〜」

職業病と言うか何と言うか、子どもが困っているのを放置できず相談に乗る事になった。

麻里まりと名乗ったピンク色の髪をした少女の話を聞いた事を整理すると、

一・好きな幼馴染とデートをした

二、何度もアピールしたけど全部スルーされた

三、そのまま解散になって落ち込んでいた

との事だ。

何と言えぱいいのか腕を組んで頭を悩ませてしまう。

恋愛系の出来事に関しての知識は極端に欠けているせいでどう言葉を書けばいいのかが分からないのだ。

「抱き着いたりさあ、上手にパンチラしたりさあ、関節キツツツツツスしたりさあ、」

「『キス』の間にそんなに『ツ』を入れる必要はない気がするよ」

「キツツツツツツツツツツツツツツツツツツ」

「増えてる増えてる増えてる」

「ううう、もう立つてられるかア！ もっと飲み物持つてこいやあ!!」

「今その手にあるのはコカ・コーラだ」

酒みたいに言われても困る。

やれやれと思いつながらにも相槌を打って麻里の口から流れる愚痴等を聞いていた。

そうして話初めて一時間ほど経過したところで麻里は飲んでいたコカ・コーラのペットボトル（これで一〇本目）を投げて見事ゴミ箱に入れた。

「んっ。よし、決めた。アイツの方から振り向くまで徹底的にやるよ。・・・話聞いてく

れてなんかスッキリした。ありがとう」

「気にしなくていいよ。職業柄放っておけなかったただけだから」

「ん？ どっかの相談員か何かなの？」

「教師」

「ほくん、全く見えなかった。．．．まあ、いいや。それじゃ、もう行くね」

麻里は大きく手を振って去っていく。

その姿をどこかで見た覚えがあり少しモヤッとした引っかけりがある。

つい最近にも見た記憶があるんだが．．．．。

そんな事を考えている内に麻里は行ってしまい、この疑問が解消されることは無かった。

19話 『一気に時間軸を飛ばすのもありかと思っただが、それだとじわじわと外堀を埋めていくところが描けないからどうしようかと悩んでいる件』

朝、俺は教室の扉を開けると同時に全てを悟り、一周回って冷静になる。

頭の中がクリアになる感覚は、そう、アレだ。過去に一度、マコトに無駄知識を叩き込まれてたせいでテスト勉強がでぎずに挑んだ期末テストの最終問題が分からずに大幅に点を落として赤点になりかけた時に近い気がする。

思い出ただけで少し腹が立つが今は置いておこう。

俺はカフエ（という名のメイド喫茶もどき）に改造されていた教室を再度グルリと見回す。

最近になってようやく改造された教室にも慣れて来たというのに、という気持ち湧き上がってくるがそれで現実が変わる訳でもない。

変に否定せず受け止めてどうしていくかを考えて行かなければいけないだろう。

深くため息を吐いた後に俺は呆れの感情を一切隠すことなく言葉に乗せて口から吐

き出す。

「何で教室にベッドがあつてお前らはナース服（ミニスカ）を着ているんだ・・・」

「え〜？ そんな事も分からないの？」

「分からないというよりも分かりたくない。場合によつては怒らないから昨日と今日の間に何があつたかを説明して欲しいんだが」

「改造してもらいました☆」

俺の問いに答えたのが早川なのはやはりと言うべきだろうか。

前回もそうだったのもあり完全に予想通りと言うか想定内と言うか・・・。

こういった行動力は何処から出てきているのか、そして考えたくないのがその金の出所がどこからなのだろうか。

もしも親御さんが出しているのなら流石に甘やかしすぎな気がする。

「はあ・・・。んで、なんで病院風にしたんだ？」

「決まっているじゃん☆」

桃知はスツと流れるように机に腰掛けてパンツを脱ぐと、そのまま秘部をこちらに見せつけて来た。

もはや俺に感じる事の出来る感情は『無』である。下手に反応してもそれに味を占めさせて助長させてしまうだけだ。

それを理解しつつも生徒の将来の為に教えて育てるのが仕事であるので、無になりつつもしっかりと脳は最適解を求めて思考する。

ただ、脳が最適解を出すよりも桃知が言葉を続ける方が早かった。

「ここにい、せんせーのおつきいソレで、びゅー♡ びゅー♡ って濃厚なお薬w

「今すぐに授業準備に入らないと今日の宿題の量を倍にするぞ」

咄嗟に出た言葉だったが、桃知は顔を真つ青にして机から転がるように降りるとドタバタとしながらランドセルの中から教科書とノートを取り出す。

パンツを履き忘れてるせいで大分恥ずかしい事になってしまっているが、本人がそれに気づいた様子はない。

その姿に軽いため息を吐きながら教壇に立つ。

そして、そこでようやく気が付いたのだが、桃知と早川はナース服を着ているのに対し、暗視だけはいつも通りの格好なのだ。

いつもなら二人に無理矢理着替えさせられたりしているのだが、本日は魔の手から逃れられたようだ。

それを確認しながら俺は朝に校長から聞かされた事を伝える。

「あゝ、来月に運動会があるが『特別支援学級M』は参加不可との事だ。これについて何か不満不変はあるか？」

「ないでゝす」

「茜さんと同じです」

「わ、私も・・・」

三人の言葉を聞いて俺は少し校長の様子を思い出す。

もはやバーコードですらなくなっている頭にもつきりとした髭を生やしたパツと見
は厳しい人なのだが、この三人に関する事になると縮こまって小動物状態になつてしま
う。

本日も小動物の様に小さくなりながら聞かされたのは昨年あつた悲劇。

子供の応援に来ていた家族の男性陣が突然いなくなり教職員が慌てて探した所、学校
の端にある倉庫で三人に絞り枯らされた姿で発見されたという。

学校側も保護者側も事を大きくしたくなかつた為に表沙汰にはならなかつたが、かな
り大きな問題となり特に家庭内での夫の地位が地の底まで落ちたとかなんとか。

そう言つた事もあり学校側としては不参加としておとなしくして欲しいのだ。

それに関して俺は同意するし、前科がある以上は警戒をしないとイケないのも確かだ
ろう。ただ、全面的に良しとする訳ではない。

運動会だけではないが、学校行事の思い出とはとても貴重で大切な物だ。人との関り
や競い合い、そして目標を目指して突き進むという行為は何にも代え難い尊い物にな

る。

それでも参加させたくないと渋る校長を相手に何も言わず『了解』を決め込むほど俺は教員としてのプライドがない訳ではない。

「まあ、運動会不参加と言つてもアレはアレで教育の一環——つまりは総合学習の一つである為それを風邪などの致し方ない理由を抜きに休ませてしまうのも学校と言うシステムとしては宜しくないという話になったので運動会の日は特別授業を行う事になった」

「拒否しますつつつ!!!」

「病欠を除いての拒否は不可とします」

「あく、いてててて。きゅ、急にお腹があゝ」

「運動会は来月だから今の内に体調管理とかをしておけな。あと、その言い訳は苦しいし今すべきではない」

お腹が痛いと言うならせめて運動会当日にしろ。いや、それを推し進める訳ではないが。

こう変な所へ回す知恵ややる気をもう少し学業に向けて欲しい——待て、これを思うのはこれで何度目だ？

桃知たちが何かをするたびに俺は『学業に〜』と考えている気がする。

「とりあえず、今は何をするか未定だから決定次第伝えるからな。——それじゃあ、一
時間目の授業を始めるぞ」



昼休み。俺は教室でパソコンを開き一時間目〜四時間目の授業で行った内容と、三人
の様子や理解具合を纏める。

こうやってデータとして纏めておくことで今後の動きをより明確にするのだ。

俺も昔、そうやって教わった経験から来た受け売りなのだが。

しばらく画面とにらめっこしていると、桃知が声を掛けて来た。

「ねえねえ、せんせーはさあ、なんでそんなに勉強に力を入れるの？ こんな小難しくつ
てさ、つまらないじゃん」

「その意見を突っぱねる事はしない。だけどさ、勉強って『知る面白さ』が分かるとどん
どんのめり込める物なんだぞ」

受け売りだ。

「ふ〜ん、よくわかんないや。これが面白いって感覚」

「だったら少し騙されたと思って少し頑張ってみよう。ひらめいた瞬間つてのは言葉に

出来ない程いいもんだぞ」

「……じゃあさ、頑張る代わりに勝負をしようよ」

「勝負？」

「嘘はつかないよ、その楽しさつてのを知れたならしつかりと勉強をしてあげる。ただし、ダメだったらアタシのいう事をなんでも聞いてもらおうからね！」

「前、テストで高得点とったらいうこと聞けつて自分で言った事を忘れたのか？」

「ありゃ？ そんな事、あつたっけ？」

「……」

つい反射的に頭を抱えてしまった。

これは、アレだ。宣言した後すぐに『あんな事』をしたのもあつてすっかり忘れてしまったのだろう。

欲望に忠実すぎるのも難点か……。

俺は右手で頭を抑えながら空いている左手で『桃知の行動倫理の欲望割合は高と思われる』と打ち込んでおく。

そんな俺を無視して桃知はどこか楽しそうに腕に抱き着いて来た。

「ふふ、せんせーはおとな何だから約束はしつかりと守つてね」

「前にも言ったが、俺に出来る範囲でぞ」

「じゃあ、せつく、

「性行為は却下とする」

「ぶーぶー、それはズルだ〜」

「明日の宿題の量を増やされたいか？」

「何でもないです」

このやり取りも何度目か分からなくなってきた。

ただ、ため息を吐いてしまう様なこんなやり取りを心のどこかで楽しんでしまっている自分がいる事に呆れてしまう。

俺は駄目な人間だな。君からの受け売りだけでここまで来て、君から受け取った言葉を支えにしている。

きつと君は俺を恨んではいないだろう、そんな気がする。ただ、恨んでくれた方が残される側からすれば楽なんだが。



目の前のプリントを眺めながら頭を悩ませる。

難しい問題ばかりで一問進むたびに止まっては悩み、一問進んでは止まって呻る。

勉強は苦手で、理解が困難で、どれだけ眺めても答えが浮かんで来ない。

どうすればいいのかと悩んでいると一人の少女が隣の席に座り、こちらの方をジッと見て来た。

そちらの方へと視線を向けると、いつものようにニコニコとした笑顔を浮かべている春香ちゃんの顔が視界に映る。

『また詰まってるの?』

『・・・うん』

『君は要領だけは良いのに分かるまでに時間が掛かるからね。・・・しよくがない、私が一肌脱いで進ぜよう』

彼女はそう言うとう自分のランドセルからノートを取り出して俺プリントを少し机の横に寄せてスペースを確保してからそこに白紙のページを開いてそこにプリントの内容をサラサラと書き写して行く。

そして、俺が分からなかった点をまるで全て分かっている様に分かりやすく説明をしてくれた。

それもあつてか先ほどまであんなに分からなかった問題を簡単に解く事ができた。

『でき、た』

『ふっふっ、良い顔してるね。どう? 「理解する」って感覚、気持ちいいでしょ?』

『うん、何かスツキリする。．．．でも、またこうやって詰まっちゃうのかな』

『君は少し考え過ぎな所があるんだけどそれでも大丈夫だよ。勉強って君が今感じている「知る面白さ」が分かるかどうかとどんだんのめり込める物なんだから。すぐにでも私が教わる立場になっちゃうだろうなあ。まあ、絶対そうはならないけど』

『?』

『私、先生になるんだ。色々な子ども達と出会って、色々な事を教えたいんだ』

そう言つて笑う春香ちゃんの顔はとても眩しく、輝いて見えた。

俺がその姿に見とれていると、春香ちゃんはその笑顔のまま言葉が続ける。

『匠くんはさ、将来何になりたいの?』

『うくん、まだ決まってるないな。もっと大人になったら決めて行こうと思うよ』

『そっか、お互いに夢を叶えられると良いね』

『うん。．．．俺はどうか分からないけど、春香ちゃんはきつととってもいい先生になれるよ』

そう返すと同時にガンツと頭に後方から衝撃が走る。

『痛い!!』

『ちよつとアンタア、私の妹をなあに口説いているのさあ』

『痛いっ! 痛い痛い痛いっ!! 髪がっ、ハゲちゃうっ!!!』

『ちよ、お姉ちゃん!? やめ、離して!! 匠くんの頭がツルツルになっちゃうっ!!』
『春香く。可愛い可愛い妹に悪うい虫が付かない様にしてあげるからね。オラ、ハゲ
て非モテ野郎になれゴルア』

『あがががががががががが』

俺の髪を掴み思いつきり引つ張るのは春香ちゃんの姉の『春実』ちゃんだ。

春実ちゃんはいつもこのように暴力を振るってくる。何と言ったか、そう、所謂シス
コンと言われる存在で春香ちゃんと会話をしている異性に対しては敵意を向けてくる。

ただし、直接攻撃を受けるのは俺だけである。

何か頭部からブチブチといった音が聞こえてきているが、それは気のせいと感じた
い。

20話 『見えない所で話が進んでることあるよね』

ガバツと飛び上がるように起きる。

時計の針はまだ午前三時を過ぎたばかりであり、いつも以上に早く目が覚めてしまった。

二度寝しようとも思ったが、下手に目が冴えてしまい眠れそうにない。

顔に手を当てて息を整える。

随分と懐かしい夢を見た。まだ俺が幼く勉強が苦手で毎日のように頭を抱えていた頃の記憶。

あの日常が今後もずっと続いて行くと、そう信じて疑わなかった。

視線を横に移すとそこにある小さな額縁に入っている写真が視界に映る。最も平和で、みんな笑顔で、そして——最後に笑い合えた瞬間を固定してそのまま留めているソレが。

「うっ……」

突然胃の中から込み上げてくる違和感に口を押えてトイレに駆け込むと、すぐさまソレを吐き出す。

一睡していた事もあつてか胃からはほとんど何も出て来ず、最初に昨晚の残りらしき物が出てからは胃液しか出て来ない。

ドロリとした唾液の気持ち悪さと口全体に広がる酸っぱさがより気分を最悪の物にしていく。

どれほどの間便器に向けて口を開き吐き出し続けただろうか。

吐き気が収まる頃には息も絶え絶えでグツタリとしてしまつていた。

「今日が、休みでよかつたな．．．」

そう、今日は土曜日。休日であり仕事はない。もしも平日だったらこんな不調で仕事をしなければならず、アイツらの押しに勝てる気はしない。

フラフラとトイレから出ると、台所の冷蔵庫から飲料水を取り出してからリビングのソファアに深く腰掛ける。

そうして、水を一口飲んでから息を整える。

「くっそ、悪夢だな」

あまりにも懐かしく美しく、忘れてはいけない事のハズなのに思い出したくない記憶。

俺は自室に戻り寝間着から普段着に着替えると玄関に向かう。家に籠っているよりも外に出て風に当たって気分を変えた方がいいだろう。

ドアノブに手をかけて外に出ると視線の端に何か大きい物が映った。

そちらに視線を落とすと壁に背を付けて寝息を立てている春実さんがいた。

「何をやっているんだか・・・」

そんな呆れの声がかから洩れてしまう。

放置するのも忍びなく、腰を落とすとその頬をペチペチと叩きながら呼びかける。

「お〜い、起きてください〜い。こんな所で寝てたら風邪ひきますよ〜」

「む、うにゃ・・・?」

「起きましたか?」

「な、なななななな何でアンタがここにっ!!」

「自宅の前で寝ておいてその反応はどうなんですか・・・」

「うっさい、どれだけチャイム押ししても出て来ないアンタが悪いんじゃない!!」

「せめて事前連絡ぐらいいしたらどうですか?」

勝手に来てこの言い草は酷いだろう。

少し呆れていると、春実さんは目頭をキッと上げて睨んできた。

「誰にも連絡先を教えてない癖に何言ってるのよ!」

「ユウトとマコト含む数名には伝えてあるぞ」

「あの二人に聴いても知らぬ存ぜぬと言われたんだけど」

「そりやあ口止めしてありますから」

「こ、このっ……」

握り拳を作りプルプルと震わせて怒りを全身で表現しているが、残念な事に俺が文句を言われる理由はない。

勝手に連絡先を教ええないように頼むのは当然だし、事前連絡なしに勝手に来られて対応できないのも仕方ない事だ。

そこについて怒られるのは理不尽と言うしかない。

「それで、何の用ですか？」

「別に、ただちよつとからかいに来ただけ……って、何スツと扉閉めてんのよ！」

「いや、それだったら関わる必要もないかなと」

「アンタ、ここしばらくの間は大分神経太くなつたんじゃない？」

「そうですか。誉め言葉として受け取っておきます」

俺はそれだけを言つて扉を完全閉めるとしつかりと鍵をかけてチェーンも付ける。

外ではまだ春実さんが騒いでいるが、特に意識を向ける事はそれ以上せず居間へと戻った。

ただ、戻つてもやる事がある訳ではない。視線をチラリと横に向ければ本棚に収められた参考書たちが視界に映る。

もう二年は買い替えていないソレを手に取りれば、何度も読んだせいか変な癖がついており大分ボロボロになってしまっている。

「そろそろ買い替えかな」

そう呟きながら参考書を本棚に戻すと、俺は30Sを掴み電源を入れると、ポ○モンを始める。

厳選作業をしていれば気分も紛れるだろうし、時間を潰すのにも持って来いだろう。



金髪の男はいつものように玉を打ち終わると稼いだ金を手に店を後にする。

その日はいつも以上に金を増やせたために上機嫌で家に向かって歩いてみると背後から足音が聞こえて来た。

何の気なしにくるりと音のする方へと視線を向けると、視界一杯に靴底が……、

「どっせいー！」

「あぶああああつっ!!」

金髪の男は飛び蹴りを喰らう寸前で避けると同時に飛んできた人物が転ばぬように掴んで何とか踏ん張る。

顔にかかる蒼い髪を、首を振るって掃ってから金髪の男は呆れたように言う。
「何やってんだよ、危ないな・・・」

抱き抱えたのはつい数日前に面倒くさい依頼をしてきた優歌であった。

呆れ顔を前面に出している金髪の男に対する優歌も感情を前面に出してそのふくれっ面を晒しながら言葉を返す。

「タバコ臭いです。不快です。身だしなみを整え臭いに気を使いなさい。殿方としての自覚はあるのですか？」

「殿方って・・・いつの時代だったの」

「ふふ、この前漫画で読みまして、言ってみたくなつたのです」

「くっだらねえ。それで、何の用だ？」

ため息混じりに問われた事柄に優歌はスカートが捲れパンツが露出する事をお構いなしに足を上げて金髪の男の顔を足蹴にするとグリグリと土を擦りつける。

「この私が、直々に、貴方に、依頼をしたというのに、なぜ、玉打ちなんて言う、くだらなく、非生産的で、無価値な事に、精を出しているんですかねえ」

「最近そう言った事する体力無くて性は出していないぞ」

「字が違います。なんですかあ？ 欲求不満なんですかあ？ それとも低能のお馬鹿さんなんですかあ？ どっちなんですかさっさと答えてくださいいなオラ答える答え

ねえならテメエにセクハラされたと訴えて証拠偽造してでも有罪喰らわせてやんぞ」

「口調崩れてる口調崩れてる。ってか、証拠の偽造は犯罪だ」

「お金つて素敵ですよねえ」

「さっすが上級国民。ガキだつてのに性根からイカれている」

「お褒め頂光栄です♡」

「ハハハハハ、お前大人になったら絶対大物になるな」

笑いながら優歌を降ろすと、金髪の男は腰を落として視線を合わせる。ただし、その顔には嫌そうな表情と靴の跡が浮かんでいるが。

それに対する優歌はふくれっ面をより酷くする。

「……? どうしたんだよ」

「貴方も、先生も、あの人も、なんでそうやって視線を合わせるんですかねえ」

「そりやあガキと話すならそうするだろ」

「……それで、情報は集まったんですか?」

「サツと話変えるなア……。今纏めてる所だからもう少し待つてろ」

「えい」

「痛エ!!!」

返事よりも前に飛んで来た蹴りが見事脛に当たり、金髪の男は脛を抑えて蹲る。

対する優歌は蹲った事で下がった頭を土足で踏みつけた。

「私が依頼してから何日経ちましたかね、ちゃんと数字を数えられますかあ？ あれから一〇日は経ちますよねえ？　なのになんで未だに玉打ちばかりしているんですかねえ？　馬鹿なの？　馬鹿なんですかあ？　ほおら、しっかりと答えてくださいよお？」

「ぐりぐりするなオイ。　たく、仮にもテメエは小学生だ伝える情報の精査ぐらいするだろうが」

「内臓でもぶちまけて鳥に突かれてる可哀想な人の写真でもあつたのですか？」

「あつてたまるか！」

「冗談ですよ」

「このころと笑う優歌に金髪の男は頭を踏みつけられながら呆れたようにため息を吐く。」

怖いもの知らずと言うか一周回ってどうでもよくなっているというか、目の前の少女から感じるものは『大人に対する恐怖心の無さ』であろうか。

金髪の男は二年前の事を思い出す。そして、丁度その頃にパチンコで記録に残るレベルの大負けをした事を思い出して先ほどとは比べ物にならない程深いため息を吐いた。

「……なに突然陰鬱な雰囲気纏っているんですか？」

「うっせえ」

金髪の男は首をブンツと振って優歌の足を掃う。

「おっとつと。危ないですねぇ」

「ここに居る事自体が危ねえんだよ。ほれ、どうせ近くに保護者……つか世話役がいるんだろ？ 連れて行ってやるからさっさと帰れ」

頭に付いた砂埃を片手でパツパツと払いながら立ち上がり、もう片方の手を優歌に差し出して——咄嗟に引つ込める。

一瞬、優歌の顔に浮かんだ暗い表情に金髪の男はギョツと手を握り締める。

「すまない」

「いいんですよ。私も、乗り越えなければならぬことですから」

優歌はそう言うと金髪の男の手を掴む。

金髪の男はふうつと軽く息を吐くとその手を引いて大通りの方へと向かう。

その間、無言の二人をジロジロと見てくる者たちがいたが、金髪の男が睨むとサツと目を逸らす。

ただのパチカスでしかない金髪の男だが、この裏の社会では絶妙に顔が利き、微妙に有名な人物である。下手に機嫌を損ねるよりも下手に触れず干渉せずにいるのが最善手になるのだ。

優歌がこの場で安心していられる理由の一端がそれだろう。

「……お前のことだ、俺の連絡先ぐらい知ってるだろ？ 直接接触せずにそつちに寄せ」

「その言葉は、玉打ち最中にスマートフォンを電源を切つていなければ少しは心に響いたんですがねえ」

「なんでそこまで知ってんだテメエ!!」

「自分よりずっと年下の小学生に怒鳴るなんて、お里が知れますよ?」

「あゝゝゝ! アイツ関連の人間に関わるとロクな事がねえなあ…クソツ」

金髪の男の言葉を聞いた優歌はその情けない様子をケラケラと笑う。

そんな様子を見て金髪の男は今まで一番深いため息をついた。

お互いに一つの星に魅入られ、その星の輝きを受け、そして今がある。似ているようで根本から違う二人はフラフラと路地を後にするのだった。

21話 『とある休日』

あの後、春実さんが居なくなつたのを確認してから俺は家を出て書店へと向かった。つといても居なくなつたのが確認できるまでに太陽が天高く昇ってしまったのだが…。

駐車場へと降りて車（一〇円傷アリ）に乗り込むと駅近くにある大きな書店へと向かう。

駅前の書店は大きなビルの二階から四階に店舗を構えており、こちら辺では一番大きく品揃えもいい。

ビル地下の駐車場に車を止めると、エレベーターを無視して階段に向かう。

俺は普段から高層階にでも行かない限りは基本的に階段を利用することで多少なりと運動をするようにしている。

まあ、運動と言っても階段の上り下りくらいしかできていないのが現状だが。

一階のスーパ―を横目に二階へと足を向けると踊り場に設置されている簡易的なベンチに誰かが座っていた。

そのベンチは書店で買い物をした本好きが家まで我慢できず買ってすぐに読むた

めに利用していることがあるので特に珍しい光景でもない。ベンチの隣には自販機があることもあってより人が留まりやすい状態になっている。なので、最初は読書好きが座っているのだと思っていたがどこか様子が違う。

まず第一に、踊り場に設置されている二つある電灯の一つが消えており、薄暗いせいで人影を上手く視認できていなかった。

第二に、そこに座っている人間の大半が読書を目的とした愛読家であり、今回もそうであるという前提で見えてしまっていた。

第三に、俺は基本的に『一般常識』の中で物事を考える凡人ということだ。

少し疑問に思いながらも別段意識を向ける事無く階段を上るとベンチに座っておる人物が本を読んでいないことによく気づいた。

そうなるのと疲れて休んでいるか体調が優れず動けなくなってしまうている可能性が浮上してくる。

浮上してくると次に顔を出すのは心配する気持ちであり、ベンチに座っている人物に目を向けると、

「何やってんだお前」

反射的にそう呟いていた。

俺の声を聞いた人物——桃知は鳩が豆鉄砲を食らったようなぼかん顔でこちらに

石船を向けた。

自身の陰部を弄りながら、だが。

俺が現れたことに思考が追い付いていないのか動かなくなった——いや、陰部を弄っている指以外が動かなくなった桃知を前に深くため息をついてしまう。

とうかこの状況は客観的に見たら完全に事案だ。第三者に見つかって通報でもされたら確実に逮捕される。言い訳なんて通じるはずのない状況になってしまっている。

どうしたものかと思考を巡らせていると一早く桃知が反応を示した。

「な、なな、なななななななで先生がここに!!!」

「………書店へ買い物にな。あと、こういつた不特定多数の人が訪れるような場所でそんなことをしているんじゃない」

「不特定多数の人が来るかもだから興奮するの」

「公然わいせつ罪」

「……? なにそれ?」

「よーし分かった。今度の社会の授業内容は『法律』についてやるかあ。小難しい言葉がずらずら並ぶけどしつかりと記憶してテストに備えるんだぞ」

「待って! 待ってえ! ごめ、ごめんなさい! ちよつとふざけただけだからあ!」

「飛びつこうとしてくるな。せめて愛液で濡れた手を何とかしてからにしない」

「これ拭いたら飛びついていいの？」

「いいというよりも諦めた」

俺の言葉に桃知は飛びつこうとするのを止めて愛液で濡れていない方の手をこちらに向けてきた。

「ん」

「・・・どうした？」

「付いて来て。何度が軽くイってるからちゃんと歩けるのか分からない」

「さっきまで飛びつこうとしていた人間のセリフじゃないな」

「それはそれ、これはこれ」

「ハア・・・」

随分と調子のいい奴だと思う。

こつちの事情とかをお構いなしに振り回そうとするその姿勢は、一周回って子供らしさが伺えて、それがどこか微笑ましく思えてしまっている自分は感覚がマヒしているの
だろう。

俺は桃知と手をつなぐと一階のトイレに向かう。

トイレは階段のすぐ近くにあるので、踊り場を降りるとすぐに到着する。

「ほら、早く手とかを洗ってきなさい」

「ぶくぶく、中まで付いて来てよ〜」

「事案になるからダメ」

「トイレでいいことしようよ〜」

「アウト」

「ちえ〜」

桃知は項垂れてブツブツと文句を言いながらトイレに姿を消した。

そうして一分少々で手をびちよびちよに濡らしたままの桃知が出てきた。

「・・・ハンカチは？」

「多分、家に忘れた」

「しよがないか・・・。俺のを使いなさい」

「ハンカチよりもパンツの方が・・・って無言で去ろうとしないでえ!!」

反省していないようなので無視して俺は書店へと向かった。



書店の本棚にずらりと並べられた参考書を眺める。

家にある複数の参考書の最新版も発売されており試しに中を開いて数ページほどペ

ラペラと見てみると、やはりと言うべきか一部の内容が変わっており授業内容の参考になりそうだと思う。

本来、教職員は決まったカリキュラムを教科書に沿うように調整しつつ教鞭を取るのが基本となる。だが、教科書のみだとカバーしきれない部分も多くあり、教科書の内容を踏襲しつつこういった参考書を基にした問題を作るのも必要になる場合がある。

教職員の中には教科書の中身だけで全てを完結できる人もいるが、俺はまだそこまですることはできない。——いや、正確に言うならば自信がないのだ。

幼少期は勉強が大の苦手によくテストで低い点を取っていた身としては、それから一〇年以上が経過して教員という職に就けていても心のどこかで心配が浮かんでくる。

俺が参考書に頼る傾向にあるのはやはりそういった所が関係しているのだろう。幾つか見繕っていると横から袖をグイグイと引っ張られた。

「無視するのは酷くない?」

「.....」

「ねえ、参考書なんて選んでる暇があるならイ・イ・コ・ト♡ しようよお」

「.....」

「ちよおお！ 無言でレジの方に行かないでよ!!」

無視無視。

公共の場で騒ぐ趣味はないし、こんな所で相手したら通報される危険すらあるんだ。流石にリスクが大きすぎる。万が一にも警察に來られたら言い訳が付かないし客観的に見れば俺が犯罪者でしかない。

残念なことに俺は警察官に囲まれて鉄格子の中に入る趣味はないのだ。幾つかの参考書を購入して書店から出る。

桃知はいつの間にかどこかに行ってしまったらしく気が付いたら目の届く範囲からはいなくなっていた。

周りから変な誤解を受ける可能性がなくなったことに安心する反面、何かやらかさないか心配で仕方がない。

教師としてはさつきしていた事を含めて心配ではあるのだが、流石に生徒のプライベートに深く干渉するのもあまりよろしくない。

俺は書店を後にすると地下駐車場に降りて車のカギを開くと、そのまま車に乗って、「うおう!!」

いつの間にか助手席に乗り込んでいた桃知の姿に驚きそんな声を上げてしまった。

「なんで勝手に乗り込んできてきているんだ」

「このままホテルへゴー!!」

「えっと、お前の住所は・・・」

「お父さんとお母さんに挨拶は速いんじゃないかなあ？」

「阿保か。送り届けるんだよ。ここで叩き下ろしてもいいが、さつきみたいに公然であることをし続ける可能性があるヤツが丁度乗り込んできたんだ。このまま保護者の下に送り届ける」

「今ここで大きな声出したら大変なのは先生じゃないの？」

「それは確かにそうだな。・・・それで、騒ぐのか？」

「・・・騒がない」

俺の問いに桃知は不貞腐れたように呟くと大人しくシートベルトをつけた。

それを確認してからキーを回して俺は車を発進させる。

「安全運転でお願いね」

「当たり前だ。危険運手を好んでする人間はいないぞ」

「だよね」

桃知はケラケラと楽しそうに笑う。

休日の昼近くという事もあってか道は混んでおり、思ったよりも進みが悪い。

信号を通つてから次の信号に付くまでに一〇分程掛つてしまっている。

「先生、お腹空いたあ」

「渋滞してるんだ。文句言わないでくれ」

「ぶーぶー。．．．．．そうだ、あそこにコンビニあるしそこに寄れない？」

「そうだな．．．．．その方がよさそうだ」

俺はそう答えるとウインカーを点灯させてコンビニの駐車場に入り、丁度空いていた入り口近くに止める。

車を降りて店内に入る。コンビニもかなり混んでいており、レジでは店員が複数人の客を相手に商品をレジスターに読み込ませている。

レジに並んでいる若者たちの会話内容から察するに彼らはこのコンビニのすぐ近くにある予備校や塾に通っている学生又は受験生のようなのだ。

通りで駐車場の車は少ないのに店内の客の量が多かった訳だ。

桃知は少し目を離れた隙においしい水とナポリタンを持っていた。

俺はウーロン茶とおにぎりを適当に三つ掴みレジに並んでいる行列の最後尾に立つ。

「えっと、今何円くらい持っていたっけなあ．．．」

「俺が出すよ」

「え？ うくん、流石にそれは悪い気がするよ」

「これくらいは気にしなくてもいいぞ」

「うん、何か貸しっぱつか作ってる気分だよ．．．」

「貸しって．．．。俺は担任だぞ？ 生徒の面倒を見るのは当然だし、」

「うううう。．．．よし、わかった。今度私の体を好きなようにめちやくも、「真面目に授業に取り組んで欲しいと俺は思うな」

人が大勢いる所での爆弾発言に俺は今まで以上に素早く言葉を被せて何とか最後まで言わせる事無く発言を潰す。

今の瞬間、俺の中に新たな目標が生まれたようだ。

『桃知が変なことを言う前に即座にそれを潰す』というある種、義務と言つてもいいだろう目標が。

今度、アナウンサーがどうやってあれだけ素早く正確に良い活舌でスラスラと言葉を出せているのか、その練習法などを調べておこう。そして練習しよう。

俺の返答に桃知はブツブツと文句を言っているが、こんな人が大勢いる場でもでもない発言をしようとしたコイツが悪い。

「ありがとうございます。またお越しくださいます」

会計を終えて桃知のナポリタンをレンジで温めて貰い、店員さんのそんな言葉を背にコンビニを出る。

車に戻り、俺たちはそれぞれ食事をする。

コンビニの商品は健康に悪いとよく言われる。確かに塩分多めだったりと長期的に見れば健康に悪いのは確かだが、手早く済むという利点が中々に良いのだ。

「ふうく、ごちそうさま」

「食べ終わったか。じゃあゴミはこの袋の中に……って、オイオイ。口の周りケチャツプだらけだぞ」

「むぐ……。んむむ……。ぶへ、ちよつと先生く、口拭くなら一声かけてよ」

「かけたつもりだったんだが……」

「ぶくぶく、先生の言葉足らず朴念仁鈍感童貞」

「酷い言われようだな……。ハア、ほら、さつさとシートベルト付けろ。いつまでも止まっている訳にはいかないからな」

「は〜い」

桃知は素直にシートベルトをつける。

それを確認してからエンジンキーを回し、駐車場から出て桃知の家に向かう。

渋滞はそこまで解消されていなかったがそれでも先ほどよりは良くなっているように感じる。

「〜♪」

隣で桃知がめちやくちや聞き覚えのある戦闘BGM（記憶が正しければ第四世代のヤツ）を楽しそうに口で奏でている。

なぜそれをチョイスしたのかよく分からないが変に聞くのも野暮だろう、と思い俺は

何も言わずに運転に意識を向けるのだった。

2 2 話 『ゲームばかりしていると小説書いてる時間って無くなるよね (b y. 作者)』

時間というものは本当に不思議だ。

気づけばすぐに流れ去り、それと同時に古い記憶は薄れゆく。それがどれだけ大切な思い出であろうと、忘れたくない事であろうと段々と消えて行ってしまう。

いつまでも覚えていることが難しいのは理解している。

古い思い出は新しい思い出が蓋となつて段々と隠されてしまう。一〇年という時間は俺の中から彼女との記憶を失わせていつてしまっている。

人間とは『声』から忘れていくと言われている。

いつからだろうか。もう彼女の声を思い出せなくなつてしまっていた。

それに気づいた時から心の中にはポツカリと穴の開いた感覚だけが重々しく残り、それが時間の流れをより強く感じさせてくる。

「ハア・・・」

口から洩れたため息は風に流されて溶けていく。

「人を見て真つ先にため息を吐くとは随分な扱いをしてくれるわねえ？」

「・・・・・・・・」

「何人の事をジーンと見てくるのよ」

またである。帰宅すると当たり前のように家の前に春実さんがいたのだ。

その服装は肩や太ももが大きく露出しているナイトドレスであり、はつきり言つて寒そうとしか思えない。いくら春が過ぎて夏が顔を見せだしているからと言つて流石に夜は肌寒い。

だというのに防寒性のない服を着て香水の匂いを漂わせているその姿に、昔からの知り合いとしては何処か情けなく感じてしまうのだ。

「ハア・・・・」

「だくかくらく！ 人を見てため息を吐くなつて言つてるでしょうが!! いくら何でも私の扱い悪すぎるわ!!」

「そうですか。では」

俺はそれだけを言うのと扉を開けて部屋に入る。

春実さんはぎやーぎやーと騒ぎながらカギをかけるよりも前に扉をこじ開けて無理やり入ってきた。

「不法侵入で通報しますよ」

「アンタが通報するよりも前にその頭に肘をぶち込んであげるわ」

「暴行未遂に脅迫も追加ですか。罪を重ねるのは止した方がいいですよ」

「減らず口なのはホントト変わらないわね」

「ブツブツと文句を言いながら当たり前のようになり込んでくる。」

最近では週に二〜三回も乗り込んでくるようになってしまった。もしもこれ以上頻度が増えたらいいよ引つ越しを検討しないと行けないだろう。

「それで、今日は一体何の用で？」

「んー？ 嫌がらせよ。い・や・が・ら・せ」

春実さんはそう言いながら勝手に冷蔵庫を開き中にあるスポーツドリンクを当たり前のように取り出す。

「なあんで酒がないのよ。何ならお茶かスポドリしか飲み物がない冷蔵庫って・・・」

「お酒は苦手なんですよ。知っているでしょう？」

「そうですね。・・・そういえばアンタの親も酒に弱かったわね」

「逆にあなたのご両親はお酒に強かったですね」

「・・・そうですね。強いせいで現実逃避にすらなっていないかったですみたいだけどね」

「そう、ですか・・・」

「何？ 気でも使ってるつもり？ ハア、くっつたらない。言っておくけど私はもう親と

は縁を切ってるし、あんな奴らに対して私は嫌悪感しか持っていないわ」

スポーツドリンクを飲みながらそう言い放つ春実さんに今度こそ俺は何も言えなくなつた。

春実さんが両親と縁を切つた件に関しては俺としても思う所がある。

それに、結局は春実さんの家庭の問題だ。外からどうこう言う義理も義務も責任も何もないのだ。

「・・・」

俺は（ソファアに座り、勝手にテレビをつけてバラエティー番組を見ている）春実さんに視線を集中させる。

昔の面影を残し成長した姿。思い出の中にある姿と重なる。・・・それは、双子である故に春香とも、重なるのだ。

もしも彼女が生きていたら、それを考えると気分が落ち込んでしまう。

きっと、春実さんもそうなのだろう。

いや、春実さんの方が俺なんかよりもずっとずっと苦しんでいるだろう。

双子であるが故に自分を見るだけで思い出してしまう。意識させられてしまう。

『もしも生きていたら』と。

姉妹であるが故に、同じ顔であるが故に、常にそれを意識してしまうのだ。例え、意識を逸らそうとしてもその考えが浮かんで来てしまうのだ。

「・・・お酒はありませんが、少し飲みますか」

「スポドリで『飲みますか』っていうのは初めて聞いたわね」

「初めて言いましたからね」

俺はそう言いながら冷蔵庫から適当なスポードリンクを取り出すとソファに座る。

「なんで隣に来るのよ」

「ここに座らなかつたら床に座るしかないのよ」

「床に座ればいいじゃないの。何も隣に来なくても・・・」

「そもそも、勝手に上がり込んできて冷蔵庫からスポードリンクを勝手に持ち出して、勝手に座ってテレビつけてくつろいでいるという自覚を持つてください」

「うぐ・・・」

春実さんはぼつが悪そうな顔をして、少し拗ねた様子でスポードリンクを口に運ぶ。

そうして俺たちはテレビを眺めながら無言でスポードリンクを飲む。画面では最近よく見かけるコメディアンがベテラン司会者相手にした行動でスタジオが凍り付いている光景が電波に乗って流されていた。



「もはや隠す気もなく堂々とやってるんだな。没収されたくなければ今すぐにやめなさい」

俺の言葉に桃知はむすつとした顔ではあるが案外素直に3〇Sを閉じて引き出しに入れた。いつもならブツブツ文句を言ったりよく分からない反論をしてくるところなのだが……。

少し疑問を覚えながらも俺は教壇に立ち朝礼を行う。

朝礼と言っても特に話す内容はなく、宿題をしつかりとやってきたか聞く程度だが。俺が一通りテンプレートな朝礼を終えて授業の準備に入る。三人もそれぞれ教科書を出したりノートを出したりと準備をしている。

そして桃知は3〇Sを取り出した、

「ふっー！」

「ぶふえー！」

バッグから亀のぬいぐるみを取り出して桃知にヒットさせる。

桃知対策（ケガをしないように最低限配慮）として人形（又はぬいぐるみ）投擲をし続けた結果、エイム力が格段に上がってしまった。

最近では声だけでどこに居るのかを瞬時に判断してノールックでぬいぐるみを当たられるようになった。完全に今後生かされることのない技能である。

俺が教科書とプリントを確認しながら桃知の方へと視線を向けると、何時もならそこから辺に放つて置いているハズのぬいぐるみ（無論、普段は俺が後で回収している）を掴んでムニムニと揉んでいた。

その行動を不思議に思っていると、桃知は上目遣いになりながら亀のぬいぐるみをキュツと胸元に抱きながら言う。

「亀のぬいぐるみを使うって事は、それだけ欲求不満なんですよ？」

「文脈が理解できない」

「だって、亀って事はおち、」

「ふっ！」

「あふんっ!!」

桃知が最後まで言う前にその顔面に兎のぬいぐるみを投げつけた。

そう言った事に思考を動かす暇があったら学業の方に少しでもそのリソースを割いて欲しいものだ。

「桃知、今週の宿題量を予定の倍にされたくなければそういった発言は控えるように」

「ぶーぶー！ 食券乱用だー！」

「職権な。それじゃあ食券システムを使っている学食や飲食店で食券で定められている範囲以上の事を要求したりする行為を指すぞ」

「じゃあ、証券乱交」

「じゃあつてなんだオイ。しかもどんな思考したらその状況が理解できなければ想像することも憚られるようなナニかが思いつくんだ」

似たような発音の言葉を適当に並べるんじゃない。

「ハア……。ところで桃知、ちゃんと宿題やってきたんだろうな？」

「特殊型ガル○ラ厳選しててやってません！」

「よし、その宿題は明日提出でいいから今日の宿題は倍にする事決定」

「それは許してよ〜」

「少しは学べ」

「人は歴史から学ばない所を学びました」

「そういう駄目な所は反面教師にして良い面だけを学ぶようにしなさい」

「だが、断r……。むぐう！」

「はいはい、茜さ〜ん。それ以上はいけませんよ〜」

早川が桃知の口を塞いで言葉を無理やり遮った。

むがむがと言いながら桃知は抵抗しているが、早川は涼しそうな顔でそれを抑え込ん

でいる。

二人に体格の差はそこまでない。むしろ、早川の方が華奢に見える。

それでも早川が抑える事が出来ているところを見るとはやり年齢の近い子供の筋力差はそこまでないだろう。

ドタバタとしている二人と違い、暗視は素直に授業の準備を終えて静かに座っている。

俺は少しため息を吐いてからじやれ合っている二人に向かって言う。

「ほら、暗視を見習って二人もさっさと準備して席に就け。マジで宿題増やすぞ」
その言葉に二人は慌てて離れて机、またはランドセルから教科書と筆箱を出した。



教員と言う職業は案外ブラックである。

仕事は多くせに給料はそれに見合わないだけでなく残業代は固定。つまりは長く残業しようが短く残業しようか残業代は変わらない。

一クラス約三〇人の宿題やテストの採点、連絡帳を書いたりプリントを作ったりと暇な時間という物は中々ない。

それ故に生徒たちが遊んでいる休み時間もデスクワークをしている事が多い。

「いや、すみませんね。手伝ってもらっちゃって」

「大丈夫ですよ、これくらいなら」

「あはは、一応私は先輩なのにな」

三宅先生は少し照れ臭そうにそう言いながらパソコンに向かってキーボードを打ち込んでいる。

俺はそれを横目に三宅先生のクラスの宿題の採点をする。

ついさつき漢字の書き取りの採点を終えた所であり、今は算数の採点をしている。

三宅先生が宿題に使っているのは『先生のお供。速攻！コピーするだけ宿題プリント小学生版』という学習ドリルをコピーしたものであり、当たり前だが答えも学習ドリルには付いているので量があるだけでやる事は単調作業である。

「ふ、やっぱり運動会が近付いてくるとやる事多いですよね」

「残念ながら校長から『絶対にあの三人を抑えておくように』と言われているので私は全く関わっていませんがね」

「あはは……。それは、まあ、しょうがないですよ。秋のスポーツレクリエーションの時に大変な事が起きましたからねえ……」

「校長から聞かされましたよ。なんでもレクリエーションに参加していた父兄を何人か体

育館倉庫に言葉巧みに連れ込んだとか」

「あの時は誤魔化すの大変でしたよ。．．．．．はあ」

三宅先生の声色やそういった噂を聞かなかった所から完全に内々で揉み消して無かった事にしたんだろう。

また、その様子から他にも幾つかやらかしているという事も伺える。

「私の前任者は大変でしたでしょうね」

「月城先生の前任者の方は手と太ももだけで枯らされてついには病院送りになってその後には夜逃げしちゃいましたからね」

「おっと想像以上ですよそれは」

夜逃げするっていったいどれだけ大変な目に合ったのだろうか．．．。残念ながら俺にできるのは冥福を祈る事しかできない。

心の中でそっと手を合わせながら採点の手を止める事無く赤ペンをプリントに走らせる。

時計の針はチクタクと動いており、休み時間はあと数分で終わってしまう。

俺は少し採点の速度を上げつつ午後の授業について思考を巡らせるのだった。

23話 『作者は猫大好きで猫アレルギー。でも定期的
に顔を埋めてはくしやみのし過ぎで死にかけている』

猫。

学名は『*Felis silvestris catus*』

ネコ目ネコ科の肉食動物であり、多くはイエネコとして人間に飼われている。

名前の由来は『寝る子』から来ているとされており、その由来通りよく日向などで寝ている姿が見られる。また、寒い地域に適した毛の長い猫も居れば完全に毛を持たない猫が居たりと種類の差が激しい。

人間とは長い歴史を共にしてきた生物であり、鼠害から農作物を守る為にヤマネコを飼い馴らした事から始まったと言われている、古代エジプト時代にはすでに人間と共存していたとすら言われている程である。なお、古代エジプトでは『バステト』と呼ばれる女神が猫をモチーフにしていたりするのでその説は正しいのだろう。

創作物ではモチーフとして多く使われることがあり、某国民的人気の未来のロボットのDから毎度ネズミにポコポコにされるギャグアニメのT、はては紫式部の『源氏物語』から夏目漱石の書籍に至るまで猫が使われる作品は星の数ほど存在している。

近年では擬人化してネコミミ少女というモノが一般化してきており、とりあえずキャラ付けとしてネコミミをつけられたような「これネコミミである必要あるか？」と疑問を覚えるキャラクターも一定数存在しているのが現状だ。

さて、なぜいきなり猫について語ったか、それは単純な現実逃避の一つである。

「にやお♡」

「にや♡」

「にや、にやうう・・・♡」

三宅先生の手伝いをして昼休みを終えた俺は急いで教室へ向かい、そしてその光景を前に頭の中にある限りの『猫』についての情報を引き出していったのだ。

何故か、理由はいたって単純。

メスガキども
三人が全裸でネコミミとシツポをつけて教室にいたからである。

正面から故に直感による推測でしかないが、シツポは恐らくアナルプラグだろう。と言うか何も身に纏っていない状態でシツポがしつかりと位置を維持しているところを見ればそうとしか思えない。

メイドとか其処ら辺ならまだ許容できた。ってかできるようになっていた。

しかし、これは完全に想定外のさらに外、もはや第二宇宙速度で想定していた事象が飛んで行ってしまったと言っても過言ではな・・・いや、流石にそれは過言だな。

少し視線を上げて教室に何か変化はないか、仕掛けはないかと軽く見回すが何に使うつもりか考えたくもないヨガマットが三組ほど敷かれている以外はいたって正常な教室内である。——うん、ヨガマットがある時点で異常なんだわ。

つと、流石に現実逃避のし過ぎか。俺はため息を吐いてから口を開く。

「暗視、嫌ならちゃんと嫌だと言った方がいいぞ」

「うにゅ……」

俺の言葉に暗視は顔を赤くしながらそつと秘部を手で隠した。

「先生、それだとまるで私たちがはっちゃんに無理やりやらせたみたいじゃないですか」

「そうですね。はっちゃんも口では抵抗してましたけど簡単に脱がす事ができましたもの」

「言わないでよお」

恥ずかしそうにわたわたと動く暗視、その動きのせいで大切な場所が隠せていない。

「まずは、服を着なさい」

「え、先生が私たちをたつぷり可愛がつてくれないとなあ」

「可愛がる、か。よし、それじゃあ学力向上のための特別な授業の準備でもするか」

「少なくともそれは可愛がるじゃない」

「俺なりの可愛がり方だ。異論は認めるがそれを受け入れるかは別だ」

そう言った瞬間、横から腕を掴まれてグイッと引き寄せられた。

「先生、茜さんばかりではなくて私にも構って下さいな。ほら、私のここ……先生に触って欲しくてウズウズしちゃっているんですよ」

「早川、少しは自重するという選択肢はないのかな？」

「二ヶ月近く我慢しているんですよ、私たち。そろそろ限界なんですよ♡」

「そうか。もつと我慢なさい」

そんな俺の言葉を無視して早川は手の甲に陰部を擦り付けてきた。ぷにつつとしたやわらかい感触とヌチャツ♡と粘度のある液体が付く感触——その愛液の量でどれだけ興奮をしているのかを何となく分かる。——分かるように、なってしまうている……。

……ま、まあ、だからと言ってなんだ、という話なのだが。

「離れなさい。何度も言っているが俺は教師であり、生徒に手を出すつもりはない」

「……そう、ですか……」

早川はそう言いながらそつと離れ、

「っ！ んむうっつ!!?」

流れるように飛びついて来てキスをしてきた。

早川は慣れたように俺の唾液と自身の唾液を行き来させ、混ぜ合わせる。

「ん〜♡ ちゅっ♡」

「むぐっ！ んむぐう・・・!!」

「ちゅぱっ♡ ……んふ♡ 生徒に手を出すつもりはない、と言った直後に生徒とキスしちゃいましたね♡」

「お、お前っ・・・!」

恍惚な表情を浮かべる早川を怒ろうとした所で、再度横から引き寄せられた。早川に意識を向けていたが故にそれに反応が遅れてしまった。

ただ、反応が遅れても俺の頭は反射的に桃知の姿を想像していた。何故か、と言われたら悪ノリして何かしでかすのは毎度桃知だからである。

そう、想像していたのだが・・・。

「ちゅっ♡ んっ・・・♡」

「っっ!!」

俺を引き寄せてキスをして来たのは暗視だった。

暗視は俺の口の中に舌を入れて来て、歯と歯茎を入念に舐めてきた。

数秒、頭の中が暗視の事で一杯になったが、直ぐに思考が俺の下半身の異常に気が付いた。

視界のほとんどを暗視の蕩けた顔が埋めているが、それでも最低限ある視界から情報を集めて異常の正体を判断する。

恐らく、桃知が俺の股間に顔を埋めている。

俺は暗視への対処を後回しにして桃知を引き剥がす事を優先させる。

暗視が抱き着くようにキスをしてきているせいで動きが制限されているが、俺は何とか桃知の肩に手をやると怪我をしないように注意しつつ引き剥がすために力を入れる。

もしも事情を知らない第三者がこの状況だけ見たら俺の事案かつシユールな姿に困惑するだろう。

桃知と俺との間に僅かな隙間ができたのを感じると同時に、俺は暗視を抱きかかえて姿勢を落とすことで股間を守る。

・・・傍から見れば全裸の小学生女兒に囲まれ、全裸の小学生女兒の一人に対して覆いかぶさるような形で抱きかかえる完全にアウトな姿になってしまっている。しかも、姿勢を落とす際に暗視の安全を守るために左手で背中を、右手でお尻を持つように支えた事で俺の手に暗視の愛液がべつとりと付く感触があった。

その感触を理解しながらも一旦思考の外に追いやる。

「ふえ？ え？ ええ??」

突然の事に何が起こったのか理解できていない暗視は目をパチクリさせながら困惑

の声を上げる。

「……暗視、手を放すから転ばないようにゆっくりと足を下ろしなさい」

「え？　は、はい……」

困惑しながらも暗視は素直に言う事を聞いてくれた。

暗視を下ろしてからとりあえずハンカチで口の周りを拭いた後に手に付いた愛液をふき取る。

そうして三人に視線を向けた。

「それで、なんでそんな恰好でこんな事をしたんだ？」

「えつとお……、先生に……こう……可愛がってもらう……ため、かな？」

「なんで疑問形なんだよ。さっきは断言していただろ」

「茜さんが『動物系で攻めれば先生だって文句言わずにたっぷり可愛がってくれるんじゃない』との名案を出されたので試しにやってみようかと」

「名案じゃない、迷案だ」

何となくそうじゃないかと思っていたがやはり桃知が発端か。

毎度の事ながら懲りずに色々してくるその根性は一周回って褒めたくすらなくなる。

俺が心の中で頭を抱えてため息を吐いていると、袖をクイクイと引っ張られた。視線

を落とすと、暗視がモジモジしながら上目遣いで質問をしてきた。

「先生、あの……その……私のネコミミ姿、可愛い？」

「……………」

Q. ネコミミをつけた全裸の小学生女兒（生徒）に「可愛い？」と質問された際の無難な返答を答えよ。

A. ある訳ないだろ。

俺はその答えをはじき出すと同時に素早く思考を巡らせる。

自分の経験と知識からなんと返答するのが正解なのかを必死に探るが、何一つ思いつかない。

そして、俺の頭が今思いつく限りの回答を導き出してそれを口に出すまでに約〇・五秒ほどの時間を有した。

「ああ、可愛いぞ。ちゃんと服を着て授業を潰すようなことをしなかったらもつと素直にそう言えていたんだがな」

「あう……、ご、ごめんなさい……」

「はい、ちゃんと謝る事が出来て偉いぞ。……二人も見習うように」

「あらあら、そういう方向でお説教をしてきましたか」

「説教のバリエーションも段々と少なくなってきたからな」

「へへ」

キツと二人を睨むが、飄々とした態度で返された。

暗視は案外素直に言うことを聞いてくれるのだが、桃知と早川は何度も似たような事を繰り返してその度に注意をしたり怒ったりしているのだが、毎度反省の色が一切見られない。

「あのな、ワザとかどうかは分からないが、現状授業時間が恐ろしい程削られているという事に気付け」

「知らなくい」

「知れ」

「知れなくい」

「知れ」

「まあまあ、先生。茜さんはこういう性格なんですから、そこを抑えるのではなく伸ばして行くのも教育ですよ」

「個性を伸ばすのも教育だが、それと同時に最低限の学習をさせるのも教育だ。つてか、当然のように桃知に責任を回そうとするな」

なんだろうか、この二人のペースに飲まれている感じがする。

俺は一度軽く咳をしてから再度三人に向き直るような形で言う。

「服を着なさい」

「ふふふ、先生ったら。今の私たちはかわいいかわいい子猫ちゃんですよ。猫に服を着させようというのはあくまでも人間のエゴ。どうしても着させたいのだとしたら先生が自らの手で着せるのが正しいのでは？ まあ、人間のエゴを押し付けられる身としてはしつかりと抵抗をさせていただきますがね」

「……………服はどこにある？」

「お洋服ならそれぞれのロッカーの中に……………つて、あら？」

キョトンとした顔を浮かべる早川を余所に俺は三人の服をロッカーから出してそれぞれの机の上に置く。

「暗視、おいで」

俺がそう呼ぶと暗視は素直に近づいて来てくれた。

視線を合わせる為に腰を下ろしてからその頭をそつと撫でる。

「着せるぞ」

「う、うにゆう……………あの……………お洋服着る前に、その、しないといけない事があるの……………」

「? どうかしたか？」

俺の言葉に暗視はモジモジとしながらすつとお尻をこちらに向けて手で肛門を見せ

つけるように開く。

「これ……取って欲しいの……」

視界に映り込むのは暗視の肛門にズツプリと飲み込まれたアナルプラグ——正確に言えばアナル尻尾であった。

……すつかり存在を忘れていた。

俺はスーツと大きく息を吸って酸素を取り込み精神を落ち着かせる。

そうしている間に暗視は机の上に乗って足を開いてこちらをジューッと見てきている。息を整える。

行動と発言には責任が伴う。例えばその気がなくても起きてしまったら責任は取らなければいけないし、それから逃れようと言い訳を並べ立てるのは愚の骨頂でしかない。それに、俺の目指した『理想の教師像』は自分の発言に責任を取らず適当に逃げようとする姿ではない。

覚悟を決めると、俺は少し腰を下ろして暗視のお尻を左手でそつと掴み親指で肛門をグツと広げるとシツポをの付け根を摘まみ、ゆっくりと引いていく。

「んっ……♡は、あっ……♡」

暗視の口から甘い声が漏れる。

それに合わせるように暗視の蜜壺から愛液がトロリと溢れる。

俺は痛くないように慎重にシツポを引く。

肛門がググツと段々広がり挿入されていた物はその姿を見せてくる。

そして、

「あつ♡ はふううう♡♡♡」

ぬぼつと挿入部が抜けると同時に暗視は軽くのけ反りびくびくツと痙攣する。

「大丈夫か？」

くつたりとしている暗視に問いかけるとトロンと蕩けた目でこちらを見ながら静かに頷いた。

それを確認してから机の上から落ちたら危ないのでお姫様抱っこをして都合よく敷かれているヨガマットに寝かせる。

そうしてから持っているシツポをどうしたものかと考えていると袖をクイクイと引つ張られ、そちらに視線を移すと自身の秘部をくちゆくちゆと弄っている桃知と早川の姿があった。

「せんせ♡ はっちゃんだけずるいよ♡ 私たちのこれも抜いて♡」

「そうですよ♡ 焦らされ続けてもう私たち我慢できないんですからね♡ はっさんと同じように私たちのココをじっくり観察しながら抜いてくださいな♡♡」

恍惚とした表情でそうすり寄ってくる二人の後ろに、さつきまでくつたりとしていた

暗視がそつと近づいていた。

俺がそれに気が付きそれを二人に伝えようとするよりも早く暗視が二人の尻尾を掴んで一気に引つ張った。

「んほおおおおおおおつっつっつ♡♡♡♡♡」

「ひひひひひひひひひひんっつっつ♡♡♡♡♡」

二人（特に桃知）が子供が出してはいけない声を発してその場にへたり込む。その瞳は光を移さずどこか遠くをぼーつと眺めている。

恐らくだが、興奮が高まっていた所に一切想定していない所からいきなり快楽をぶつけられて脳が処理しきれいていないのだろう。

小刻みに痙攣しながら涎やら愛液やらで床を濡らしている二人の後ろで暗視が静かに呟く。

「いつもの、仕返、し・・・きゆう」

そして暗視も動かなくなった。

そこにあつたのはアナルシツポを持つ成人男性と全裸で体液を漏らしながらぐつたりしている全裸の小学生女兒のいる教室、という事案まっしぐらな光景であつた。

目の前の惨劇に対して、流石にどう対処すればいいのかすぐには分からず、数舜だけ固まってしまったが、とりあえず持つていたシツポを机に置いて三人の体を拭くタオル

と床を掃除するための雑巾を取りに仮眠室の隣にある用具室へと慌てて走った。

24話 『嫌いだ。』

肌をヒリヒリと照らし焼くほど暑い日差しだった。

夏休みかつ休日でも大人の仕事も休みだった事、そして日差しが強く家の冷房だけじゃ暑さを凌ぐ事が厳しかった事、そして、私たちが遊びに出かけたいと駄々をこねた事。これらの事が重なって私たちは川へと遊びに来ていた。

河原には私たちのように暑さにやられて冷たい流水で体を涼ませる為に訪れた人々で賑わっており、その中にはこの暑い中でバーベキューをしている猛者すらいる。

そんな人たちを余所に私はとてつもなく可愛い——ほんと食べちゃいたいぐらい可愛いというかもう襲いたい天使そのものを通り越して女神級の可愛さを持つ心の底から大好きな——妹である春香の手を引いて一緒に川へ向かう。何故か月城匠ゴキムシが付いて来ているが春香から遊びに誘った以上、それを無下にするのは春香の気持ちを軽視するのと同義なので、仕方なく付いてきて一緒に遊ぶのを許してやっていく。

本来なら感謝して平伏するのが礼儀だと思うけど、春香がそれを望んでいないようなので私の口からそれを強要させるようなことを言うつもりはない。感謝しろよカス。

「春香限まで引き立てる為に選んでいるんだからハズレなんてある訳が無い。

春香の嬉しそうな言葉に心を高鳴らせていると、月城匠ジャマムシが図々しくも私の春香に話しかけた。

「あのさ、春香ちゃんって確か泳げなかったよね？ 大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。ほら、お姉ちゃんが選んでくれた浮き輪があるからさ」

「ね」

「ね、ね」

ねこ、の一言で私の選んだ浮き輪を表現されたことに少しイラつとした。

春香が体を通してしている浮き輪には猫の顔がプリントされてネコミミが付いているネコ派の春香の好みを考えて選んだ物だ。白猫・黒猫・三毛猫の三種類があつたが、家で飼っているミーコと同じ三毛猫柄の浮き輪を選んだ。

そんな私の想いを雑に扱うなんて極刑も良いところだが、春香が楽しそうにしている所を見ているとそんな怒りはすぐに収まった。

私は一度コホン、と咳をしてから春香の手を掴む。

「ほら、いつまでもこんな所で話してないで早く泳ぎに行きましょう」

「う、うん。匠くんも行くこう」

「そうしよつか」

川までの数メートルを歩いていた所で、私はフとある事に気が付いた。

「あつ！　しまった、飲み物を持ってくるのを忘れてた。すぐに取ってくるわ」
「それくらい大丈夫じゃない？」

「春香ちゃん、水分補給は大切だよ」

月城匠チリカスが春香にそう声をかけた。

私が言いたかった事を勝手に言つたのには腹が立つたが、早い者勝ちだと無理矢理自分を納得させた。

「そういう事。すぐに取ってくるから先に泳いで遊んでなさい」

軽く手を振ってから両親のいる所へと走った。

両親は月城匠ダニムシの両親と談笑をしており、父さんに関しては何本目かの缶ビールを開けている所だった。

それを横目にバケツの中に入った氷水で冷やされているペットボトルの中から春香が好きなジュースを選んでいると、川の方から大人の叫び声が聞こえてきた。

子供が流されたぞ、という声が。

その声を、言葉を、頭が理解すると同時に私は「春香!!」と叫び川へ向かって駆け出した。

春香と別れた場所を横目に捉える。そこに、二人の姿はない。

下流の方に視線を向ければそこに大人たちが複数人も集まっていた。大人たちの声

がここからでも聞こえる。

「子供が流れ着いたぞー!」意識がない! 誰か救急車を呼んで!」「水を飲み込んでいるかもしれないから背中を叩いて水を吐き出させて!」

大人たちが流れ着いたらしい子供の救護をしている所だった。

私は大人を押しつけて流れ着いた子供の姿を確認して、そして・・・、

「・・・は?」

そこにいたのは、真つ白な顔で意識を失っている月城匠ロクデナシの姿だった。

ギギギギ、つと油が少ないロボットのよう^にに首を動かして周りを確認するが、春香の姿はどこにもない。いや、正確に言うならばここよりさらに下流の方にある岩に見覚えのある浮き輪が引っかかっている事だけは確認できていた。

——逆^にに言えば、それ以外に春香の存在を確認できそうなものはどこにもないのだ。

コヒユツ、と喉が嫌な音を鳴らす。息が詰まるように苦しいのに、呼吸だけは浅く早く酸素を取り込んでいる。

なんで? どうして? 春香は? なんで川に流されたの? どうして月城匠コイツだけが流れ着いたの? 原因は? 私が飲み物を取りに戻らなければ・・・? 一緒に居てあげたら? 離れなければ・・・。

だ。

つまりはこの時間帯に起きるのが当然というか普通なので別に寝坊とか寝過ぎしたとかそんな訳じゃない。

ズキズキと痛む頭に苛立ちを覚えながら、先ほど見ていた夢を思い出して嫌な気分になる。

私は悪夢が嫌いだ。私が見る悪夢はいつも春香を失ったあの日ばかりだ。

「はあ……」

のっそりとベッドから降りると風呂場へと向かう。

寝巻を脱いでタオルを濡らすと、汗でべたべたになった体を拭く。

私は風呂が——正確に言うならば水が嫌いだ。春香を連れ去っていった水が。あの日以来、私は濡らしたタオルで体を拭くだけで入浴をした事はない。

一応、体臭には気を付けている。それだけは断言しておく。

汗を拭き終わり、タオルを洗濯機に放り込んでからフと視線を横に移すと、洗面所に設置されている鏡に映る私の姿を見て吐き気を覚える。

私は私の容姿が嫌いだ。春香とそっくりの癖して、その面影がある癖に大人に成長しているこの容姿が。

「……ああく、くっそ」

誰にも見られていない事をいいことにイライラを隠す事なく頭部をわしやわしやと搔く。

そして、適当な外着に着替えるとさつきと家を後にする。

家にいた所で何の変化もない。それだったら外に出て気分を変えた方がマシなのだ。

太陽がてっぺんから少し傾き、雲に少し遮られながらも照らしている街中を特に当てもなく歩いた。そして、フと目についたのは数年前から中高生の間で流行っているとあるクレープ店の姿だった。

特にクレープが好きという訳ではないのだが、ちよつとした気分転換替わりに甘いものを口にするのもありだろう。

適当にメニュー表の一番上にあつたイチゴクレープを選び、丁度空いていた丸机の席に座る。

つと、横から突然「すみません」と声を掛けられた。

「何?」

「相席お願ひできますか?」

そう言ってきたのは白い肌に薄い紫色のストレートの髪に黒のへそ出しスポーツウエアの上に紺色のミリタリージャケットを羽織り両手に腕輪をつけ、ヒップや足のラインが出ているスキニーのジーンズを穿いた女だった。

その手には私のイチゴクレープの一・五倍から二倍ほどの大きさのあるクレープがあった。

「・・・いいわ」

「わ〜い！　ありがとうございます！」

紫髪の女は私と向かい合うように座ると、ポケットからスマートフォンを取り出す。

そして、

「こう？　いや、こうかな？　う〜ん、こうした方が・・・」

写真を撮り始めた。

クレープと自分の顔を近づけてはパシャパシャとシャッターを切っている。

私は人気店で商品を買ってその商品と共に自分を撮影して「私可愛いよ」アピールをしている女が嫌いだ。

ハッキリ言つて風情がなさすぎる。

目の前の光景に少しイライラしながらクレープを口に運んでいると、紫髪の女が突然スマホの画面から私の方に視線を移した。

「こういうの嫌いだっただとしたりごめんさい」

「・・・いいわ。好きじゃないっていうのは確かだけど、結局は個人の自由だもの」

「個人の自由。確かにその通りだね。うむ、じゃあ自由ついでに少しいいかな？」

「何がじゃあなのかわからないのだけど」

「私って占いが得意でさ。ちよつと血を貰えないかな？」

「血？ 血液型占いつてやつ？ そもそも占い自体懐疑的というか怪しいのに、血液型で決まるなんて怪しいを通り越して詐欺でしょ？」

「違う違う。そういう占いじゃあないよ」

紫髪の女は首を振るとピツつと人差し指で自分の口を指さす。

「飲むの。味で判別できるから」

その言葉に私は一度目を瞑って大きく深呼吸をしてから静かに返す。

「ばつっつっつっつつかじやないの？」

「おおう、『つ』がいつぱい」

「そりゃあねえ……」

私は訳のわからない事を言うヤツが嫌いだ。特に変なオカルトを信奉しているようなヤツなら嫌いを通り越して嫌悪すら感じる。

「血っていうのは情報の塊だよ。味の濃さや舌触り、色でも体調や気分が分かるの」

「それ占いじゃなくて健康診断では？」

「そうともいうかもしれないが違うかもしれないのでありんす」

「いきなりの謎キャラにならないで」

何が「ありんす」よ。この女と関わっているとムカムカしかない。

これ以上関わっていても私にメリットなんて存在していない。むしろ存在していてもまるか。

私は急いでクレープを口に含んで飲み込む。

「そ、それじゃあ、私はもう行くから」

「うんうん。それじゃあね。またどこかで会えたらいいね」

いい訳が無いでしょうが。

ひらひらと手を振っている紫髪の女から視線を外してさっさと人ごみの中に紛れ込む。

ある程度離れてから肩を落としてため息を吐く。

たった数分、たった数事の会話でとてつもなく体力を使ってしまった。

・・・このまま外に居ても碌な目に合わない気がした為、私はタクシーを使ってさっさと帰宅した。

当たり前だが家は外出前と変わった所は一切ない。あつたとしたら恐怖だけだね。

出勤時間までは後、四時間もある。

私はアラームをセットすると外着のままベッドに倒れ込む。

カーテンを閉めている室内は多少太陽光が入り込んでいるモノの薄暗く仮眠には丁

度いい。

疲れのせいなのかは分からないが、直ぐに私の意識は闇に落ちていく。

なんやかんやあつて仕事終わり。

白む空の下、私は家に向かって走るタクシーの中でぼーつと外を眺める。

仕事の性質上仕方がない事だとは理解しているが、酒も飲みすぎると倦怠感が体を襲う事がある。元来、アルコールには強いんだけど、不調の時は酔う事はなくとも怠さで動きたくなくなってしまう。

ぼーつとしていると対向車線に見知った車と運転席に座る見知った顔を見かけた。

私が大大大嫌いな男。あの子と一緒にいた癖に一人だけ助かって、何の神経かあの子の夢を勝手に叶えた真正のクソ野郎。

面白味のない無表情で、こちらに気付いていない様子で横切っていく姿に苛立ちを覚える。

学校での事についてなんやかんやと言っていたが、どうせ学校では笑顔で生徒と楽しく過ごしているのだろう。一人だけ助かっておいて、意気揚々と過ごしているのだろう。

「……死ねばいいのに」

「? お客さん、どうしました?」

「なんでもないわ。ただの独り言よ」

私はそう答えると静かに目を閉じた。疲れと倦怠感と苛立ちから無理やり目を逸らして……。

25話 『あつ・・・』

どうしてこうなった。今俺が言える事はこの一言だけじゃないだろうか。

人生とは常に予想外で想定外の事ばかり発生し、計画通りに行くことなんて存在しない。

例え順調に見えてもどこかしらで計画外の事が発生している。

つまりは人生とはアドリブの連続であり、できる事は想定される不測の事態を対処するための事前準備や保険であり、それですら対処できない事なんてしょっちゅうある。

さて、と。そんな当たり前の事を脳内で反芻はんそうしていても現実が変わるなんて事はない。脳内でこねくり回した内容が現実^{はんじつ}に反映される事なんてないのだ。

俺は最近もう一種の癖になってきている現実逃避から逃避、つまりは現実を直視する。

「なあ、質問なんだが。なんで俺のノートパソコンのディスプレイにキレイな穴が開いているんだ？」

今は自習時間。

今日の午前中にやった授業内容の復習プリントを出し、終わり次第自由時間としてい

た。

そして、三人が自由時間になりプリントの採点中に少しトイレに行っていた。

俺が教室に居なかった時間は約三〜五分程だろう。その僅かな時間の間にディスプレイが残念な事になってしまったのだ。

それだけでもかなり頭が痛い事には変わりないがそれと同じくらい頭が痛くなりそうになっている事がある。

それは、

「えつと・・・、そのお・・・、キューピットだから・・・です」

「暗視、それは説明になっていないぞ。後、正確に言えばキューピットだ」

キューピッド。

ローマ神話に登場する『Cupid』という神の英語読み。

射貫かれた者を恋に落とす黄金の矢を持つており、そこから転じて恋愛成就の助けになることを「恋のキューピッド」と表現したりもする。

で、俺が何を言いたいのかと言うと、そのキューピッドを思わせる恰好メスガキどもを三人がして

いるのだ。

弓矢を手を持ち、なぜか白いマイクロビキニ姿。細い針金のようなもので頭の上辺りで支えられている黄色の輪っかとちらりと見える羽。

・・・マイクロピキニできえなければコスプレとして納得できただろうが、マイクロピキニがキューピッド感を消し飛ばしてしまっている。

「一から分かりやすく説明してくれるとありがたいんだが・・・」

「それでは、先生の要望にお応えしますね。まず、毎度のように『コスプレで先生を誘惑作戦』を執行しまして、今回は忍者・キューピッド・警察官・OLの中から何にするか話し合った結果、キューピッドにする事にしまして意気揚々と着替えたんです。それで、キューピッドと言えばやっぱり『黄金の矢』だという事で純金製の矢尻をつけた『黄金の矢』を用意したんです。それで、私と茜さんではつさんを煽ってその黒板辺りに設置した的を撃ちぬくように仕向けたんです」

「・・・ほう」

「で、はっさんが弓道をした事がないのを失念していました。はっさんの手を離れた矢がそのままPCを貫いてしまった感じです」

「スウー・・・・・・・・・・・・・・・・ハアーーーーー・・・・・・・・・・・・・・・・」

「とんでもなく深いため息を吐きましたね」

「あの、その・・・・・・・・ご、ごめんなさい・・・・・・・・」

涙目になって縮こまる暗視の頭をわしゃわしゃと撫でる。

「無理強いされたからってそれを行うのはダメだぞ。今回はパソコンだったから良かった

たけど、それがもしも人だったら最悪命を奪っていたかもしれないんだ。何かあっても一度深呼吸なりをして落ち着いて冷静に考えるんだぞ」

「は、はい・・・」

「ふふふ、先生つたら子供相手にちよつと難しい事を言いすぎじゃありませんか？ 私たちはまだ失敗して学んでいく時期ですよ」

「あのな、『失敗から学ぶ時期』であることは理解している。だけど、『取り返しのつかない失敗』をしないように教える事が不要な訳じゃないぞ」

「あらら。そう言われてしまうと反論のしようがないですね」

早川はそう言いながらくすくすと笑う。

その態度や表情を見る限り、俺が反論する事とその内容を予測していたようにも感じる。

いや、事実予測していたのだろう。

まだ幼さを感じるが早川は何処か冷静で頭が回る所がある。年相応にその場のノリで色々としてかす事はあれど、その際にもどうリカバリーをするのかを考えてリカバリーしやすい方向に誘導しているようにも感じる。

恐らくだが、今回の件もリカバリーできる策が、、、、、、とここまで考えた所でガラツと扉の開く音がした。

視線を向けると、スーツ姿にサングラスの集団——早川のお付きの人たちだ。

スーツの集団は俺のパソコンを持つと、流れるように分解して新しいディスプレイを取り付けると同時に飛び散ったパーツの掃除を終わらせて、軽い会釈の後に去つていった。

「早川」

「はい？」

「どのタイミングで呼んだ？」

「先生がおトイレから戻ってくる一〇数秒前ですね」

「仕事が早いな」

「早川、ですから。早くて当然です」

「苗字は関係ない気がするんだが」

「何をおっしゃるんですか。名は体を表すと言うじゃないですか。つまり色々早くても問題はありませぬ。もちろん、先生が望むなら私の超絶テクですつごい快楽を素早く与えてあげますよ」

「名は体を表す、に苗字は含まれないと思うんだがな。それと、お前がその発言をするのは珍しいな。普段は桃知が積極的に行つてお前は一步引いて眺めていたと思うんだが」
「私だつてたまにはこういう事をしたくなるお年頃なんですよ」

「俺の知る限りそんな年頃を持つているのはお前たちだけだ」

口が達者と言うべきか減らず口と言うべきか。

当然ですよ、と言わんばかりの顔でそんな事を平然と言つてのける姿を見ると将来大物になるな・・・と感じさせる。

「・・・それで、これからどうするおつもりですか?」

「どうするとは?」

「壊れたパソコンは直りました。もう怒る理由はありませんよね」

「ある。めつつつちやあるぞ。言っておくと俺は『終わりよければ全てよし』という考えに対しては否定的だぞ」

「終わりよければ全てよしです」

「ねえ、話聞いてた?」

早川の持つ雰囲気飲まれている事は頭では分かっているのだが、そこから抜け出すことができない。普段は『自己』を抑えて周りの空気に合わせているが、『自己』を出せば桃知以上に場を支配してしまえるのだ。

ある種の才能と言うべきだろうか。早川はこのような・・・それこそどこにでもありふれた一般の学校に通っているが、本人はあの『早川財閥』の令嬢であり現状唯一の跡取り候補・・・らしい。

正確に言えば、あと数年は祖父が財閥のトップであり、その後はその息子に当たる早川の父親が後を継ぐ事になるのだとか。それでも、本家血筋で考えると将来的には財閥を牛耳る事になるであろう真正正銘の『令嬢』であり、本来ならこのようなく普通小学校に通っているのも不思議なくらいなのだが・・・。

まあ、この問題児っぷりを見れば何となくお堅い金持ち学校に通っていない理由も納得できる。

はあ、つと心の中でため息を吐いていると何処か煽るようなむふつとした顔で早川が返答をする。

「先生、終わりよければ全てよしという考え方は大事ですよ。案外、人生を快適に過ごす上でこれ以上に合理的な考えはないと言つても過言ではな、い・・・いや、これは過言ですかね」

「そこまで言つたら少しは堂々と言い切れないものかな？」

「流石に言い切る事はできませんよ。全てよしかどうかは人それぞれですから」

「まあ、そうだな」

俺がそう言つた所で授業終了を知らせるチャイムが鳴る。

時計を見るといつの間にか二〇分以上経過していたようである。

自習時間が破壊と雑談で終わつたことにため息を吐きたくなるが、その雑談に乗せら

れた以上文句を言うのも違うだろう。

「つたく。まあ、今回だけは許す。ただし次はないぞ。自分たちで考えて危険な事はしないように。——それと、今回の件とは少しズレるが危険な場所にも近づかないようにな」

俺はそう言つて今回の件を締めくくる。

他にもまだ色々と言いたい事はあつたが、根本を辿れば俺が授業中にも関わらずトイレに行つた事も原因の一つなのだ。本来なら授業前に済ませておくもののだが、最近少し気が弛んでいるようだ。

反省しないと、と思いつながら次の授業の準備に取り掛かる。と同時に、

「今回私台詞一個もなかったんですけどお!!!」

「「あっ……」」

桃知がそう叫んだ。

26話 『お誘い』

「先生、今晩はお暇でしたよね？ 少し付き合ってもらってよろしいでしょうか？」

早川から突然そんな事を言われて俺はなんと返答すればいいのか咄嗟に判断する事ができなかつた。・・・いや、もしも即答できていたのだとしたら自分自身をあり得ないものを見る目で見ていただろう。

例えば、学校でこんな事を言われたのなら即答できていただろう。

学校でならある程度、変な事を言われる事を想定して構えている為、即答・・・とはいかなくてもちゃんとした返答ができただろう。

——そう、学校でならなのだ。

ここは自宅。しかもベッドの中だ。

俺は昨晩いつも通り食事をして、シャワーを浴びて、授業プリントの作成等をしてそのまま寝室のベッドで寝た。これは何かしらの力で記憶が操作されていなければ確定と言うか確実と言える部分だ。

しかし何か違和感を覚えて起きたら何故か隣に早川が居たのだ。

さも当然ですと言う顔で。

「なんでお前がここにいる？」

「ふふふ、寝起きだというのに調子が変わらないようですね。．．．単純な話ですよ」

早川は少し間を置いてから衝撃の一言を漏らす。

「つい先日このマンションを買収してオーナーになったんです」

そつと、頭を抱える。

想定外のさらに想定外——なんて言葉で言い表せるほどの話ではない。想定なんぞしていなかった。

こういう事をさらつと言える辺り、温室育ちのお嬢様と言うか金銭感覚がバグつていると言うか．．．。

俺の隣でクスクスと笑つてる早川を余所にどう返答すべきか頭を悩ませる。

「付き合うつて、一体何があるんだ？」

「今晩ちよつとした集まりがありました、御爺様も参加されるのですが、その御爺様が先生と顔を合わせたいと言つておりましたのでこの機会に顔合わせでもと思ひまして」

「ちよつとした集まりつて．．．。別の機会はないのか？ 例えば三者面談とか」

「御爺様は現役で『早川財閥』を率いている会長ですよ。そう簡単に時間が取れるお人じゃないんですよ」

「なるほど、ねえ．．．。その会長様がなんでただの一教師である俺と顔を合わせたがつ

ているのかが分からないんだが……」

俺はそう言いながらベッドから出る。

「あら？ お仕事の疲れがまだ残っているでしょう？ もう少しお休みになったらどうですか？」

「疲れの原因一号が何を言っているんだ……」

「歯に衣着せなくなりましたねえ」

「お陰様でな」

「とてもいい返しですね。それでこそ先生です。……それで、お休みにならないんですか？」

「ハア……。一つだけ言わせてもらっていいか？」

「どうぞ」

早川はそう言いながらベッドから出る。

俺が何を言うのか、それを楽しみにしているかのようニコニコと笑顔で。だから、努めて冷静にその一言を言う。

「何で裸なんだ」

「私寝るときは全裸派なんですよ」

即答されてもう言い返す気も起きなかった。



俺は冷蔵庫の中にあつたソーセージを焼く。

フライパンに軽く油を引いて温めた後にころころとソーセージを転がして全体へ均等に火を通す。

視界の端では当然といった顔で食卓に座っている早川がこちらをジーツと見てきている。

時計を見れば午前六時を少し過ぎた所であり、お腹が空いてくる時間だろうか。

いつからベッドの中に入っていたが分からないが、朝食を食べていない可能性もあるので念のために聞いておく。

「・・・食べるか？」

「食べます」

即答だった。

とりあえずソーセージを小皿に分けてから、昨日の夜にスーパーで買っておいたサラダも二つに分けて小皿に盛る。

白米は昼の分も含めて余分に炊いておいた為、早川の分は十分にある。

「ほら。これ食べたたら帰るんだぞ」

「あの、帰るのは別にいいのですが、今晚の集まりへ参加するかどうかを教えてくださいませんか？」

「・・・まあ、なんだ。別に予定もないしいいぞ。ただし、顔合わせをするだけで長居はしないからな」

「いいんですかつ!!？」

「なんで驚いてるんだ」

俺の返答に目を真ん丸にして少しオーバーに反応する早川の態度に逆に驚かされた。

普段から物静かな早川が出した大声に、珍しい物を見た気分で居ると、早川は数秒ほど目をぱちぱちさせた後に一回咳をしてからいつものような落ち着いた口調で答えた。

「本日の一七時にお迎えに来ますので、正装で待っていてください。それと、あくまでも今夜の集まりは軽い懇談会や顔合わせをする事が目的ですので肩の力は抜いて参加してくださいね」

「多分肩の力を抜くのは難しいと思う」

「そうですね。・・・では、少し雑談をしましょう」

「何がどうして『では』なんだ」

「軽い雑談でリラックスして、そのリラックスした気持ちで参加すればよろしいのでは

ないかと思ひまして」

「うくん、そうなのか？」

言い分としては確かに頷ける面はある。だが、どうしてもただのこじつけにしか思えない。

肩の力を抜くだけなら別に雑談をしなくても方法はいくらでもあるし、何なら今は早朝だ。

今リラックスしたからと言ってそのテンションがそのまま夕方々夜まで持つはずがない。むしろ、朝のテンションで一日を過ごせる人間はいないのではなかるうか。

そんな考えが浮かぶが、俺の気持ちも意見もお構いなしと言った様子で早川が口を開いた。

「ごだわり、ってあるじゃないですか。何かしらの事柄に対しての執着や固執、『これは譲れない』とか『こうじゃないと納得できない』みたいな。これは大小に関わらず誰でも持つている物ですよ。日常生活を送る上でもこのごだわりを持つて一つ一つの事柄をするなんていうちよつと窮屈な生活をしている人の話もよくテレビとかで見ますし、そのごだわりから外れた事で気分を悪くしたりなんてのも。ああ、そうそう。ごだわりから外れた事をした・された、何て言うのが殺害動機の手続き物も結構ありますね」

「そうだな。．．．それで、何が言いたいんだ？」

「先生って処女厨ですか？」

思考が停止した。気分はまさに宇宙猫。

頭の中を早川の言葉が反響し、その言葉の意味を理解しようとしては理解が追い付かず最終的には思考が止まっては数秒後に動き出すという無駄で謎な動きを続ける。

そうこうしてたつぷり一〇数秒程固まってから俺の口から洩れたのはたった一言。

「おまえは何を言っているんだ」

「ミ〇コ・クロ〇ツプですか？」

カクリ、と首を傾げる早川を前に深くため息を吐く。

何故こんな事を質問したのかが一切分からないが、それでも何とか口を動かす。

「質問には答えよう。俺にはそう言ったこだわりはない」

「そうなんですねぇ。それは良かったです♪」

ニコニコと笑顔を浮かべる早川と対象に、俺の顔はげんなりとしているのだろう。

結局質問の意図が分からないままである。

その後は早川の質問や雑談を軽く流しながら食事を終えた。

「「ごちそうさまでした」」

手を合わせてそう言って食器を台所のシンクに入れる。

早川は椅子に座ったままジーンとこつちを見ている。

「どうした？」

「私の使った食器、隅々まで舐めてもいいんですよ？」

「誰が舐めるか」

俺は蛇口を捻り食器を水に浸ける。それを見た早川はつまらなそうに口を少し尖らせている。

時計をチラリと確認する。まだ七時過ぎ。だと言うのにかんりの疲れを感じる。

普段なら『仕事』というフィルターのお陰で多少の事なら受け流せるが、仕事モードでない状態だと流石に疲労を強く感じてしまう。

実際の所、疲れは同じくらい——いや、拘束時間的に言えば今の方が圧倒的に疲れは少ないはずなのだが何故かドツと疲れた。

少し肩を落としながらも食器を洗っていると、早川がひよこつと食卓の椅子から降りた。

「それでは、私は一旦帰りますね。また夜にお会いしましょう」

それだけを言ってさっさと出て行ってしまった。保護者が居るであろう駐車場まで見送ろうと思っていたが、それを伝えるよりも前に流れるように出て行かれてしまった。だそれを眺める事しかできなかった。



時間は少し遡る。

とある大手飲食会社のチェーン店で優歌はドリンクバーとソフトクリームのみで一時間程居座っていた。

何杯目かのおレンジジュースを喉に通していた所に一人の不審な男が近付いて来た。ぼさぼさで手入れをされていない金髪に生やしっぱなしの無精ヒゲを蓄えた小汚くタバコ臭い圧倒的不審者。

優歌はその不審者に気が付くと手を少し上げてヒラヒラと振る。

「やあつと来ましたか。一体どれだけ私を待たせるつもりですか？ あの地球人のように木っ端みじんにしますよ」

「どの地球人だよ。あと、お前世代じゃないだろ。——ああ、言っておくが俺はGT世代だ」

「聞いていません」

「はいはいそうかよ」

金髪の男はそう言いながら向き合うように椅子に座る。そうして、持っていたバッグ

から幾つかのクリアファイルを取り出してその中の一つを優歌に渡す。

クリアファイルを受け取り、その中に挟まれている資料をペラペラと眺める。

そうして、一つの資料に目が留まり言葉を詰まらせた。

「……………」

「どうかしたか、上流階級のお嬢様」

金髪の男の言葉に優歌は重たくなつた口を動かす。

「これって……………」

「……………これ？」

どう言葉を紡ぐのかを必死に考えているその姿に金髪の男は疑問を覚える。そして、ようやく気が付いた。

優歌に渡したファイルは金髪の男が刺激の少ないように一部情報を隠した物ではなく、調査を開始してすぐのあの日にマコトから渡された情報を精査する為に事細かに調べ上げた情報をびっしりと纏め書きしている物だったのだ。

サーッと金髪の男の血の気が引いていく。

定職に就かずパチンコばかりして借金を重ねて生活をしているハッキリ言って人生終わっている残念な人間であるが、案外に性格は一般のソレと変わらないのだ。

「あー、えっと、それはだな……………」

何と説明しようか頭を悩ませていると優歌がファイルをパタンと閉じて少し深呼吸をしてから口を開いた。

「ありがとうございます。．．．そして、気を使わせてしまつて申し訳ございません」

優歌はペコリと頭を下げるとファイルを自身のバッグに入れる。

取り返すことが不可能になった。冷や汗が滝のように流れ、ポタポタと垂れる。

「?．．．熱いんですか?」

「は、はは、はははははははは．．．」

口から自然と笑い声が漏れ出す。

金髪の男は残念な事にマコトに勝てない。口でも暴力でも、そしてマコトから金をお受け取つて口止めされた上で精査したのにワンミスでそれがパー。何なら最悪の場合、金髪の男の命もパーになる可能性すらある。

そうして、金髪の男はある結論を出した。

(パチ打と)

現実逃避して何もなかったことにするという結論を。

「なんか上の空になっていきますが、気分でも悪いのですか?」

「いやあ、大丈夫大丈夫ダイジョウブ．．．」

一切大丈夫ではないのだが、そういう事しかできない。

優歌は挙動不審になつた金髪の男に疑問を覚えながらも、その思考をすぐに振り払つた。

そもそも気にしてもしょうがないし特に興味もなければ突つ込んで話を聞く労力を割くつもりもない。

分かりやすく言えば、優歌にとつて金髪の男はあくまでも駒の一つであつてどうなるうと知つたこつちやないのだ。その為、さつさとレジへ向かい会計を済ませると足早に去つて行つてしまった。

その背を見送つた後に金髪の男も店を後にしようとして立ち上がり、ガシツ、と肩を掴まれた。

ギギギギギ、とゆっくり首を動かして自身の肩を掴んでいる人物を確認する。

「マ、コト……」

「名前で呼んでくれるなんて珍しいですねえ。何か気まずい事でも？」

「……ッ!!」

金髪の男はマコトの顔面に目掛けて裏拳を放つ。マコトは簡単にそれを受け止めるが、一瞬の隙を突いて足首を踏みつけるような形で蹴る。所謂、『関節蹴り』であり場合によつては相手の関節を砕き障害を残す事もある危険行為だが、そんな事を気にしている余裕はない。

蹴り抜きの痛みで肩を掴む腕の力が抜けた瞬間に体を回転させて拘束を外し、出入り口に向かつてダッシュした。

「ツぁ……。待、てっ!!」

「待てと言われて待つ馬鹿がどこに居ると思ってるんだっ!!!」

「く、うう……。相変わらず逃げ足だけは立派だなあ!!」

「はーはーはっはっはっは!! 逃げるってのは生きるって事なんだぜえ!!」

金髪の男は勝利宣言のようにそう叫ぶと雑踏の中へと姿を消す。

足を痛めたマコトはその後を追う事ができず齒ぎしりをする事しかできなかった。

27話 『パーティー開始と不穏な影』

チャイムが鳴る。

そろそろか、といつでも出れる準備をしていた事もありその音と同時に玄関へと向かい扉を開ける。

扉を開くとそこにはパーティードレスを着た早川がいた。パーティードレスは蒼く袖が花をあしらったシースルーレースで出来ており、うつすらと早川の白い肌が見える。

「こんばんは。お迎えに来ましたよ」

「ありがとう。・・・この格好で良いよな？」

「良いんじゃないでしょうか？ ごく一般的なスーツみたいですし」

「まあ、就職した時に買った物だからな」

「それなら安っぽいのは仕方がないですね」

「否定はできないな」

三万円ちよいの物だしな。安っぽいと言われたら素直に頷くしかない。

俺の言葉に早川はクスリと笑うとそつと手を伸ばしてきた。

「それじゃあ、行きましようか」

「・・・その手は？」

「ドレス姿の私とスーツ姿の先生が手を繋いで歩いている所を写真で撮ってもらう手筈になっているので」

「そうする理由が分からないんだが・・・」

「茜さんとはっさんへの自慢です」

「却下だ」

「ちえり、少しは乗ってくれてもいいじゃないですかあ」

「断る」

俺はそう答えると早川と一緒にエレベーターで一階まで降りるとエントランスを出てすぐの所で待機していた車に乗り込む。

運転手は毎日のように顔を合わせる早川専属の世話役（本名：三上守）だった。軽く会釈をすると、向こうも同じように軽く会釈を返してきた。

シートベルトをすると同時に車が発進する。

車は安全運転で夜道を進む。向かう先はこの街の中央駅に隣接しているホテル：：らしい。ホテルの最上階にあるパーティーホールが会場になっているのだとか。

俺はあまり電車に乗る事はないので数回しかそのホテルを見た事はないが、都心部か

「少し外れたこの街にしてはかなり高級感を感じられる外観をしており、駅に隣接しているという事もあってか結構利用者は多いと聞く。」

「今日は良い日になりそうですねえ」

「良い日って・・・もう夕方だぞ」

「例え夕方でも、今日と言う日が後六時間と少ししかないとしても良い日という事には変わりはありませんよ」

「本当に楽しそうにそう言う姿を微笑ましく感じていると、「そう言えば」と言葉が続けられた。」

「先生は本日、どのようなお過ごしになられていたのですか？」

「えっと、参考書を読んだり、宿題プリントや小テストのプリントを作ったりとかだが・・・」

「・・・あの・・・、先生は休日にも仕事をされているのですか？ お休み、なんですよね？」

「休みだが？」

「いや・・・何ですかその『何当然な事を』みたいな顔は。休日なのにプリント作成しちゃってるのは仕事している時と変わらないのでは？」

「新しく買った参考書で結構面白い式があつたから色々と手を加えてみたくなって気づ

いたら宿題プリントになっていただけなんだが・・・」

「それ最早職業病の領域に入っていますよ」

「まあ、そうだな・・・」

そう言われると否定できない為、認めるしかない。

いくら問題を作るのが楽しかったからと言ってそれで休日にも関わらず仕事をしてしまっているのは職業病かもしれない。

今度の休日はパソコンから離れて外出してみるのもいいだろうか。

そんな事を考えながら雑談を続けている内にホテルに到着した。車寄せに停まっただけでドアが開かれた。

「お久しぶりです、早川のお嬢様。本日は当ホテルにご来訪いただきありがとうございます」

車から降りた早川にホテルマンらしき男が深々と頭を下げる。

身なりの良さそうな男は何処か張り付いたような印象を受ける笑顔を向けるホテルマンは俺の姿を見た瞬間、僅かに眉をピクリと動かした。

「・・・そちらの方は？」

「私の先生です。突然ながら参加していただく事になりましたの」

「先生・・・。家庭教師か何かですか？ それだったら今回のような場にはふさわしくな

いいのでは……?」

「いいのです。今日の集まり何て結局は近況報告や顔合わせと言う名の大人の飲み会。私のような子供の相手をしてくれる人間の一人や二人は必要ですの」

「そう……ですか……。つと、このような事で時間を取らせてしまい申し訳ございません。すぐにご案内いたします」

そう言つて再度頭を下げたホテルマンは顔を上げた後に俺の方に視線を飛ばし、直ぐに別の来訪者の方へと向かつていった。

「……知り合いか?」

「ええ、このホテルは御爺様が昔からよく利用している場所ですので何度か顔を合わせた事のある人です。今では役職も付いていると聞いた覚えがあります。詳細は覚えていませんが」

「そうか……」

別のホテルマンに連れられてホテル内に足を向けながら先ほどのホテルマンに視線を飛ばす。

完璧、と言えるほどの笑顔と教科書に載つていそうな程綺麗な姿勢がプロとしての経験値を言外に語っているようにも思えた。

エレベーターに乗つてパーティーホールのある階まで上がると、そこには一目で高級

だと理解できる滑らかな生地でできたスーツを着ている人や眩しく感じるほどの煌びやかさがありつつどこか落ち着いた雰囲気のあるドレスに身を包んだ人等々、俺のような庶民とは明らかに生きる世界が違う人たちが大勢いた。

あまりの庄に少しグロッキーになりそうになるが、隣にいる早川のお陰か何とか平常を取り繕うことはできた。

エレベーターから降りた早川は辺りをキョロキョロと見回してから俺の手を引いて歩き出す。

そうして白いスーツの男性と優歌と同じ蒼いドレスを着た女性の下へ着くと、軽い会釈をした。

「お父様、お母様。只今到着しました」

「おお、待ったぞ。．．．つと、そちらが担任の、」

「月城匠です。本日はお招きいただきありがとうございます」

「いえいえ、当日に突然お呼びしてしまい申し訳ない。本来ならずつと前にお声かけをすべきだったのですが、仕事が予想以上に早く終わって父さんが参加できる事になり、父さんが月城さんと会いたいと言いつ出したものですから．．．」

「お氣遣いありがとうございますが、大丈夫ですよ。今日は予定もなかったのです」

「そう言ってもらえるとありがたいです．．．つと、紹介が遅れました。私が優歌の父

の『早川和作』で、こっちが」

「母の『早川奏』です」

そう言つて蒼いドレスの女性はペコリと会釈をした。俺もそれに会釈で返す。

ざつと二人を観察する。

早川は母親似のようで、奏さんの印象は『大人になった早川優歌』だった。

特に三者面談等を行つたりしなかつた事もあり、赴任してきて初めて初めて生徒の両親と顔合わせをしたが、二人の落ち着いた雰囲気のお陰か先ほどまでグロッキーになりかけていた気持ちは何処かへ吹き飛んでいた。

奏さんから普段の学校での様子などを聞かれ、答えられる範囲でお伝えしたり家での様子などを少しだが聞くことができた。

そうした談笑のお陰か、少しリラククスできた俺の隣で早川が再度周囲を見回している。また人を探しているのかと思ひ様子を見てみると、少し寂し気な表情で和作さんに質問をした。

「“あの人”は来ていないのですか？」

「・・・ああ、“彼”からは『用事があつて行けない』と連絡がきたよ」

「つ・・・。それは、残念ね・・・」

早川は少し俯いた後、一度咳をして気分を切り替えてから、俺の手を掴む。

「すみません。少し付き合ってください」

「あ、ああ・・・」

「優歌、あまり先生に迷惑をかけるんじゃないぞ。いいな?」

「分かっていきます。それでは、行きましょう」

「つと、すみません。お話はまた時間があれば」

「はい、学校での様子を聞けて嬉しかったです。また後で時間があれば聞かせてください」

俺は手を引かれるまま、人混みを抜ける。そうして少し離れた所にある廊下に設置されているベンチに早川は座った。

俺もその隣に座って様子を窺う。

早川は少し深呼吸をしてから静かに口を開いた。

「先生、一つ授業をお願いできますか?」

「授業・・・? 内容にもよるが、大丈夫だぞ」

「『行けたら行く』と言う人は何で来ないのでしょね」

難問が来た。

『行けたら行く』と言うのは行くとも行かないとも明言していない為に、実際に来なかったとしても『行く』と明言していないせいで責めるに責められないのだ。

つまり、『行けたら行く』と言うのは行かなかつたとしても雑な言い訳を押し通せる言葉と言う事になる、のだろう。

つというか、それ以外に言い様がないのでそのままを言葉で伝える。

「・・・なるほど。やはりそれが正解に近いのですかね」

「多分な。俺自身、そういつた経験はないから正確に言える訳じゃないがな」

「あら？ ドタキャンした事がないのですか？」

「ないな。された事はあるが・・・」

「された事はあるのですね」

フフフ、と笑みを漏らしてから早川はポツポツと話し始めた。

「私には恩人がいるんです。私が酷い目に合つた時に、何の関わりもなかつたのに、何の見返りもないのに、突然現れて嵐のように事態を動かして、・・・ずっと優しい笑顔を見せて救い出して下さつた恩人が」

「ヒーロー、みたいな人だな」

「ええ、ヒーローですね。私の中であの人は最高のヒーローなんです」

なのに、と言葉が続けられる。

「何で『行けたら行く』で来ないのでしょねえ・・・」

「あ、来なかつたのがそのヒーローなんだ」

深く息を吐く姿にどこか親近感を覚えながら早川の言う『ヒーロー』の姿を思い浮かべる。

どんな人物かは知らないが、『ヒーロー』というイメージからぴちぴちのスーツを着てマントを靡かせている姿が浮かんできた。実際、そんな恰好をしている人物が居たらただの不審者ではないが……。

「ヒーローですからねえ。きつとどこかで人助けでもしているんでしょうねえ……。見境なく困っている人に手を差し伸べまくつてあつちこつちに笑顔を振りまいているんでしょうねえ。ほんとクソ」

「口調崩れてないか？」

「おっと、私とした事はしたないですわねえ」

「めちやくちや白々しいわ」

早川は普段から丁寧な口調でいるが、もしかしたら今のが彼女の素なのかもしれない。い。

そう思うと、生徒との関係を締められた気がする。……錯覚ではないといいが。

そんな会話をしていると、廊下にいた人達が次々にパーティーホールへと入って行く。

その人の動きに気付き、俺は早川に手を指し伸ばす。

「それじゃあ、行こうか」

「ええ、そうですね。御爺様に先生を紹介しなければいけませんし・・・」

「ホント、何で財閥のトップという大物が俺なんかに興味を持ったんだかな・・・」

「さあ？ 何でなのでしょうねえ。私には分かりません♪」

ニコニコと笑うその姿を訝しく思いながら俺は早川と手を繋ぎ歩幅を合わせながらパーティーホールへと向かう。

こういった場は初めてだった為、かなり緊張したが、それ以上にどこか心の奥がワクワクする感覚があった。

しかし、この後にあまりにも想定外な事が起こるなんて、俺は微塵も思っていなかった。思える訳が無かった。



少年が闇夜を駆ける。

額からは汗が垂れ、その表情からは焦りが見て取れた。

肩で大きく息を整えながらポケットからスマホを取り出すと通話履歴の一番上にある最新の電話番号をタップする。数回のコールの後に相手が出る。

「情報は？」

『第一声がそれか。調べてたけどこっちの拠点はもぬけの殻よ。残念な事に何一つないわよ』

「くっそ。まだ周回遅れを取り戻せそうにねえな。．．．すまねえ、次の拠点にも向かってもらえるか？俺はちよつと別視点で探してみる」

『別視点？』ドリームドラッグ「夢ノ薬」関係以外に何かあるとでもいうの？』

「いやさ、なあんか変なんだよな。薬を売るだけなら別に隠れてこそこそ売ってりやいののに何でか人殺しすらしてるんだぜ。しかも、被害者は薬をやった形跡なしアゝンド犯人グループたちとの繋がりも見えないまま」

少年の言葉に電話先の相手は頭に疑問符を浮かべる。

『何らかの原因で取引現場を見られたとかそんな感じじゃない？ 私たち「妖狐」だって口封じくらいしているし、こっちの業界じゃそこまで不思議じゃないわ』

「そう。不思議じゃないからこそ逆に不自然なんだよ」

『は？．．．トンチ？ アンタ頭いい雰囲気出してるとけど普通に馬鹿なんだから頭のない振りするの止めたら？』

「シヤラップ厨二病」

『厨二じゃないって何度も話してるでしょう!!』

「はいはいワロスワロス。んで、テメエの下らねえ話は置いて話を戻すがよ、見られたとしてもそこでの売買を止めてしばらく潜伏しときやいい訳だろ？　なんでリスクを取ってまで殺したかって話だよ。しかも結構雑に」

『まあ、雑だったわね』

「となると犯人たちはそこまで殺し慣れていないって事じゃねえかな？　流石に素人っぽすぎる。……つまり犯人たちはチンピラ上がりの馬鹿集団。しかも行動力だけはある手に負えない厄介なパターンのな」

電話口から返事はない、恐らくは無言で続きを要求している所だろう。

「それに、被害者の顔を剥いで持ち去っているのは流石に露骨すぎるとは思わねえか？」

『残念ね。「覆面使い」^{デスマスク}の方はとっくに訪ねたわ。知らぬ存ぜぬだったわよ』

「俺が向かう。『覆面使い』の事だ。どうせ何か知ってるさ」

『……だといいいけどね。まあ、そつちも精々頑張りなさい』

「おうよ。何かあったらメッセージアプリの方に頼むわ」

そう言って通話を終えると、少年は再度夜道を駆け抜ける。

少年の頭にあるのは偶然見つけた死体とその死体が握っていた一つのピンバッジ。

そのバッジのデザインを思い浮かべながら少年は小さく呟いた。

「予感、外れてくれるといいなあ・・・」

28話 『魔の手』

ガンガンと頭が痛む。

今の自分が置かれている状況を判断したいが、室内は小さな電球が淡く照らしているのみで全体を見通す事が出来ない。

分かる事と言えば手足を縛られてベッドに寝かされているという事だけだ。

薄暗い室内で耳を澄ませるとシャワーの音と水が流れる音が聞こえる。

俺はとりあえず思考を巡らせる。

記憶が途切れる前を思い出す事で何が起こったのかを判断するために。

俺は早川と手を繋ぎながらパーティーホールに入った。パーティーホール内には多くの大物の顔があり、軽く委縮してしまった。

大手企業の社長、よくテレビで見かける芸能人、某政党の議員 e t c. 正直に言つて俺がここにいるのは場違いなのではないかとすら思う。というか場違いでしかない。

大物たちはそれぞれが談笑しており、僅かに聞こえてくる話の断片は聞いていいの
か分からないような情報すら幾つもあった。

こういったものは忘れようとしても無理な事が多い。『忘れよう』とする意識がそれをより記憶へ深く刻み込んでしまう。

その為、素早く記憶から消す方法は一つ。何も聞かなかつた事にしてさっさと意識から外す事だ。

全員がパーティーホールに入った所で、入り口の正反対側にあるステージに一人の老人が上がる。

黒紋付羽織袴を着こなし、堂々とした立ち振る舞い、顎に携えた深く白い髭、見た目から大物である事、そしてステージに上がっている事からその人物が誰なのかは明白だった。

老人はマイクを手に口を開いた。話す内容は所謂テンプレートをなぞっているものであった。

「・・・？」

「先生、ちよつとお耳を拝借してもよろしいですか？」

「あ、ああ・・・」

「もうお分かりでしょうが、あそこにいるのが私の御爺様です。もう八〇歳を超えるご老体ですが未だに元気澆刺で、新規事業の開拓や業務提携、買収等は自分で現場に出たりして率先して動いている人で、社員からはあだ名で呼ばれていて御爺様本人もそれを

良しとしているんです。そうそう、左手に巻かれているあの包帯は、数日前に人生初のスケートボードを行った際に派手にスツ転んで手首を痛めてしまったらしいです」

「随分とアグレッシブな人だな・・・」

「ええ、年齢的にもそろそろ引退してもおかしくないハズですのに未だに元気満々であつちこつちへ飛び回つて一か所に留まらないんですよねえ・・・」

「なるほど。簡単に時間が取れないっていうのはそういう事か・・・」

本当なら財閥の会長の話をしっかりと内容聞いておきたかったが、早川からの説明に耳を傾けていたせいで内容は全く入ってきていなかった。

「つと、御爺様のお話が終わったようですね。校長先生の長つたらしい話よりも簡潔であつさりとした話で良いですねえ」

「ウチの学校の校長は結構話短い方だと思うが」

「掲示板では『校長は話が長い』と言うのが共通認識ですよ」

「ねーかい」

別にネット上での印象や認識を頭っから否定する気は無いが、それを確定した事実で例外が無いように話すのはあまりいただけない。

近いうちにネットリテラシー等についての授業も行う事も視野に入れておこう。

思考を仕事の方へと傾けていると、ステージから降りた会長がこちらにへと向かつて

きていた。

「優歌〜！ おじいちゃんちゅよ〜!!」

とんでもないキヤラで来た。満面の笑みで両手を大きく広げているその姿は、まさに『孫煩惱のおじいちゃん』そのものであった。

早川も会長に笑顔を向けてからペコリと会釈で返す。

「お久しぶりです、御爺様。相変わらずお元気そうで大変喜ばしい限りです」

「そう堅苦しくならなくていいぞ〜。昔みたいに飛んで抱きついてきていいんじゃないぞ〜」

にっこにこでそんな事を言う会長の隣にいる初老の男性が呆れたように呟く。

「過去の捏造は止した方が良い。実際は貴方がべたべたと抱きついて結構ウザがられていたでしょう」

「おまつ！ それを言わんでくれ！」

「残念な事に周知の事実です。孫バカ事態は否定しませんが時と場所を考えてください」

初老の男性の言葉に会長はがつくりと項垂れる。

周囲の人たちがその様子を見て「またやってる」だの「恒例行事ですな」と話している声が聞こえてきた為、毎度のようにこのような事をしているのだろう。

フットワークが軽い人、と言う印象が俺の中で強く刻まれる音がした。

そんな光景を見てみると、会長がこちらに気が付いたようでゴホン、と咳をして気持ちを切り替えたような表情になる。

「おっと、挨拶が遅れて申し訳ない。優歌の先生ですね。初めまして、私は『早川巡平』はやかわじゅんぺい。ご存じでしょうが『早川財閥』の会長を務めています」

「いえいえ、本日はお招きいただきありがとうございます。優歌さんの担任を任されている『月城匠』です。お会いできて光栄に思います」

「私こそお会いできて嬉しく思っていますよ。もうお分かりでしょうが優歌は我儘な所がありましてな……。そこが可愛くつてたまらないと言うかクールでツンツンしている所が祖父心を刺激すると言うかほんとに私の孫可愛すぎて今すぐにも抱きしめたいし思いっきり頭撫でたい」

「生まれ煩惱爺。見てみなさい、月城さんが結構マジな顔で引いていますよ」

初老の男性がギロツと会長を睨みながら冷たい声でツツコミを入れた。

先ほども見たような光景に、本当にこれが毎度行っている事だと言う事が実感させられた。

「おっと、すみません。優歌が可愛すぎるせいでしょう……。ゴホンツ、どこまでお話ししましたっけな……。そうそう、優歌に我儘な所があるという辺りでしたね。その我儘

「お、おお……。つい熱が入ってしまった」

「いつもの事ですね」

「いやははは。もう少しお話ししたい所でしたが少し挨拶回りに行きますね。また時間があれば優歌の話を聞いていただけるとありがたいがタブアアツツ!!」

初老の男性の手を取って立ち上がった会長の足を早川が再度蹴飛ばした。

普段の様子とは大きく違う暴力的な姿に、戸惑いを覚えたが、初老の男性の言葉や周囲の反応からここまでがテンプレート化している事がなんとなく伺えてしまう。

軽く足を引きずりながら去って行く会長を見送ってから俺は腰を落として早川と視線を合わせる。

「いくら恥ずかしいからと言って暴力に訴えるのはダメだぞ」

「大丈夫ですよ。暴力は全てを解決しますから」

「……。お前そんな脳筋だったか?」

「私は理系・文系の脳筋ですのぞ」

「そうか……。うん、俺はもう色々ツツコミを入れる気は無いからな」

軽く手で頭を押さえながら呟く。

人は見かけによらない、とはよく言ったものだ。

早川は見た目だけなら『大人しそうで知的な令嬢』に見えるが、実際は結構ヤンチャ

かつ強引な所があるので『脳筋』という早川の自評に対してツツコミを入れる理由もなかったりする。

「さて、と。私も挨拶回りをしますか。．．先生は私の後ろにでも付いてきて下さい。ふふつ、こういう場には慣れていきますので大丈夫ですよ」

そう言つて笑顔を向けてくる早川の言葉に俺は少しだけ甘える事にした。

周りにいるのは多くの業界に顔が利く超が付く大物ばかりで正直に言う結構委縮してしまっているのだ。

「ああ、そうだ。流石の私も大人との会話は正直言つて結構疲れますのでしばらくしたら休憩用に予約してある部屋に行きますのでそこへも付いてきて下さい。先生をお一人でこの場に残すのは忍びないので」

「ん．．．？ あ、ああ、分かった」

なんだか誘導された気がするが、気のせいだろう。

俺は早川の後について行きながら業界の大物との挨拶をした。最初こそ緊張しつぱなしだったが、案外フレンドリーに來られて緊張は自然と解かれたように思う。

そうして一時間ほど経過した辺りで早川に袖を引かれた。

「先生、少し疲れてしまったので休みに行きましょう」

「あ、ああ。分かった。すみません、これで失礼します」

俺はそう断つて会場を後にする。

会場を出て右手側にあるエレベーターに乗ると早川に促されるままに上階行きのポタンを押す。

「ふう……。やはり大人と話をしているとやっぱり疲れますね……」

「まあ、そうだな。つというか、ホントに大物ばかりだったな。知らない人間の方が少ない気がしたぞ……」

「テレビだけでなくネットでも大々的に取り上げられている人たちもいますからねえ。先ほど先生とお話しされていたのも近年一気に事業拡大をしているベンチャー企業の社長ですしねえ」

「凄く気さくな人だったな……。あの人も会長との関りがあるのか？」

「いえ？ 別の企業の重役のお知り合いでその繋がりです。今回特別に来ていただけですよ。御爺様的にはあと数年で落ちぶれるから取引をする気もないそうですし」

「サラツと言ふなあ……」

「いくら勢いがあつても無作為に手を広げたらこんがらがるのは当然ですもの」

「確かに、そうではあるな……。何でもかでも手を出したらキャパオーバーになつてしまふからな……」

そんな話をしている内に目的の階に到着し、エレベーターを降りると早川の案内でエ

レベーターから一番離れた部屋に入る。

早川がカードキーをキーホルダーに差し込むと室内の電気が一齐に灯る。

こういったホテルに泊まったのはそれこそ学生時代の修学旅行以来だったのでつい室内をグルリと見回していると……、

「ガッ、ッ、!!!」

突然体に強い衝撃が走った。

何が起こったのかを判断するよりも前に目の前が暗くなり、意識は完全に闇の中へと落ちて行った。

つと、ここまで回想できた事で何となくいだが今、自分が置かれている状況を起こした犯人が誰なのかが分かった。

自分の手を確認すると手首が縄で縛られていたが、それ以上にどこかに繋がれてはいなかったので結び目を口で解く。

手を自由にしてから足の縄を解いていると、浴場の扉が開く音がした。

「あら？ もう気付かれたのですか？ ん、あと数分だけ寝ていて下さいませんか？」

「お前は時と場合を考えた方が良い。今日みたいな日にまるでいつものようなペースでこんな事をしでかすな」

「やはりスタンガンの威力をもう少し上げておくべきでしたかね……」

「どこに隠し持ってた」

「基本的に普段から太ももにホルスターをつけて護身武器を持っていますので」

まさかの言葉に「ふう・・・」と息を吐いてから頭を抑える。

やはりと言うか、さも当然のように言われると何と返せばいいのかが分からなくなる。

俺が軽い頭痛に目を細めていると、早川が体を覆っていたタオルをハラリと落としてその白い肌を露出させ、そのまま飛びついてきた。

「お前な・・・。こういう事をする為に誘い込んだのだとしたら俺は帰るぞ」

「良いのですか？ もしもここで私が大きな声を出して外に飛び出したら、大変な事になってしまいますよ♡」

「桃知と同じような事言うな・・・」

「・・・先を越されていた、だと・・・」

シヨックを受けたような表情になる早川を見て再度ため息を吐く。

そして、とりあえず太ももに座っている早川をどかそうと脇辺りを手で掴んだ瞬間、
「カプリ☆」

首元を噛みつかれた。

俺の思考に空白が生まれる。

今までに無理やりキスをされた事なら何度もあったが、噛みつかれた事は今までになかったのでどう対応すればいいのか判断に迷っていると、早川はそのまま首元を舐め始めた。

「ツ!! お、お前なあ!!」

慌てて引き剥がそうとするが服をがっしりと掴まれてしまい中々引き剥がせない。

「れるお♡ んちゅ・・・♡ んく、ペろ♡ ちゅっ♡ ...♡ ふふっ、首元にキスマーク付いちゃいましたねえ♡ 茜さんやはっさんにどう説明します?♡」

「ありのままを説明する」

「羞恥心という物をご存じでないっ・・・!?」

「お前たちと付き合ってたら考えるだけ無意味だ」

「付き合ってたら、なんて・・・。先生はハーレム系がお好きなんですか?」

「なに顔を赤くしてんだよ阿呆」

「冗談ですよ・・・もしかして本気にしました?」

「お前の冗談と本気の境目が未だに判断付けづらいんだよ・・・」

「名女優ですから」

「・・・」

「あの、無視されると流石に悲しいですよ・・・」

「じゃあまず降りろ」

「あ、はい……」

案外素直に降りてくれた。

先ほどまでの抵抗は一体何だったのかとツツコミを入れたくなかったが、藪蛇なので口に出す事はない。

とりあえず足の縄を解きながら服を着るように促すと、またも素直に言う事を聞いてくれた。

「つたく、とりあえず会場に戻るぞ」

「はーい」

「良い返事だな。学校でもそれくらい元気でいてくれ」

俺は手足の調子を確認めるとベッドから立ち上がり、早川と手を掴む。そして、そのまま部屋を後にした。

時計を確認すると会場から出てから三〇分以上が経過していた。

「見つけましたよ」

エレベーターに向かい途中の分岐路からそんな声と共に人影が現れた。

一瞬誰かと思いき構えたが、そこにいたのはホテルの入り口で出会ったホテルマンだった。

見つけました、という言葉から恐らく会場に居なかつた早川を探しに来たのだろう。
「っ……」

急に早川が俺の後ろに隠れる。

どうしたのかと思ひ早川に視線を向けると、その顔には怯え・恐怖の色が浮かんでい
た。

「どう、した……？」

「違う……」

早川は震えた声で言葉を紡ぐ。

「アナタは、誰っっ!!?!」

その叫び声と同時に近くの部屋の扉が開き、そこから怪しい雰囲気を放つ連中が飛び
出してきた。

訳が分からず抵抗するよりも前に頭部に衝撃が走る。

「っ、あ……!!」

足から力が抜けて地面に倒れ込んでしまう。

思考がまとまらず、暗くなる視界に写つたのは手を掴まれ口を押えられながらそれ
も俺の方へ心配の色を浮かべた目を向けている早川で、どうにか安心させようと言葉を
発しようとしたが口は動かず、目の前が真っ暗になった。



少年が怒りに任せて舌打ちをする。

油断していた。大丈夫だと確信していた。してしまっていた。

自らの青さに、浅はかさに、愚かさに、何よりもその未熟さに憎しみを覚えるが、その思考を切り捨てる。

今はこんな事をしている状況ではない。

少年はスマホを操作して電話を繋ぐ。

『もしも……』

「分かったぞ」

向こうの言葉を最後まで聞かずに開口一番に言う。

その声色の怒気から、電話先の相手は事態を何となく察する。

「あの死体を持つていたのは『早川財閥』のグループで使われているバッジだ。デザインが財閥関係を現し、緑のデザインが職種、マークが主な勤務場所、色が大まかな役職を現している独自の物だ」

相手の返事を待たずに口を動かす。

「縁が鯉なのがホテル関係、コスモス柄はここら一体共通のマーク、色は蒼・・・マネー
ジャーだ」

『それで・・・？』

「心当たりが一つだけある。・・・今日は『星座市』にある財閥系列のホテルでパーティー
が行われている。・・・『覆面使い』をぶん殴って吐かせた。この意味分かるよな？」

『なあるほど。そういう事ね』

「俺はホテルに向かう。お前は引き続き情報を探してくれ」

少年はそれだけを言うと相手の返事も聞かずに通話を終わらせて走り出す。

(クツソ。こんな事なら死体を無視してパーティーに参加しとくべきだったな)

心の中でそう毒づき表情を引き締めると、大通りに出て手を高く立てる。

「ハイ！ タクシー!!!」

都合よく通りかかったタクシーに乗り込み、少年はホテルへと向かう。

ただ、一手遅い。もう事態はとつくの昔に動き始めている。

それを感覚で理解しながらも少年は僅かな望みに懸けるのだった。

29話 『事件に巻き込まれようとも、深く関わらなければ案外刹那に終わる』

最初に視界に写ったのは冷たいコンクリートの床だった。室内は薄暗く、輪郭でしか何があるのかを判断できない。

視線を光のある方へと動かすと、そこにはA4用紙サイズ程の・・・恐らく換気用の小窓がありそこから入る月明かりだけが光源のようだった。

そこまで確認して、ようやく俺は自分の・・・いや、自分たちの身に何があったのかを思い出して声を上げようとするが、唸り声しか出ない。もつと正確に言うなら猿ぐつわを銜えさせられているのだ。

外そうにも、両手は背中に回されて縛られており、同様に足も縛られている。ドツ、と焦りが浮かんでくる。

自分かどこに居るのか、気絶した後に何があったのか、この誘拐事件は判明しているのか、それ以上に気になるのが早川は無事なのかという所だ。

腕の縄を外そうとするが、がっしりと縛られており、例え腕の骨を外したとしても縄を外せるかは分からない。というか多分外せないと思う。

どこかに都合よく縄を切れそうな鋭い物がないかと視界の届く範囲をグルリと見回すと小さな人影が見えた。

それに気付いたと同時に俺の耳に規則的な音が入ってきた。靴を地面に擦る音と、地面に突く音。

シユトンシユトン、シユトンシユ、シユシユトンシユトン、シユトン、トンシユトントン……。

一瞬何かと思つたが、直ぐにそれがモールス信号だと言う事に気付いた。気づくと同時に脳内で翻訳をする。

擦る音と突く音のパターンからして和文モールスなのだろう。そして、それを翻訳すると浮かんできた文は、

『オ・キ・マ・シ・タ・カ』——変換するのなら「起きましたか?」になる。

それを認識した俺は相手が早川であると確信し、同じように靴でモールス信号を鳴らす。

『起きたぞ』

『そうですか。良かったです』

『怪我はないか?』

『ないです。先生の方は大丈夫ですか?』

『特に体に大きな痛みはないから、たぶん大丈夫だ』

ここまでやって気が付いた。縛られている足でこれをやるの、結構キツイ。

地味に疲れると言うか普段あまり使わない筋肉を使っているようで、足を攣らないかヒヤヒヤしてしまう。

『これって、誘拐だよな？ 何とか警察に通報とかできないか・・・？』

『残念な事に先生のスマホも私のスマホも持って行かれちゃいましたよ』

『そうか。まずは拘束を解く事を優先させるとするか・・・』

連絡手段がないのはキツイ。救助が来るかどうか分からない以上、何時までもここに留まっているのは得策だとは言えない。

できるなら脱出して警察に通報をするのがいいだろう。

俺が拘束を解くための物がないかと辺りを見回していると、早川の方からモールス信号が送られてきた。

『先生、ここちに来てください。できるか分かりませんが解いてみます』

『大丈夫か？』

『はい。結構手先は器用ですの』

俺は身体を這わせて早川に近づいて背中を向ける。

見えないが、早川が体を寄せてきた気配を感じると同時に手を縛っている縄を引っ張

るような感覚を感じる。

もぞもぞと肌を擦る感覚。少しくすぐったく感じるが、状況が状況故に声を出す気力もない。

服の擦れる音と縄の軋むような音、それを耳で捉えながら俺は視線を動かす。

影や形でしか室内にある物を判断できないが、それでも観察し続ける。

四角い影、僅かな月明かりで照らされた缶(恐らくゴミの空き缶)、そして——ロープ。それも一般的によく使われている綿製のものだろう。

細いロープではあるがかなり丈夫でかつ加工しやすい。編む事でより太く頑丈にできる所も魅力的な物だ。

脱出するにしても何の対策もなく逃げて、もしも見つかったとしたら恐らく殺されるだろう。

なら、生存確率を少しでも上げる為に武器になるようなものを持つていた方が安心できる。

そんな事を考えていると、シユルリと腕が自由になる感覚があった。

俺は素早く起き上がり口に付けられた猿ぐつわを取る。

「つぁ……。よし、今解いてやるからな」

足を縛るロープを解いて早川を解放しようと手を伸ばすと同時に俺の耳に一つの音

が入ってきた。

「っー」

バツと反射的に扉の方へ視線を向ける。

規則的な足音。それがこの部屋の方へと近づいてきている。

そこまで意味はないと頭では理解しながらも、手で口を押えて息を殺して様子を窺う。

足音は段々と近づき、そして、扉の前で止まった。

ドクン！ と心臓の鼓動が急激に跳ね上がるのを感じる。

俺たちを誘拐した連中だとしたらこの状況は不味い。拘束が解かれ自由になっている所が見つかれば何をされるかが分からない。

残念な事にこういった出来事の情報なんて小説等のフィクション作品でしか知らない為に断言はできないが、この場で殺される危険すらある。

俺は物音を立てないようにならなくても飛び出せるように体勢を動かす。

足音からして扉の前にいるのは一人だけだ。相手からすればこっちが自由になっている事なんて分からないはずである。

なら、扉が開くと同時にタックルで押し倒せば勝機はある……と信じた。

昔こそアウトドア派だったが、教員免許を取る為に勉強一筋になってからはインドア

で居る事が多くそこまで筋力や体力がある訳ではない。それ故に自信はそれほど無い。
「.....」

扉を睨みながら深呼吸をする。

心臓の鼓動がうるさく聞こえるほどの静寂の中、扉の向こうから声がした。

「いるね。しかも自由になっているみたいだ」

子供の声だった。

正確に言えば声変わりしたてのまだ若さの残る声。

その声色からすぐに声の主が子供、正確に言うならば一〇代半ばほどの少年だと瞬時に理解する。

俺が返事をしようとするよりも前に少年の声が聞こえてきた。

「返事はしなくていい。・・・動けるようだから伝えておく。アンタが捕まっている部屋を出て右に進むとこんな事を起こした大バカ者たちがいる部屋に着く。逆に左に進むと階段があるからそこを降りればすぐ近くに出口がある。俺が暴れている内に逃げるもよし、救助が来る事を考えて待機しているもよしだ」

そして、と言葉が続けられる。

「俺は警察でもなければフィクション作品の正義の味方でもない。連中相手に大暴れしたってそのまま殺される可能性だって十分ある。だから、可能ならば勝手に逃げて勝手に

に助かってくれ。・・・それじゃあ、無事に逃げ切れる事を祈っているよ」

少年はそれだけを言い残すと、それ以上は何も言わずに去ってしまったようだ。

遠ざかる足音がほとんど聞こえなくなつてから、俺は慌てて早川を縛っている縄を解く。

両手足が自由になつた早川は猿ぐつわを取ると同時に言う。

「逃げましょう」

「開口一番がそれか」

「ええ、これです。・・・それに、先生も脱出する気ではいたでしょう？ おあつらえ向きに脱出しやすくなつているので、さっさと逃げちやいましょう♪」

どこか楽しそうな、嬉しそうな声色でそう言う早川に俺は頷いて返す。

先ほどまで扉の前にいたであろう少年の事は心配だが、この状況で一般人の俺に出来る事はないだろう。

もしもフィクションの主人公であれば誘拐犯相手に大立ち回りをして鎮圧してしまふのだろうが、残念な事に俺はあくまでも一市民でありただの教職員ではない。

不審者が学校に入ってきた際の対処等は教わっているが、誘拐された上で誘拐犯相手に暴れる方法なんて知らない。

それ故に、今俺に出来る事は早川と共にここから脱出する事だけだろう。

「物音を立てないようにな。．．．何かあればすぐに言うんだぞ」

「分かっていきます。慎重に行きましよう」

早川の返事を聞くと、俺はゆっくりと扉を開く。

横開きの扉に鍵はかかかっておらず、気が抜けるほどあっさり開いた。普通、逃げだせないように鍵か何かで扉が開かないようにしておくものではないのかとも思ったが、開いてしまった以上はそこに意識を向けても意味はない。

部屋の外に出ると、俺たちは少年の言葉通りに左へ進み、特に問題なく階段が見えてきた。階段を降りるとすぐ目の前に非常口があり、拍子抜けするほどあっさり脱出ができた。

ただ．．．．．、

「お？ 捕まつてた人？ ちゃんと逃げ、れ．．．あつ．．．．．」

俺と早川が建物から出ると、そこに怪しい恰好をした人物がいた。

金色の髪をポニーテールで纏め、白い狐の面で顔を隠している人物。太ももを出した白いミニスカの着物（忍び装束？）に網タイツと網長手袋、前腕には甲冑のような物を付けた．．．何とすべきか。ゲームや漫画等のフィクション作品で見覚えのある恰好をした少女だった。

お面のせいで視線を判断しづらいが、少女は早川の方を見て固まっていた。

どうしたのかと思いい口を開こうとした瞬間、早川が一瞬早く呆れたような声色で言った。

「未だにテンプレ過ぎる恰好で居るんですね。恥と言う言葉をお調べになったらどうですか？」

「何が恥よ！ ってか、テンプレ言うな！」

お面の少女は腕を組んで深い溜息を吐く。

「くう……。何でどいつもこいつもテンプレって言うのよ。……。おい、その令嬢と手を繋いでいるさえない男。私の恰好はテンプレじゃないわよね？」

「正直に言うとなんプレに近いと思う」

「ぐはあ!!!」

胸を押さえて仰け反られた。

お面の少女は頭をわしやわしやと掻いてから面倒くさそうに口を開く。

「とりあえず、安全な場所まで送っていくわ。『アイツ』に頼まれちゃってるし……。付いて来て」

こちらの返事を聞かずに歩き始める少女。流石に怪しき満点のせいでどうしたものかと考えていると早川が少女の後に続くように歩き始めた。

「お、おい……。」

「大丈夫ですよ、先生。気を許したりはできませんし、完全に不審者でしかありませんが、今回は味方の様ですのぞ」

「?・・・今回?」

「おつと、こちらの話ですのでお気になさらず」

そう言つてにこりと微笑む早川。

俺は数舜程頭を悩ませたが、この状況で安全圏に行ける（かもしれない）のだとしたらそれに乗つかるしかないだろう。

もしもそれが罠だとしても、今の俺たちに選べる選択権は限られている。それだったら僕かでも希望のある方に進むのがいいだろう。

そうして俺も早川と一緒に少女に付いて行く。

ここからは結構とんとん拍子に事態は動いた。

誘拐事件は警察に通報されておらず、財団のエージェントで対応をしていたらしい所に俺たちは送り届けられた。

すぐに財閥と繋がりのある病院へと運び込まれてそのまま検査入院をする事になつただけでなく、財団の会長からは直々に謝罪されて、その際に今回の件を口外しないようにとお願ひされた。

通報しなかつた理由等、聞きたい事はあつたが藪蛇のような気がして口外しない事に

同意した。

非日常的な体験をしたにも関わらず、詳しい事を知らないままに事件は終わった。



「まあ、世の中そんなものだよ。特に“彼”が介入した以上はね」

翌週の土曜日。

突然、マコトに駅前の喫茶店へ呼び出された上でこんな事を言われた。

先週の事件から時間が流れるのは早く、何なら月を跨いでいる。

「で、何で俺は呼び出されたんだ」

「もやもやしていると思っオレてさ。私と違って非日常に慣れていないだろう？」

「そもそも慣れてしまったらそれが日常になるんじゃないか？」

「大正解。ま、私オレたちの日常だとしても、お前からしたら非日常だ」

ククク、と楽しそうに笑うマコトをジト目で睨みながらアイスコーヒーを飲む。

コイツが一般的に、良しとされていけないような人たちと繋がっていたり、自らも関わっている事自体は薄々気付いていたし、昔からの付き合い故に驚く事でもないので、それでも自分で体験した後だとマコトの楽しそうな態度に少しイラつとしてしま

う。

「表沙汰にならない事件や、警察が把握できていない事なんてしょっちゅうだ。今回の事は犬にでも噛まれたと思いなよ」

「噛まれたくはないんだがなあ……」

ところで、と俺は気になっていた事をマコトに聞いてみる事にした。

「俺と早川が監禁されていた廃墟に侵入して、逃げるように言ってくれた人がいるんだ。お前の口ぶりからして知り合いか？」

「いいや、こつちが一方的に知っているだけの有名人だよ」

「有名人？」

「そう、有名人」

マコトは俺の目をジツと見ながら少し間を開けて言った。

「正義の味方ってやつさ」

ニヒツ、といたずらっ子のような笑顔になったマコトに俺は呆れ口調で返す。

「決まった、みたいな雰囲気出して何一つ決まってないからな」

「言ったなコノヤロウ！」

ベシツ、と頭部に手刀を落とされた。結構力が込められていてかなり痛かった。

30話 『溝』

最近、早川がよそよそしい。

今までも桃知と比べると一步引いているような印象だったが、一步以上引いていると言いか、溝ができてるように感じる。

いつから溝が出来たのか、と問われればあの誘拐事件の日以降だったように思う。

俺は職員室でパソコンと睨めっこをしながらどうしたものかと思考を巡らせる。

普段の様子と違って見られたのか三宅先生たちから心配されたが、事情を説明しようにもきっかけは確実に『あの誘拐事件』な事もあつて口外できず、相談しようにもできないのが現状だ。

何が正解だったのか、そう考えるだけで気分が重くなる。

教師と生徒がプライベートで関わる事自体は推奨されていない。むしろ、鼻息してると思われてPTAからの印象が悪くなる場合もある。

ただし、家庭での事情により学業に支障が出ていたりする場合は関わる事を咎められたりはしない。・・・と、言いたい所だがその場合は普通に業務扱いなのでプライベートと言う訳ではない。

例えば、生徒と家が近く生活圏が被っている為、多く関わる機会がある・・・何て場合なら特に問題ではないだろう。

それに、生徒から学校での事以外の相談を受けたり、頼まれ事をされた際にそれを受け止めるかどうかと問われた場合は「教職員それぞれ対応が違う」としか言えない。

教職という物は結構給料が安い。

それでも心意気だけでそう言った生徒からのお願いを聞いて業務外活動をする人もいるし、本人が望んでやっている以上は周囲が咎める事は余程無理をしていない限りできない。

結局の所、何が言いたいのかと言えば、早川からの招待を受けた事を良し悪しでは語れないと言う事だ。

詳しい事は分からない。だけど、あのホテルマンが誘拐犯たちと共犯だった事を考えるだけで思考が詰まる。

俺が招待を受けなかったら早川は単独での行動をしないのか、と言えば恐らくは違うだろう。

例えば、トイレに行ったり、少し休む為に控室に籠ったりで隙が生まれるだろうし、あのホテルマンが何かと理由をつけて連れ出すだけでも誘拐は簡単に行われる。

「俺が参加しなければこんな事にはならなかった」とできるなら兎も角、候補を上げてい

けばそう言い切れないのだ。

……いや、もしかしたらこの思考自体が狂っているのかもしれない。

無意識的に罪から逃れる為に「自分が居なくても起こっていた」という言い訳を探しているのだろうか。

思考がぐちゃぐちゃになる。

何度も同じところを回り、同じような自問自答ばかりを繰り返す。

そうこうしている内に定時を過ぎ、俺は残っている仕事をそこそこに切り上げて帰路に着く。

普段は寄り道する事なく真っ直ぐ帰宅しているのだが、今日に限っては気分転換がしたくなり目的もなく適当に車を走らせた。

他の車の流れに沿って進んだり、逆に車通りの少ない道へ入ったり、ついには橋を渡って隣の市にまで行ってしまっていた。

フラフラと行く当てもないままアクセルを踏み、前へ前へと進み続ける。

どれほど車を走らせただろうか。

時間が時間故に、俺は渋滞のど真ん中に入っていた。

帰宅ラッシュ。車も、人通りも多く、居酒屋やカラオケ店等の客引きが精を出して大きな声を上げているのを横目に俺はぼーっと前を見つめる。

耳には車やバイクのエンジン音や客引きの大声、何か悲鳴のような嗚咽交じりの叫び声……ん？

いきなり飛び込んできた異音に反応して叫び声が聞こえた方へと視線を向ける。

「だあああああ！ かあああああああ!! らあああああああああ!!! 何で俺が奢る事前提で客引きの下らねエサービス（笑）を真に受けてんだア!!! 今日激安焼肉をワリカンって話だったから付いてきたんだぞボケエえええええ!!!」
 つてか、カラオケは先週も行ったばかりだろオがよおおおおお!!!」

異常を察知してか人混みに大きなスペースが生まれていた。

その中心では困ったような営業スマイルを浮かべている客引きの男性と、頭を抱えて叫ぶ学生服の少年、その少年の学生服をグイグイと引っ張る二人の少女、を遠巻きに見ている俺含む大勢。

学生のトラブルを前についで体が動きそうになったが、背後からのクラクションが俺の意識を運転に戻した。

前を見ると、少し意識をトラブルに移していた内に前方車両が動いており、結構車間距離が開いていた。

俺は少し慌てながらブレーキから足を離して車を前進させる。

学生らしき少年少女の事が心配になったが、現状運転中かつ近くに駐車場がないせい

で、俺はトラブルが無事解決する事を祈って運転に戻るしかなかった。



優歌は自室のベッドで横になっていた。

蒼い髪が痛む事を気にせず体と同様にベッドへと投げ出し、その幼い体には一切の服をまとう事無く、淡く白い肌を露出させていた。

室内は小さな電球で仄かに照らされているだけで、人の目では僅かに物の形を視認する事しかできない。

「嫌われて、しまいましたかね．．．」

ポツリ、と口から言葉が漏れる。

頭に浮かぶのは先日の誘拐騒ぎの一件。まさかあんな事が起こるとは想定していなかった。というか出来るはずがない。

優歌はもつと昔の記憶を思い出す。

二年前の四月の事だった。

いつも通り校門前で迎えを待っていた時に突然ハイエースが目の前に停まり、中から複数人の男たちが飛び出してくる。

本能的に危険を察知して逃げようとするもすぐに腕を掴まれ、足を掴まれ、担がれるように車に押し込められる。

乱暴に縛られ、目隠しをされ、猿ぐつわをされ、その上で逃げられないように常に体を掴まれていた。

痛かった、怖かった。ただひたすら震えて涙を流す事しかできなかった。

見知らぬ部屋に押し込められ、何人かの男たちに無理やり……。

「……痛かったな、初めて」

何時間も、何十時間もひたすら恥辱され続けた。

いつしか痛みはなくなり、生存本能故か脳は受ける感覚全てを快楽へと変化させた。

地獄、と表現するにはまだ甘いだろうが、それでも辛い時間だった。痛みも、苦しきも、恐怖も、全てが快楽になる甘い地獄。

脳が、思考が、考え方が、根底から塗り替えられるような感覚すらも気持ちよく感じた。

どれほど時間が経過したかなんてとづくに分からなくなっていた。後々聞いたところによれば二日程しか経過していなかったらしい。

ただ、その時間でも幼い優歌を変えてしまうのは十分だった。

どこかで糸が切れた。ずっと張っていた糸が。そこからはある意味、地獄を味わった

のは誘拐犯たちであった。

優歌は性を貪った。ひたすらに、疲れなんて覚える事無く、視界に写る雄から搾り取って、搾り取って、搾り取り続けた。

それでも、限界は来る。幾度となく性が吐き出され、満たされた優歌は疲れが取れるまでぼーっと一点を見つめていた。——監禁されている部屋の出入り口をずっと。

絞り枯れた男たちは動かない。逃げようと思えば逃げられるかもしれない状況でありながら優歌は動かなかった。いや、逃げると言う発想が浮かばなかった。

そんな時、扉が開いた。

そこから顔を出したのは濁った黒い瞳にひねくれた表情を顔に張り付け、ロクに手入れをしていないようなぼさぼさの髪型の少年だった。

身長は優歌より一つ頭大きいくらいでそこまで年齢は離れていないように見えた。……聞いた話によれば中学生だったという。

少年は優歌を視界に入れると面倒くさそうな雰囲気を感じ、事なく言葉を発し、呆れた顔で会話を続け、嫌そうにため息を吐き、異変に気が付いて室内に飛び込んできた警備の人間を一分と掛からずに倒して見せた。

そして、苦戦しながらも優歌を抱えて脱出して見せた。

『よし、優歌。帰るか』

細目で険しい表情ばかりしていた「彼」がそう言つて見せた優しい笑顔。

それは優歌の中にあつたマイナスの感情を、マイナスの考えを簡単に吹き飛ばした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それから優歌の生活は変わった。

大人の男を見ると、臍の下・・・子宮が疼くようになった。最初こそ我慢していたがそんな行動に意味はなく、限界を迎えた優歌は目についた男を誘つては性交を繰り返すようになった。

最初はボディガードとして雇われた男たちを、次は学校にたまに訪れる父兄を、さらには教師すらも。

当たり前だが、誘われた側もほいほいと乗つかつた訳ではない。最初こそは拒否したり宥めたりしていたが、最終的には優歌の持つ蠱惑的な魅力に飲まれて本能のままにその幼い体を貪つたのだ。

そんな生活の中で出会つた二人の友人。

二人はそれぞれ違う理由で優歌のように雄を求めるようになったらしいが正直な所、優歌にとってそんな事に興味はない。

経緯なんてどうでもよかった。

ただ、同じような話題で話し合える同年代が居たと言うだけで満足だった。——三
人が纏まった事でより手が付けられなくなった大人たちが頭を抱えたのは気にしない。
優歌の親に金を握らされた学校側は優歌たちを満足させる為に人脈を使つて必死に
生贄となる教師を探した。

最初は生徒へのセクハラで刑事事件にまで発展しかけた経歴を持つおっさんだった。
初めまして、の時点で体を触ってくる等好感度はマイナスからスタートし、丁度いい
性処理道具として二週間ほど使つた辺りで書置きを残して失踪された。

次に来たのは何度も学級崩壊を引き起こし教育委員会から何度も指導を受けている
経歴を持つチャラチャラとした青年だった。

三日で枯れた。

八人くらいを消費した辺りで雇われたのは芋っぽい女教師だった。

三十路を過ぎていのに男性経験ゼロで地味な恰好に堅物な性格、学校側も色々と対
策を講じて来ている事にすぐに気が付いた。ので監禁して快樂漬けにした。

処女を奪わなかった自分は優しいと優歌は思っているが、何で女教師が学校に来なく
なつたかは知らないし興味もない。

そうこうしていると二年と言う時間は割とあっさり流れた。

教師潰しが二桁を超えた辺りで面倒くさくなり数えるのは止めていた。というか何で数えるようにしていたのかも忘れた。

次に来る教師に期待していたのは無尽蔵の性力と体力。望むなら清潔感も欲しかった。

そんな優歌の前に現れたのが月城だった。

誘惑を流された。無理やり襲っても簡単に切り返されてその後に求めてくるような事もされなかった。

呆れた顔を見た。溜息を吐かれた。ガチトーンの説教をされた事もあった。

それだけでなく、優しく微笑む顔も見た。

どこか安心感を覚える柔らかい笑顔。……優歌の目には、あの地獄に現れた少年が浮かべた笑顔と重なって見えた。

誘った。煽った。触った。重なるうとした。

それでも月城は揺らがない。動揺する事はあれど頑なに『教師』として対応しようとしていた。

だから気になった。だから知りたくなかった。——だから、調べた。

「んっ……」

寝返りを打って勉強机に視線を移す。

月城に関しての情報が書かれた資料が乱雑に置かれている。

暗い過去。辛い過去。苦しい過去。誓い。想い。願い。決意。

どうやって調べたかは知らないが、かなり詳細まで裏付け付きで書かれていた。

それこそ、読んでいるだけで少し気分が重くなるような情報までも。

今以上に近づきたいと思った。自分の傷を埋めて欲しい、そして自分も傷を埋めてあげたいと思った。

自分を今以上に知って欲しかった。受け入れて欲しかった。

だからこそパーティーに誘った。だからこそ知り合いに紹介するように連れまわした。だからこそ少し強引に迫った。

結果がアレだ。

優歌と居るとトラブルが来ると思われたかもしれない。距離が出来てしまったかもしれない。嫌われたかもしれない。

そう思うだけで胸が苦しくなる。自然と涙が出るほど辛く感じる。

「先生……」

ポツリ、と溢れる声。

「先生、先生……」

真面目にプリントを眺める顔が浮かぶ。

「先生、先生、先生……」

優しく褒めてくれた顔が浮かぶ。

「先生、先生、先生、先生……！」

優しく撫でてくれた温もりが、優しい笑顔が浮かぶ。

「先生、先生、先生、先生、先生、先生、先生……！！！」

求めたい。月城の胸に顔を埋めて、その体に沈んでいきたい。

それでも駄目だ。

自分では負担をかけてしまうだけで月城を癒す事なんて絶対にできない。できる訳が無い。

所詮、優歌は日本有数の財閥の一族と言うだけであり、その本質は単なる子供。どれだけ背伸びをしようともその事実が変わる事は決してない。

ボロボロと涙があふれる。

身体を震わしながら嗚咽を漏らす。

まだ、夜は更けていく。

31話 『悩み』

街を歩く。

夜が更けていくが、それを気にする事なく、当てもなく。

先ほどまでは人込みでござった返しだった道も、直ぐに人影はまばらになりスムーズに道を歩けるようになった。

腕時計を確認すると既に二一時を過ぎており、普段なら家で授業の予定表を更新している時間なのだが、帰る気になれない。

そのまま一〇数分ほど歩きながら頭の中を整理していると進行方向の方が騒がしい事に気が付いた。

何かあったのかと思い、野次馬根性で向かってみると、目を疑う光景がそこにあつた。蝶を模つたであろう髪飾りで髪を纏め、秘部を僅かに隠しただけの際どいボンテージ衣装を身に纏いカツカツとヒールを鳴らしながら歩いているマコトと、パンツ一丁で手足を縛られて目隠しをされ猿ぐつわを銜えている金髪の男性。

想定外の方向からの情報に俺の脳の処理能力が限界を迎える音がした。

何も言えずに唾然としてしていると、俺に気が付いたのかマコトが大きく手を振りながら

向かつてきた。

「おっ！ 月城じゃ〜ん！ こんな所であるなんて珍しい事でもあ〜」

「ヒトチガイデス」

咄嗟に、片言で否定の言葉を出す。

こんなのと知り合いと思われたくない。そんな精神が反射的に働いたのだろう。

だが、マコトは気にする事なく言葉を続ける。

「普段の君ならこの時間帯は家で明日の授業の準備をしている頃だろう？　．．．いや、

明日は休日だったかな？　駄目だねえ。休みが安定しない仕事をしていると曜日感

覚つてのが酷いくらいズレてしまう。．．．まあ、いいか。明日が休日かどうか以前に

君がこの時間帯に外を出歩いている、しかも隣の市を．．．って所だけでも十分珍しい

部類に入るんだから。それにまるで想像だにしないとんでもない物を見て心底ドン引

きしている表情を浮かべているんだ。相当の事があつて気分転換でもしていたんだろ

う？　そこは昔つから変わらないねえ。覚えているかい？　私たちがまだ高校生だつ

た頃、君が同学年の女子に告白されて『どうやって無難に断るか』と悩んで悩んで悩み

まくつた結果、思考に行き詰つて気分転換に散歩に出て、金曜日の夕方に家を出て日曜

日の朝まで町中を歩き回つた事。いやあ、流石にあの出来事は今思い出しても笑える

ねえ。しかも君はそんなに時間が経過していると気付いていなかったなんて言つたん

だ。こんな傑作な話は中々存在しないんじゃないかな？ ほらほら、ここで会ったのも何かの暗示だ。私^{オレ}が家まで送ってやるよ。じゃないと過去の二の舞・・・いや、それ以上の上の事になってしまいかもしれないんだから」

「・・・・・・・・・・」

「おや？ 急に表情が変わったねえ。・・・もしかして私^{オレ}と会った事で今抱えてる難題に關して何か突破口でも見つかったかな？ それだったらこつちとしても樂で嬉しいなあ。君は変に深く考えるせいで外部からの説得が難しいんだ。自分で氣付いて納得してくれてるならこつちに負担はないからね。・・・って、おいおい人の話を無視してどこに行こうって・・・・・・・・あつ！ 覚えてるぞ！ 君のその走り方は全力疾走する時のやつだ！ ちよ、待て！ マジで待つて!!」

俺は周囲からの視線から逃れる為に必死に足を動かす。

背後からはマコトの声が聞こえてきているが、それを無視して走り続ける。

普段なら兎も角、あんな姿のマコトと一緒にいるのは流石に俺の羞恥心が耐えられると思えない。

より正確かつ簡潔に言えば同類と見られたくない。

とりあえず、体感一〇分程走ってマコトを撒いた事を確認出来てから足を止めて息を整える。

「つ、はあ……。一体何だったんだよ……」

会う度にラフな格好をしているのは理解していたが、まさかあんな姿で平然と街を歩けるぐらい羞恥心という物が欠如しているとは思わなかった。

しばらくは顔を合わせたくない。そう感じながら俺は道を歩く。

先程の事で張っていた緊張が解けたのか、腹の虫が鳴き始めた。

時計を見ると普段ならもう食事を終えている時間であり、空腹なのは当然の事だろう。

スマホを取り出して地図アプリから近くの飲食店を適当にピックアップしてそこに向かうことにした。

向かった先は有名なファミレスチェーン店。その食事ならハズレはないだろう、と思いつながら店に入る。

「やあ！ ここに来ると思ってたよ」

そして、入り口から死角になっている場所からひよつこりと顔を出したマコトの姿に驚き、絶句して立ち尽くしてしまった。

服装は先ほどもまでのボンテージ衣装ではなく、青いジャージ姿であり、何故か頭いさ耳を付けていた。

驚きのあまり固まってしまったその一瞬の隙を突かれ、手首を掴まれる。

「やあやあ、待ち合わせの時間から五分以上経過しているぞお。本来なら怒る所だけどその汗を見る限り急いできてくれたんだろう？ いやあ、嬉しいねえ。ほらほら、もう名前は書いてついさつき呼ばれたから席に向かおうじゃあないか」

「待て待て待て待てm、

「良いから話を合わせろ」

思考力が戻ると同時に慌ててマコトの手を振りほどこうとしたが、その細い腕に見合わぬ程の力で握られた上に絶対零度の視線と低く迫力のある声でそう言われ、情けない事に委縮してしまった。

その間に奥のテーブル席の方へと連行された。

ニッコニコと笑っているマコトを前に俺はげんなりとしつつも疑問を口にする。

「何でここにいる」

「誤解を解く為に、かな？」

「誤解って……」

マコトは腕を組んで椅子の背もたれにずしつと体を預けてから答える。

「さっきのアレはあの大バカ者へのお仕置きであつて私の趣味じゃない。……君に『マコトにはあんな趣味がある』なんて思われた日には私は首に縄を括る自信がある」

「……まさか、それを言うためだけに先回りしていたのか？」

「ははは、あつたり前じゃあないか。逆にそれ以外に理由なんているかな？」

「はあ……。呆れて何も言う気が起こらない。ってか、お仕置きって何があつたんだ？」

「……まあ、言いたくないならいいけどさ」

「うん、言いたくはない」

マコトはそう言いながら顎に手を当てると、少し沈黙してから口を開く。

「あまり言いたくはないが、コツチ的にちよつとしたごたごたがあつてね。……正直に言つてイライラしてる。あまり褒められた行為じゃあないけど相手の鼻を明かしたい気分なんだ」

「……つまり？」

「少しだけ口を滑らそう。君について嗅ぎまわっていたイタズラっ子のお話を、ね」

そう言つて笑うマコトの顔が、悪だくみをしているイタズラっ子の顔そのままであつた事を指摘しようかと一瞬悩んだが、直ぐにその思考を放棄する。

ここ最近の疲れもあるし、ここ数一〇分の事だけでも結構疲れたのもあつて、これ以上マコトの話に問答する気も起らない。

なら、マコトにさつさと話をさせた方が早い……と思う。

俺は軽いため息を吐きながら腕組みをして、マコトの話に耳を傾けた。



インターネットの発達及び普及という物は著しい。

電文、文通、通話、そしてチャット。遠くの間人とのコミュニケーションの取り方も大きく変化した。

ちよつとのネット環境さえあれば子供でもボイスチャットくらいなら簡単に行える。「で、先生と優歌ちゃんの間は何があつたと思う？」

茜は指でコントローラーのボタンを弾きながらそう呟く。
画面ではプレイヤーキャラが巨大な剣をモンスターに振るっている。

他にも、弓を引いているキャラが攻撃のサポートをしており、見事な連携がそこにはある。

『何かって……。うん、確かにお互いによそよそしいよね……。』
イヤホンから波奉のスムーズな返事が返ってくる。

普段のおどおどした口調と大きく違うが、茜にそれを気にした様子はな

波奉は、対面での会話は苦手だが電話やボイスチャットのように顔を合わせない声だけのやり取りならスムーズに会話できるタイプなのだ。それを知っているからこそ波奉は平然と話を続ける。

「少し前だったらアタシたちと一緒に先生をからかったりしてたのに最近はそのままで乗り気じゃないっていうかさあ」

『毎度毎度、注意されたり反省文書かされるから自重しているとか?』

「優歌ちゃんはその程度でやりたい事を躊躇するような性格じゃないと思うんだけど……」

『まあ、そうだよね……』

沈黙が訪れる。

ゲーム機のスピーカーからはモンスターの咆哮が鳴っており、プレイヤーキャラは耳を塞いで動けなくなっている。

回避のミスに少し焦りボタンを押しながら、茜は呟く。

「もしかして、アタシたちを仲間外れにして一線を越えたとか?」

『ぶっ! えっ?! 嘘っつ!!? 先生とヤっちゃったのっ?!?』

「声おっきい」

『あう……。ごめん……。』

二人はボタンを弾いてモンスターにダメージを与えながら会話を続ける。

「……もし、二人に何かあったとして気まずい関係になっちゃってるなら、アタシたちも少しだけ自重した方が良いのかな……?」

『へ?』

「何よ、そのあり得ないものを見た時に出すようなすっぱんきよーな声は」

『あ、いや・・・その・・・。茜ちゃんが自重なんて言葉を知っててそれをしようつていう考えに至れるのが予想外で・・・。あと、「素っ頓狂」だよ』

「はっちゃんはおアタシを何だと思ってるわけ? 自重したり我慢したりなんてできるに決まってるじゃない」

『ええ・・・。てつきり性欲大爆発系の淫獣だと思ってた・・・』

「よーし分かった。最近買ったエッグイ形のデイルドを学校に持って行ってやる」

『やめてえええええ!!』

「あつ」

『あつ・・・飛鳥文化アタックううううううう!!!』

波奉の意識が画面から外れた瞬間に、モンスターからの攻撃が波奉のプレイヤーキャラに直撃し、満タンだった体力が一瞬で溶けた。

遠距離武器用の装備故の防御力の低さと、エンドコンテンツクエストという高火力が重なって一瞬で状況が崩れたのだ。

二人は慌てて戦況を立て直すとするが、茜も殴り倒され、復帰した波奉はエリア移動をしたと同時に高威力のプレスで消し飛ばされてクエストが終了した。

32話 『英雄のヒロイン』

「つと、まあそんなこんなで優歌ちゃんを監禁場所から救出されて表面上は無事に両親の下に送り届けられ、彼・・・『正義の味方』の名前がコッチ界限で頻繁に上がるようになった一件はひとまず幕を下ろしたのさ」

マコトはそうやって話を終わらせる。

嘘みたいな話だった。嘘だと思いたいような話だった。

だが、マコトの真剣な瞳が話に嘘がないという事をひしひしと感じさせる。

「つ・・・。んだよ、それ・・・」

「つい二年ほど前にあつた実話さ。・・・今思い返すと、アレ以来『正義の味方』のせいで仕事がつらくなつたねえ」

「・・・。なあ、優歌の過去話とお前がイラついてる事に何か関係があるのか？ 正直に言つて繋がりが分からないんだが・・・」

「以前に話しただろう？ 君の事を嗅ぎまわっているヤツがいるって」

「ん・・・？ ああ、そういうえげそんなことを言つてたな」

一ヶ月ほど前だったか。マコトに呼び出されてそんな話をされた。

今そのことを言われるまですっかり忘れていたが、これを話に挙げるといふ事はマコトがイラついている事の原因の一つに俺が含まれているといふ事だろう。

ヒント自体は少ないが大まかに状況の把握はできた。

「…探つてるヤツらを追い払つているとか言つてたが、追い返しきれなくて情報を持つていかれたつて所か」

「まあ、そんな感じ。…さつき私が引きずつていた男がいただろ？ アレが君の過去を探つてその情報を盗み取つていつた上にしばらく雲隠れしていたパチカス」

「お仕置きつてそう言う事か」

「そそ。そゆこと」

マコトはククク、と楽しそうに笑う。

先ほど、コイツは「あれは自分の趣味じゃない」とか言つていたが正直な感想を言うところいつの趣味だったのだろう。

どんな理由があれば、相手を縛り上げて街中を引きずり回す、だけならまだギリギリ目を瞑つてもいいだろうが、残念ながら自らもあんな際どい姿をしている時点で確実に趣味が入っているとしか思えない。

「しっかし、俺はただの教師だぞ。そんな俺について調べてるのはどこの物好きだよ」

「早川優歌ちゃん」

「つあ~~~~~」

声にならない声を上げ、顔を手で押さえながら俯いてしまった。

頭の中に浮かんだ単語は単純明快、「アイツか」である。

最近よそよそしい理由、それを『あの一件』が原因だと思っていたが、それにプラスして俺の過去について知られたとなると話が大きく変わってくる。

「.....」

「随分と難しそうな表情をしているね」

「生徒に気を使わせるなんて、教師失格だな」

「うくん、そつちかあ。君ってどこかズレてるよねえ。そこは自分の過去を知られたことに重きを置くべきだと思うよ」

ケラケラと少し小馬鹿にするような口調でそんな事を言ってくるマコトに俺はため息交じりに返答する。

「教師が自分優先で生徒に負担賭けてどうするんだ。生徒たちの成長を促すのが仕事で、生徒が潰れないようにサポートして支えるのが役目だ」

「.....それって、『彼女』がそうだったから？」

その返しに俺は無言で意思表示をする。

答えるまでもない事をいちいち口にする趣味はない。

「君の生き方を否定する気はないけど、肯定もできないからね。．．．それで、どうするつもり?」

「どうする、つて?」

「一歩、踏み出す時なんじゃないかな? 君は『教師』だの『生徒』だので線引きをしているだろ? 別にそれを悪い事だとは言わなけど、彼女たちからしたら快くはないんじゃないかな?」

「．．．．．」

「まずさ、君が作っている『教師と生徒』という壁をほんの少しだけ低くしてみたらどうかな? 『誘拐事件』・『家族へのコンプレックス』・『家庭内不和』、私^{オレ}だって君の事を気にかけて色々調べたんだぜ。君が『教師』なら『生徒』の問題を取っ払って心の傷を癒すのも仕事じゃないかな? 今の君は目を逸らしていると感じちゃうなあ」

「．．．．．そう、だな。目を逸らしていたのかもしれない」
マコトに言われた言葉を頭の中で反芻させる。

確かに「『生徒』の問題を取っ払って心の傷を癒す」のも教師の仕事だろう。

無論、それを行えない教員がいる事だつて分かっているし、全教員がそれをこなすべきだとも思っていない。

ただ、特殊学級かつ受け持っている生徒数が少ない分、俺は他の教職員と比べて仕事

量や負担は圧倒的に少ない。

それなら、その余裕を使って今まで以上に向き合う事に使うべきなのかもしれない。

「おっ！ 表情が変わったねえ。．．．これからどうするのかな？」

「向き合い方を考えるよ。．．．少しは俺も変わらないと駄目だ」

「につしつし。そういうと思った。よし、ここは君の成長祝いとして私が奢ろうじやあ

ないか」

「いや、さすがに割り勘だろ」

頬を膨らましてぶーぶー言っているマコトを無視して俺はメニュー表を手取る。

先ほどまで感じていなかった空腹を感じ、自分の胸の中にあつた突っかかりが取れた感覚に少し前向きになれた気がした。



グビツ、と缶ジュースを飲み干して空き缶を投げる。

空中へ放物線を描いた空き缶は見事にゴミ箱のふちへと当たり、近くの芝生に転がる。

少年は苦虫を噛みつぶしたような表情を浮かべて溜息を吐くとゆっくりと空き缶の

方へと向かって歩く。

だが、少年が空き缶の下へ着くよりも前に、誰かがその空き缶を拾ってゴミ箱に入れた。

「やあ、久しぶり」

空き缶を拾った人物——マコトはそう言いながらヒラヒラと手を振る。

「アンタは……えつと、なんだっけ？ 確か……そう！ TS野郎っ!!」

「合つてはいるけど私の名前^{オレ}は思い出せていないだね……。まあ、覚えられるのもあまり良いとは思えないしそれでいいよ。こうして会うのは何時ぶりかな？ ……

『正義の味方』」

「ハア……。喧嘩売ってるんだとしたら速攻で買うぞゴルア」

「おやおや、何がお気に召さないのか」

「俺は『正義の味方』じゃない。ただの学生をいい大人が変ちくりんな呼び方すんじやねえよ」

ニヤニヤと笑っているマコトを『正義の味方』と呼ばれた少年はギツとにらんだ後に深く息を吐く。

「それで？ 要件はなんだ？」

「君つてNTR趣味はある？」

「えぬていーあーる．．．？ え？ 何．．．？ 俺、一四歳だぞ。未成年に何聞いてんだ．．．．．」

「いや、なあに。君のヒロインについて色々あつてね。『んっ．．．♡ ごめんな、さいつ．．．♡ 私はもうこの人のモノじゃないとっ♡ ダメなのっ♡♡』的な展開は好みかい？」

「えつと、何言つてんだオマエ．．．？ 俺に恋人なんていないし、好きなやつもないが．．．？」

「あつ、ホントに理解してないなこの子」

眉を顰めて体を少し縮め全身からドン引きしている雰囲気を出している少年を見てマコトの口からは自然とそんな言葉が漏れていた。

「えつとね、優歌ちゃんに好きな相手ができたの」

「ほー、そりやめでたい事で」

「多分肉体関係にもなるよ」

「おいおい、アイツはまだガキだろ？ ガキに手エ出すとかどんな物好きだよ」

「君も十分ガキだと思うけど．．．。えつと、嫉妬とかはないの？」

「．．．．．？ 何で俺が嫉妬する理由があるんだ？」

「わあすつごい。この子ホントに理解してないパターンだ」

キョトンとした顔をしている少年の姿にマコトの口から再度そんな言葉が漏れる。

困惑するマコトを他所に少年は腕を組んで思考を巡らせていた。だが、数秒で思考を放棄して終わらせる。

無駄なことを考えない主義——というよりも考える事が嫌いな少年は余程緊迫した状況でもない限り無駄に脳みそを働かせないのである。

「だってアレじゃないか。彼女が誘拐された時に、誘拐犯の本拠地に乗り込んで見事彼女を救い出したのは他でもない君じゃないか！ ほら、アニメとか漫画ならここからフラグが立ってヒロインとして関わるようになる鉄板パターン、

「フィクションと現実の違い」

少年はマコトの言葉をバツサリと切り捨てる。

後頭部をボリボリと搔いて、首をグルリと回し関節を鳴らしてから少年は言葉を続けた。

「くっだらねえ。そんな事で話しかけて来たんだとしたらお前相当アフォだぞ。助けたからフラグが立つ？ 他人を救助したら運命の赤い糸でも繋がるのかよ。だとしたら警察・消防・医療従事者はハーレムでウハウハじゃあねエか。馬鹿な事言っただけでマトモな職でも探しとけTS野郎」

「わー、オブラートって知ってる？」

「包んでるが」

「だとしたらどんな暴言を吐くつもりだったのかが気になってくるぞお」

「・・・確かに、俺はアイツを助けたさ。だがな、結局は『助けただけ』なんだよ。それ以上でもそれ以下でもない。そして、アイツの人生に俺が口を出す権利はどこにもない。オレとアイツの人生にはたまたま交わる部分が合ったってだけで、それ以上に強く干渉する意味や理由はこれっぽちとして存在しねエ。好きなヤツができた？ よかつたじゃねエかよ。むしろ何でソレが『NTR』になるんだ？ 俺がモテたくて誰かを助けているとも思ってるのか？ だとしたら人の事を馬鹿にしすぎだ」

少年は刺すような鋭い視線をマコトに向ける。

「デメエ、そんなに俺と戦やりたいのか？」

「いやいや、君と争うつもりはないよ。私オレだって馬鹿じゃない。君と敵対して得られるメリットなんて極僅か、・・・デメリットの方が多いんだからさ」

「ハア。・・・そうかよ」

そう言いながら少年はダラリと全身の力を抜く。

臨戦態勢であり、いつでもマコトへ攻撃を仕掛けられるようにしているのだ。

狂犬、そんな言葉が頭に浮かんでくる程に好戦的なその姿、黒く濁った瞳と白い獣のような牙はマコトに冷や汗をかかせるのに十分な迫力を持っている。

「……うん、君の言った通りだ。君は『正義の味方』じゃないね。……気に食わない人間をぶちのめす、己の気分だけで盤面を狂わせてしまう……狂わせてしまえる理不尽。——『救いの英雄』っ!!」

「その絶妙にダサイ呼び方も止める。俺にはちゃんとした名前があるんだよ」

少年はそう言うと同時に姿勢を低くして足元にあつた石を掴むと全力で投擲する。

その石はマコトの背後にいた男の顔面と真ん中を捉え、その意識を簡単に刈り取つた。

「……それで、今回は何をやらかした？」

「ハッハー。心当たりが多すぎてわからにゃい」

「クソが。優歌の事なんて口実で俺を巻き込む為に接触してきたこのTS野郎っ!!」

少年が叫ぶと同時に物陰から複数人の男が姿を現す。

構えを取る二人の周りを男たちは円形に囲むと一気に襲い掛かった。

「なーんで、俺はこんな事に巻き込まれなきゃならねえんだああああ!!」

「私^{オレ}を見捨てておけばよかったのにねえ」

「んな選択肢は最終手段だ。初手から助けられるかもしれない人間を見捨てる程、人間終わってねえわ!」

「アツハツハツハ! さっきの撤回を撤回しよう! 君はやっぱり『正義の味方』だよ

！
」

「流れ弾でぶん殴られたくなきや口閉じとけ!!」

乱闘をしながらもそんな軽口を叩く二人。

月明かりが照らす公園の一角で喧嘩が行われているのと同時刻。

「ちよつと特別自習でも設けて優歌と二人つきりで話し合ってみるか・・・」
何も知らない月城はそんな事を呟いていた。

33話 『一步』

「次の授業は自習を行う」

俺は授業終了のチャイムが鳴り終わると共にそう宣言する。

スケジュールでは国語をする予定であったが、休みの間に調整をして何とか時間を空けた。

理由は当然、早川と面談する為だ。

「……………それと、早川」

俺が名前を呼ぶと、ビクリツと早川の肩が震えた。

「あ……………、ちよつと面談したいから付いてきてくれないか？」

「……………はい」

早川は、か細い声で返事をして席から立ち上がる。

桃知と暗視がどこか心配そうな表情を浮かべているので俺は平静を取り繕って伝える。

「明日、明後日はお前たちとも面談する予定だからそのつもりでいてくれ。自習中は何をしても良いがトイレ以外で教室から出ないように」

「はーい……」

「んっ……」

ジト目になりながらも返事をする早川と、コクコクと首を縦に振る暗視。

俺はそつと二人から目を逸らすと、軽く深呼吸をしてから教室の扉を開き廊下に出る。

早川は無言で俺の後を付いてきているが、その表情はどこか暗く視線は下を向いている。

面談室へと入り対面するように座る。

まっすぐ早川を見つめる俺と対照的に、早川は視線を下げて体を小さくしてしまっている。

ごくり、と唾を飲む。

俺が今からやろうとしている行為は教師としての行動とは言えないだろう。『俺』という個人として早川に向き合う、そんな行為だ。

重々しい口を開き、言葉を発する。

「俺の過去について調べていたらしいな」

瞬間、早川の肩が大きく震え、その後細かい振動を繰り返す。

俺はできるだけ優しい声で問い掛ける。

「なあ、早川。どうしてそんな事を・・・、」

「知りたかつたんです」

言い終わるよりも前に早川が答えた。

「先生の事が知りたかつた。教師としての強い拘り、意地でも教師でいようとしている姿勢、私たちをまつすぐ見て受け止めようとしてくれる真剣さ、時折見せる優しい笑顔とそこにちらつく影のようなもの・・・それが知りたかつたんです」

「なんでまた、そんな事を・・・？」

「重なつたんです」

早川の言つたその言葉の意味が分からなかつた。

『重なる』、という事は俺の行動・言動の何かに既視感を持つていたのだろうか。

無言のまま次の言葉を待つこと数秒。嫌に長く感じた沈黙の中で早川が語り始めた。

「私、過去に誘拐されたことがあるんです」

「・・・知つてる」

マコトから聞かされた事だ。

二年前に発生し、表沙汰になることが無かつた事件。

早川のご両親も、警察も、結局事件の真相は知らないままで終わつたという謎だらけの事件。

分かつている事は、『正義の味方』が早川を救出して親元まで送り届けたという結末だけ……らしい。

「以前、お話しした私を救ってくれたヒーロー……あの人は笑顔でした。柔らかくて、優しい笑顔で私を安心させくれました」

「……そうか」

「会った事も、関わった事も、何の繋がりもなかったのに私を助ける為に必死で、体を張って戦ってくれました。それこそ、物語の中で戦う本物の英雄のように……」

早川は少し唾を飲み込んでから話を続ける。

「あの時の私にとって、あの人の笑顔は太陽のように思えました。でも、その輝きには影がありました。……暖かいのに、どこか無理して作っているような辛そうな笑顔。……先生の笑顔もそうでした」

ドクン、と心臓が音を鳴らす。

俺は深い深呼吸をして気持ちを落ち着ける。

ここからだ。早川の『理由』が俺の中に踏み込んで来る。

「私たちに向けてくれた笑顔。他の教師の方々と違いまっすぐ私たちを見てくれた瞳。そこにあの人と同じような影を見ました。暗く、重く、冷たい影。だから、知りたくなっただけです。その影の正体を」

「それで、俺の過去を調べたのか」

「……はい。それで、知りました。なんで先生が教師を目指したのか。なんで『教師』という立場に強く固執しているのか。先生に付きまといっている女性の事も含めて……」

「そうか……」

また沈黙が訪れた。

早川はとでも辛そうな、今にも泣きそうな表情をしている。

ダメだ。これじゃダメなんだ。

生き残ってしまった俺が、生きる事の出来なかつた「彼女」がしたかつた事を、できなくなってしまうた事をちゃんとこなさなきゃいけないのに。

俺は勢いよく頭を下げる。額が机に当たって嫌な音を立てた。

「すまない。そんなに気を使わせていた事に、そんなに悩ませてしまっていた事に気がかなくって。早川の事を、もつと……ちゃんと見ていなくて、本当に申し訳ないっ！」

「な、なんで先生が謝るんですか!!?」

ガタツ、と音を立てて早川が席方立ち上がる。

その表情はどこか驚いているようで、どこか困惑しているようで、俺がなんで頭を下げたのかが分からない様子だった。

だから、俺はハッキリとその言葉を表に出す。

「お前の・・・お前たちの担任だからだ」

まだ、この言葉には一線が引かれている。

俺はここから一步前へと踏み出さなければいけない。教師としてだけでなく、一人の人間として成長するためにも。

だから、俺は言葉が続ける。

「一度でも教鞭を執って、お前たちに『先生』として見てもらつたんだ。だつたら、俺はそれに応える義務がある。お前たちを受け止める責任がある。・・・『教員』としての使命だけじゃない。人として『次』に繋げるために。少しでも良い方向へ導くために」

早川の目をまっすぐ見ながらそう宣言する。

視線を逸らしたりはしない。受け止めて、受け入れる。

もちろん限度はあるが、俺の可能な限りはいくらでも抱き留める。

それができないのなら俺は“彼女”に顔向けができなくなる。

ジツ、と早川の顔を見つめる。早川は目を丸くして驚いた表情を浮かべていたが、すぐにその表情が柔らかくなった。

「ふふっ、先生つてやっぱりどこかズレてますね・・・。やっぱり、先生は先生です」

「こゝ、こゝれでも結構真剣に考えたんだが・・・」

失敗したか、と思い内心焦っていると、早川が上目遣いで聞いてきた。

「……先生、受け止めてくれるんですよね？」

どこか妖艶な笑顔を浮かべながら早川は不敵にそう言った。

俺はゴクリと唾を飲み込み、深く息を吐いてから静かに答える。

「俺に、可能な事ならな……」



『自習』。一文字変えれば『自由』。

小・中・高のどこでも教師の目がない自習時間とは実質的な自由時間である。

騒いだりせずに教室内に留まるのであれば学習なんぞすつぽかす者が大半と言っても過言ではないだろう。

そんな自習を命じられ、茜と波奉は教室で気ままな時間を過ごす——なんて事は無い。

「ねー、はっちゃん。そっちはどんな感じ？」

「ひ、ひゃ、一〇〇個突破……したところ」

「(こっちも同じ感じ)」

二人は携帯ゲームに視線を向けたまま軽く言葉を交わす。

画面内では自転車に乗ったプレイヤーキャラが同じところをぐるぐると走り回っている。

「ね、ねえ……、茜ちゃん……。大丈夫かな？」

「大丈夫って、何が？」

「じ、自習終わり、までにさ……。色違いのテッ○ード出る、かな……。？」

「出るじゃない。出すの」

「でも、その……確率的にさ……。？」

「出るまでやれば実質一〇〇パーセント」

「確率論が壊れちゃってるよお……。？」

真顔でとんでもない事を言う茜と、その発言を聞いて波奉は涙目になる。

いつも通りの、悪く言えばくだらない、良く言えば仲が良いからこそできるそんな会話だが、今日はいつもと違って言葉に覇気がない。

それもそのはず、普段はここに居る友人がいらないのだ。しかも、今は担任教師と二人つきり。

いったい何が起こっているのかと考えるだけで思考がぐちゃぐちゃになる。

二人は現状、欲求不満なのだ。

今までなら、赴任してきた教職員は一週間と経たずに誘惑に負け、都合の良い性処理道具として使い潰していたのに、現在の担任教師は強情で固くまで浮ついた所もなく、もんもんと発散できない欲求だけが溜まり続けている。

嫌な考えが浮かぶ。

もしも、もしも今この場にはいない友人が抜け駆けをしてしているのだとしたら、そう考えるだけで胸がムカムカとする。

ムスツ、とした表情の茜とは対照的に、波奉はどこか落ち着いた表情をしている。

「せ、先生と優歌ちゃんの手が心配なのは、わ、分かる、けどさ……。優歌ちゃんの事、一番よく知ってるのは、茜ちゃん、だよね……。？」

「そう、だけど……」

「そ、そそ、それなら、さ。信じて、待つてようよ」

ぎこちない、それでいて優しい友人の笑顔に茜も毒気を抜かれる。

「うん。……ありがとね、はっちゃん」

「えへへ……」

「それじゃ、孵化作業に戻ろっか」

「……少し休まない？」

「今休んだでしょ？ 何言ってるの?？」

「短い雑談は休んだとは言わないよぉ〜」

茜の発言に、普段のどもり口調はどこへやら、波奉は涙目で休憩を要求する。

二人はその後も雑談を続けながら友人と担任の帰りを待つ。

不安が完全に消えた訳ではないが、友人を信じていつも通りの時間を過ごすのだった。